婦人運動

8月號

職業婦人社發行

第7卷 第7號

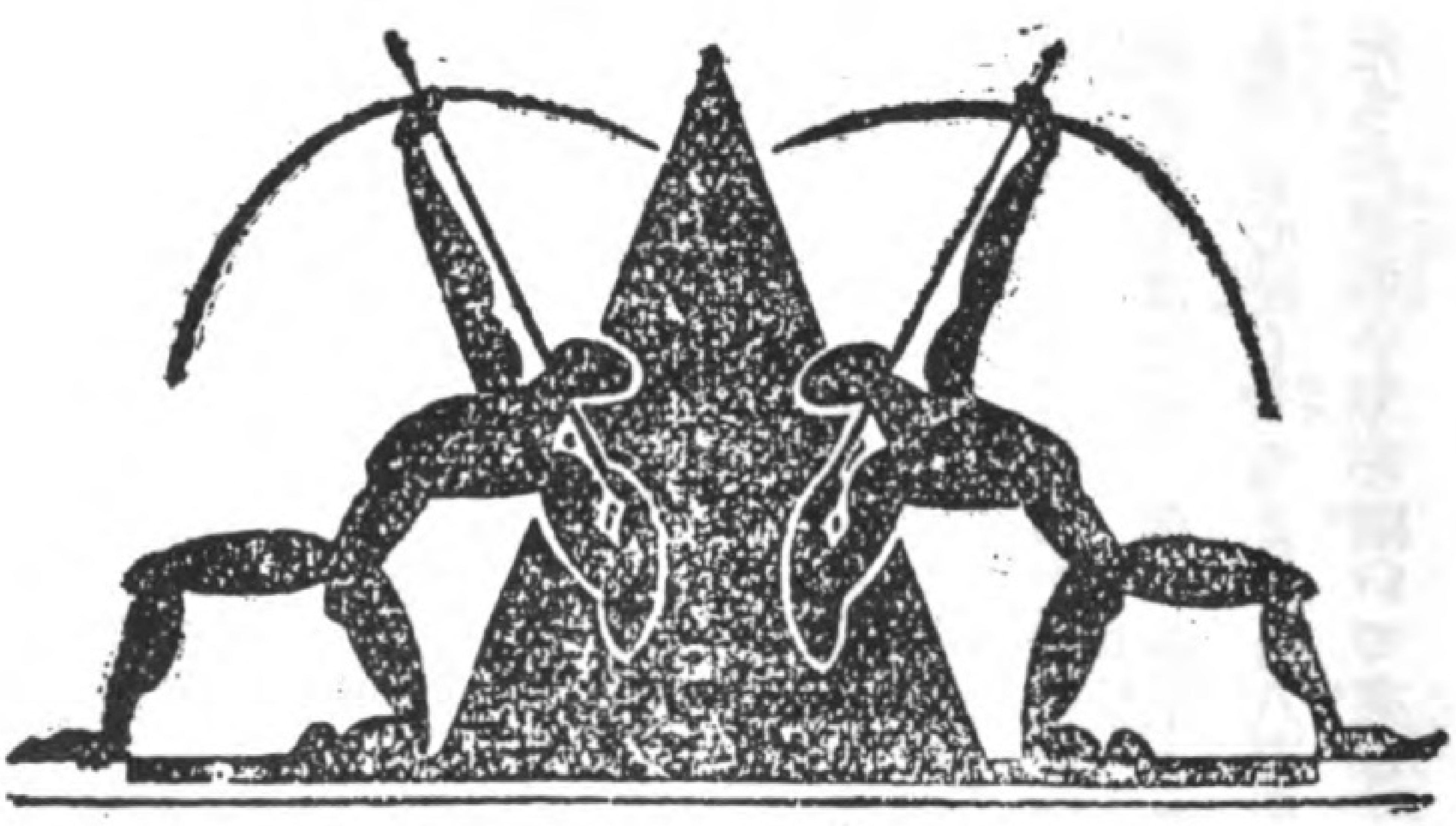

森永ミルクキャラメル
一個五錢・十錢
健康への
安全地帶
右・危險！菓子に御注意
左・安全！森永に御留意
（一）原料の精選による美味と滋養
（二）完全無缺の衛生設備
この二大特徴を有せる本品！
毎日の御愛用は健康への安全地帶です。
K.35

婦人運動　八月號　第七卷第七號　目次

婦人運動

第七卷　八月號

燒きつくやうな夏の日
工場て　野良て
會社て　事務所て
役所て病院て
臺所て
働いてゐる婦人
皆んなて
皆んなの自由を取返しませう
いゝえ、與へられるのてはありません
奪ひ返すのてす。



婦人の解放と政治と

たちばな・盈子

家庭婦人よ、職業婦人よ、勞働婦人よ！、政治はあなたにどんな關係をもつてゐるでせう？

恐らくあなたは答へるでせう。「私は職業、家事の世話、子供の面倒と、いろ〳〵な仕事をたつぷり持つてゐます。この忙しい私たちを、どうぞ政治なぞで煩して下さるな。政治なんて云ふことは、働く必要のない有閑婦人か、何にも心配ごとのない娘さんや獨身もののすることです――」と。

さうです。あなたの云ふことは本當です。あなた一人ではない大多數の婦人は、三重の負擔を、卽ち職業と、家事と、子供の世話と云ふ三つの重い荷物に壓しつぶされてゐます。あなたはもう、人間の生活をしてゐるのでなくて苦しめられた勞働動物として生きてゐるだけです！　あなたには休養の時間なんてない。否、腹一杯眠る時間さへないのです。一冊の書物を讀むことは愚か一枚の新聞をよむ事だつて、ゆつくりと手紙を書く事だつて出來ないぢやないですか。況して――良い音樂を聞きに行つたり、活動寫眞をみに行つたり、する暇のあらう筈がない。

あしたは天氣がよささうだからもつと精を出して洗濯や張り物をしなければならぬと明日の豫定を立て乍ら、さあ今日も胡瓜の漬け物に御茶漬だが、何か安上りに變つたものが出來ないかなあ、と心配し、ちよつと八百屋まで買ひ物に行くにも子供たちがぞろ〳〵と從いて來るか、さうでなかつたら、ルス中に子供たちの上に何か變事が起りはせぬかと心配する。そんなことばかりがあなたの心を一杯に占領してゐるのですから、「だから私は政治なんかに關係し

てゐるヒマはないのだ」と考へるのにムリはありません。

ところで、あなたは家の經濟が下手だとか、錢勘定を知らないとかいつてよく叱られ、あなた自身すら屢々さう思ふやうですね。「こんなに貧乏ばかりしてゐるのは、やつぱりやりくりが下手だからなんだわ」と。

然し、家賃を出した殘りの幾干から毎日のお惣菜を買ひ子供の月謝を出し、着物を買ひ、下駄と靴を買ひ、炭薪瓦斯料電燈料を拂ひ、等々するあなたより上手な會計係があるでせうか。朝起きても夕方歸つても据へ膳で腹一杯にたべて、勤めさきの机にもたれて「呑氣な暮し」を考へてゐるやうな男たちと、一體どちらが上手な會計係でせうか？

若しあなたが、なほ「政治のことなんか、私には解らない」と云ひ張るならばそれは間違つてゐます。あなたが職業勞働に執務し、買物に市場へゆき、あなたの子供の靴下をこれ以上綴げぬといふ所まで何遍々々も洗つて綴ぎをする！ すべて、斯うしたパンと衣服を得るためにするあなたの毎日の營みこそ、實に政治なのです。

勞働婦人よ、職業婦人よ、家庭婦人よ。あなたは、あなたの心遣ひと負擔の全部をひつさげて政治生活のまつ只中に立つてゐるのです。それらを外にして、どこに私たちは政治を見出しませう。

ですから、あなたと政治とは關係が大ありなのです。あなたは政治について――實際の政治について學者や代議士よりももつと〳〵了解してゐる筈なんだし、又、了解してゐなければなりません。

追はれ勝ちな家の暮しのこと、職業や勞働生活の辛さ、洗濯たらひの中のこと、米の値段、子供たちの上のことを考へて下さい。それだけでも、あなたの生活がどんなに政治と密接な關係にあるかわかりませう。

◆

勞働婦人よ、職業婦人よ、あなたの勤務について考へて下さい。

あなたが扱ふ機械の危險防止は完全になつてゐませうか。衞生設備がよく出來てゐますか。食後の休憩時間が短かすぎませんか。あなたのお給金は安すぎないでせうか。請負や時間増しの勤務が正確に計算されてゐるでせうか。これらのことは、實にあなたと深い關係があるでありませ

んか。

もう少し遠くへ目をやつて、あなたの隣り近所や知り合ひや、同じ消費關係にある婦人たちのことを見廻したらどこも同じ有樣であることに氣がつくでせう。毎朝同じやうな時間にそれ〴〵の仕事場へ、工場へ、會社へ、デパートへと急いで、八時間なり九時間なり、時とすると十時間十一時間の勞務を終へて再び家に歸れば、家には又家事のわづらはしい勞働が待つてゐる。そんな生活の婦人ばかりがどんなに多いことでせう。

働かなくてはならぬ女、自分の生計を自分で立てゝゆかなくてはならぬ婦人や娘さんたちが年々おびたゞしい數で殖へてゐます。これまで少しも稼ぐ必要のなかつた娘さんや、奥さんや、お母さんが、どし〴〵働きに出るやうになりつゝあるのであります。

そして！

そのために男子はどん〴〵解雇されて、その後釜に婦人がどん〴〵据へられてゐるのです。

以前百二十人の男子の專門家を使つてゐたものが今日は六十二人の女と三人の技術者があれば用が足りるやうになつた！　こんな風に、男子ばかりがやつてゐた仕事もこの頃では殆んど女ばかりで出來てゐる！　そして、反つて女の方が重寶がられ歡迎されてさへゐるのであります。

何故でせう。

雇ひ主たちは、やむをえぬ經濟事情から職を求めて驅けつけて來るあなた方が彼等のために最も安上りな、最も好都合な勞働力である、ことをちやんと知つてゐるのであります。たゞ、精巧な機械を採用することに依て仕事を細かに分解させ、分業に依つて女でも、子供にでも出來るやうなラクな仕事にして老練な男子の代りにどん〴〵あなた方を雇入れて、より早く、より多量に、より安く生産し――但し、決してより安くは賣りません。女や子供の如き弱い者を一層虐使して、より多き利益、より大なる富が彼等の手に入るばかりです――そして、あなた方の勞賃は、これまで男子が得てゐた額の半分内外しか支拂うとしないのです。

勞働婦人よ、職業婦人よ！

それ故にあなた方は、男子を産業から逐拂ふ人です。賃銀の値下げ者です。あなた方の無自覺から、そしてどんな

虐使にも堪えやうとしてゐるあなた方の大なる忍耐(!)に依つて、働く者の勞働條件を益々悪化させてゐるのです。だからこそ、婦人が働くやうになつて男子側に大恐慌が起り、婦人の職業勞働反對！　の悲鳴が男子側から起つたりするのであります。

然し婦人よ、あなた方は、だから（男子の失業を増大するから！）家庭に歸れ、と云はれても今更事情が家庭に入つて安穩に暮すことを許しもせぬでせうが、そのために婦人が産業から退却するのではなくて、進んで、男子と同じ賃銀で、同じ條件の下に働くことを要求しなければならぬのであります。

同じ勞働には、同じ賃銀を！　これこそ、あなた方の最初にして而も、最も緊要な要求であります。

あなた方はも早や、愚かしくも易々諾々と雇主の荷車にしばりつけられてはゐぬぞ、といふことを彼等に示しなさい。資本家が××であり、機械と工場の××である間は彼等資本家が思ふやうに國の政治を動かし、法律を×める力をもつてゐる、といふことをよく知つてゐるぞ、といふ處を彼らに示しておやりなさい。

あなた方がこの關係を、勞働組合に入つて闘志ある組合員になることに依つて、それを知つてゐるぞといふ證據にするならば、男子は誰も、あなた方を厄介な競爭者だと云はないでせうし、賃銀の壓迫者だとも云はないでせうし、いや、心を一つにした同志として喜び迎へて一緒に勤務條件をよくするための抗爭に協力してくれませう。

◆

あなたの健康について。

あなたは苦しい微笑を以て答へるでせう。「私はいつも丈夫でゐなければならない。いつも働けるからだを持つてゐなければならない。若し私が病氣にでもなつたら——それこそ悲慘だ。家事をみることが出來ない、子供たちをかまつてやれない。働けない」

たしかにさうだ。然しそれには健康があなたの唯一のもとでであるにも拘らず、あなたは健康を保持するために必要な最少の時間すら持合せてゐないではありませんか。

一日の勞務が終へたとき肩が凝つて仕様がない！　脚氣のとき、リヨマチのときどうしたらいゝか！　夜おそく足

袋の破れをつくろふとき目が霞んで仕方がないどうしたらよいか。これらを癒すために富裕な婦人たちに許されてゐる處方が（富裕な婦人はそんな病氣に罹る必要はあんまりないのですが）百も千もあることを知つてゐるけれど、それらはあなた方に用がない！　いや、高價すぎて採用出來ぬではありませんか。

私は知つてゐます。あなた方にはもつと外のものが必要であるといふことを。それは何でせう？より充分の休息、より充分の睡眠、より多い勞賃、家の中のより多い光線と空氣と、そして御馳走と。

然し、あなたが度を過ぎた勤務の結果病氣にならうが衰弱しやうが、雇ひ主には一向無關係です。『代りはいくらでも有るんだ。もつと安い勞賃で、ぜひ使つて呉れろと待つてゐる女どもが他に幾らでもゐるのだ』

さうして謙遜に、叉首を切られはせぬかとおど〳〵と物悲しげにしてゐる者が多ければ多い程、雇ひ主は益々氣隨氣儘に、あなた方を虐使することが出來るのです！

それから――

資本主義の世の中は、たゞにあなた方の健康を無視するばかりでなく、あなた方の子供の上にまでその飽くことなき鈍亂な策配を振らうとしてゐます。

あなたの生活程度が、子供を生んで着せたり食べさせたりするだけの餘裕が有らうが有るまいが一向お構ひなしだ女房を貰つたからと云つて給料を上げて呉れますか、子供が出來たさうだ、と云つて一度の賃銀値上げをしてくれたでせうか。反つて無制限にプロレタリアを搾取することが出來るやうにと幾らでも〳〵生活にあえいでゐる貧乏人が出て來ることを待つてゐるのです。そのためには、生めよ、殖えよと奬勵しつゝ子供を幾らでも生むことを命じてゐます。

避姙とか、××とか云ふことが公然と許されてゐる國も澤山に出來てゐる今日、もし、あなたが××といふ最後の方法を採つたりしたら、たちまち第二百十二條に依つてあなたは罰せられなければならないのですもの。

然しみなさん。公然と產兒制限反對の主張をしてゐる有名なお醫者にして、產科婦人科のハレンのかげで高い金子をせしめて有產婦人のために××專門の稼ぎをしてゐるといふ世の中です。金子のないあなた方ばかりが、法律の前

に避姙も××も禁ぜられる！
生み放題に生んでゐる結果――それには母親の過勞や營養不良、育兒知識の缺乏といふことも直接の大きな原因にはなつてゐますが――わが國では毎年實に　　　といふ赤ン坊が死んでゐます、幼乳兒の死亡率が世界で一番高いわが日本！　そして、それは直接に間接に母親の心身をどんなに傷め損ねてゐるか測り知れません。

「刑法第二百十二條から二百十六條までを改正せよ」

「母と子のために保護法を作れ」

勞働婦人よ、職業婦人よ。

資本家はあなたの肉體が衰弱して使ひものにならなくなつた時には、今度は貪慾な眼を以てあなたの若い、花のやうな娘たちを眺めるのです。彼は今まで、嬉しいこと樂しいことを知らなかつた彼女らを、結婚といふ甘い言葉で釣り、贈り物でその歡心を買ふのです。さうして彼女らに倦きが來れば自分の手から突放し、何の考慮もなく街へおひやつてしまつてまつすぐに賣春への道をあけてやるばかりです。

彼は、彼女らを苦痛と困窮と黴毒と重い刑罰の中へとり殘す――しかし乍ら、彼は彼女らを結婚しませうといふ甘い囁きで誘惑し、その上、多分はよからぬ病氣まで背負はせて彼は、仕事も宿所も取り上げてしまつた彼――世界と法律との主催者である彼は何の刑罰をもうけることなしに出てゆき、賣春春とかそれに類したものの如き下等なものの上に自分の崇高さを感じます。

勞働婦人よ、職業婦人よ、今こそあなたはあなた自身のからだのことを考へませんか。あなたは、あなたの子供たちの身の上を感じませんか。法律の制定者とあなたとはこれでも、果して何の關係もないでせうか。

彼等の手に依つて勝手に左右されてゐる政治と云ふものに、何の關係もないでせうか。忙しい、餘りに忙しいと云つて無關心でゐられるでせうか。忙しければ忙しい程、苦しければ苦しい程、何故？　と云ふ事を考へて見る必要はないでせうか？



ロシア婦人の活動

秋田雨雀

革命以前のロシアの婦人ほど遲れた文化の所有者はなかつた。貴族やブルジョアの家庭の婦人は、いちじるしい文化の水準に達してゐながら、殆んど全婦人の八十パーセントは無學者であつた。然るに千九百十七年の革命によつてソヴイエツトロシアの女性は世界の女性運動の先驅の位置に立つた。千九百十一年の三月八日に世界の女性達によつて叫ばれた女性解放のスローガンは、ソヴイエツトに於てはじめて實現されたのである。然しながら、ソヴイエツトロシアに於ける婦人の活動は決して樂な途を歩いてはゐなかつた。ソヴイエツトの婦人達は革命後最も困難な時代を鬪ひぬいて來たのである。革命・國内戰及び饑饉時代に於けるソヴイエツト女性の活動は實にめざましいものであつた。その結果として、婦人は中央執行委員會・外交・法律・教育・工場管理・赤衞軍の中に、ことごとく參加して男性と共に新社會の建設のために働いてゐる。

ソヴイエツトロシアの女性の政治及び經濟機能に參加してゐる率をあげると十萬二千人の女性黨員、十五萬三千六百人のソヴイエツト會員、二百八十一萬人の職業組合を有し、その他、反宗敎運動、無學者撲滅運動、勞農通信員等の多數を有してゐる。農事試驗場の技術家の三十パーセントが女であるといふ事は、如何に女性がソヴイエツトの實際活動に參加してゐるかといふ事のいゝ證據であらう。

ソヴイエツトロシアの女性は、勞働法、及び民法によつて、完全に、男性と同じ權利を獲得する事が出來た。例へば結婚法に於ては、千九百十八年に發布された新法によつて、結婚せる男女はその國籍、姓名、住所に於て、男性に

服從する必要をみとめないと云ふ事や、家庭に於ける經濟上の平等權、子供の養育に對する權利、及び離婚の自由を保證されてゐる。この千九百十八年の新民法は、最初の人民委員長であつたレーニンをして、「この法律によつて、女性ははじめて、結婚に於て平等の權利を獲得した。世界の法律に於て、今はじめて女は男の奴隷たる事を廢したものである。この法律は他國に於ては全く比例を見ないものであるといふ事を、私達は誇り得る。」と云はしめたものである。

ソヴイエツトロシアでは全べての勞働者は勞働法によつて、立派に保護されてゐるが、女性に對しては特別な保護が與へられてゐる。ソヴイエツトロシアに於ける母性保護の例として、女性に與へられた特別の保健法がある。その重要なものを擧げると、下の樣なものである。

一、姙婦は夜業及び過重な筋肉勞働から完全に解放される。

二、筋肉勞働に從事する女性は出産前後八週間（都合十六週間）靜養する事が出來る。そしてその間給料の全額が支給される。

三、智的勞働婦人は前後六週間（都合十二週間）靜養する事が出來る。そしてその間給料の全額が支給される。

四、出産後の母親は、その地域の平均賃銀の五十パーセントの勞働保健の割增金及び九ケ月間幼兒保育料としての割增金を支給される。

五、自己の母乳によつて、幼兒を保育する母親は九ケ月間二時間ごとに、三分以上の休養が與へられる。

六、原則として姙婦は絶對に解雇する事が出來ない。

七、姙婦と幼兒は共に無料で醫療を受ける事が出來る。

その他女性の勞働を自由ならしめ又、幼兒の保健のために勞働場所に近い所に託兒所が設けられ、母親の勞働中、幼兒は專門家の保育の手に託される。この數は殆んど無數である。千九百二十八年の夏にはモスクバ縣だけで、農民のために三百の託兒所が設けられた。三歲から八歲迄の兒童は兒童院に於て敎育される。

ソヴイエツト　ロシアの女性は、男性と完全に等しき權利を得てゐる。女性は男性の從事する如何なる仕事にも從事する事が出來る。そして同じ勞働に從事する男女は全く等しき勞働賃銀を支給される。

ソヴイエツト・ロシアは母性保護の爲に、千九百二十五年及び千九百二十六年には九千三百萬ルーブルを支出してゐる。その中二千四百萬ルーブルは出産期のために、二千三百萬ルーブルは幼兒に對する雜費に、又四千六百萬ルーブルは幼兒保育のために費されてゐる。この他ソヴイエツトロシアの勞働婦人達は絕えず健康診斷に依て、不健康者はサナトリウムに送られて、充分に靜養し得る便利を得てゐる。サナトリウムに滯在中、給料の全額が支給される事は勿論である。これを要するに、ソヴイエツトロシアの女性は革命後、最も困難な時代をきり拔けて健康な社會主義社會の建設のために働いてゐるのである。私達は革命前に於て、最も不幸な狀態に置かれてゐた女性達が、人類の前線に立つて働いてゐる勇ましい姿をみる事が出來るのである。

農繁期託兒所について

農繁期託兒所の設置がこの頃大變に多くなつた。愛國婦人會では幾分の補助金を出してこれを奬勵してゐる。

同會が初めて農村託兒所を設けたのは大正十四年であつたが非常に歡迎されて、次の年には四倍に達した四年後の昭和三年には、五〇〇個所に及んだ。今年は、一、五〇〇個所は出來やうと目論まれてゐる。これは、一村に一つ位はぜひ設立したいものである。交通不便な所では一ケ所では連れて行つたり連れてかへつたりが到底出來ない所さへあらう。さういふ處では二ケ所も三ケ所も必要だ。

小學校やお寺やお宮や、公會堂（農會）や、地主の大邸宅などを利用して婦人會員などが交代に受持つことにするといふ。そして子供を中心にして母親同志の聯絡をはかること、育兒上必要な知識の交換や教育、そして忙して、母親の代りに髮を梳いてやつたり爪を切つてやつたり、洗濯をしてやつたり、綻びを縫つてやつたり、蟲齒トラホームの手當てをしてやつたりするといふ。

最初の婦人督學官

女の最初の督學官が出來たといつて大騒ぎをしてゐます。海のあなたのイギリスでは女の勞働大臣さへ出來てゐるのに、何といふ時代おくれな騷ぎ方でせう。但、男女に依つてその地位に非常な差にをおかれてゐる我が日本としては、とにかくこゝいら邊でめでたし〳〵をしておかねばいかぬのかもしれません。

任命された三人は、何れも女高師を卒業してから長い間奉職してゐた古顏ですが、その內一人は女子敎育一般に亘つた督學、あとの二人は家事と裁縫だけの受持といふことであります。

イギリスの女勞働大臣は、女の勞働問題だけを取計ふ役目ではなかつた筈です。日本最初の女督學官が、その任命範圍を女子敎育だけに局限されてゐる――未だ〳〵女は差別待遇をうけてゐる證據です



――高　穂――

時評

深夜業の禁止法實施について

神近市子

六月末の『東朝』の婦人室及び本誌七月號にも出てゐた婦人勞働者の深夜業週間に於ける體重減量と、交代後の一週間に於ける回復量との對照は、時節柄興味をそゝる數字であつた

それによると、一般に深夜業週間の減量は次週には回復しないのが通則であつて、これ迄それがどんなに婦人勞働者の健康と幼年勞働者の完全な發育を阻害してゐたものか想像の外であると思ふ。

それが、とにも角にも法規によつて今日禁止せられることゝなつたのである。原則として喜ばれねばならないことは云ふまでもない。

今回の法律の適用をうける婦人幼年工の七割四分は、紡績事業に從事する人々である。

紡績事業は、今日では日本の主なる産業の一となつた。しかもこれは過去半世紀の間に發達したものである。

家事經濟に關する

——國際會議の決議から

一、少女の一般教化の基礎として、あらゆる場合に於ける家事教育、家庭訓練、及び衞生的並びに社會的援助

兒童教育の立場から、婦人のあらゆる最要な役割にかんがみて教育者としての婦人の能力が文化の將來に大きな關係をもつものであるといふ事實にかんがみ、

家事家計に於ては婦人の行爲が一家の財力の六割以上に及ぶといふこと、それがために婦人は、一國の經濟上に優越な關係をもつてゐる事實により、

事業なり職業に從事する婦人の大多數は、富の生産に大規模に貢獻してゐる事實により、

又一面、婦人は娛樂の社會的役割をもつてゐるといふ事實にかんがみて、

家庭や學校や社會は、少女らの將來の大使命のために出來るだけ十分に準備をしなければならぬことを主張す。

一、家事經濟に應用された科學、大學及び研究所の援助

科學は家事教育の進歩に多大の貢獻をなすものである。家庭作業

日本が、かゝる短期間に世界屈指の紡績産業の國となつたといふことは、一面に過去半世紀間にこの事業に從事した多數の勞働者——特に今回の法律を適用される弱少勞働者に對する、最も忌憚のなき虐使と搾取とが行はれたといふことを自然に語つてゐる。それ故に、それは決して一部の人々に考へられてゐるやうに、民族にとつて名譽の事でもなければ、誇るに足るべきことでもない。それは日本が世界の片隅に存在することから、日本のブルジョアジーをして世界がこの事實に氣付く前に最も老猾にして飽くなき搾取に成功せしめた迄のことである。

勞働條件の改善は、無論どんな場合に於いてゞあつても、歡迎せられなければならない。しかしそれは勞働者自身の力強い抗議によらずして恩惠的に與へられる場合に、極めて屢々改善の形のみを與へられてその實質を與へられない。この意味から、恩惠的に與へられたる改善によつては、勞働者は實際には遂にその眞に欲するものゝ何物も與へられては居ないといふも過言ではないのである。

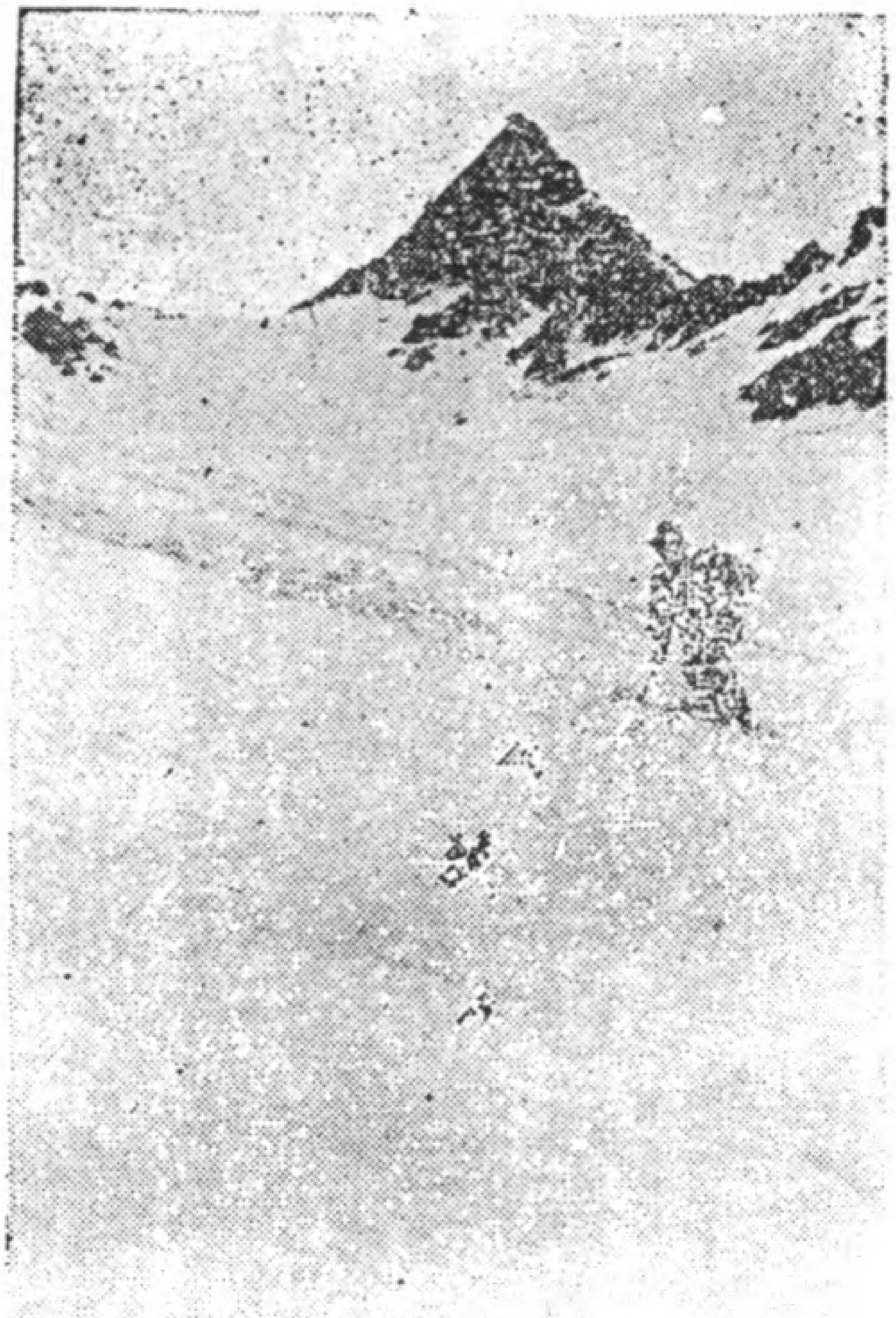
今回實施された改正工場法は、大正十二年成立したもので

の實行は、その根柢としてそれに最も密接な關係のある科學の諸分科にまたねばならぬ。たとへは生物學、細菌學、生理學、食物科學電氣學や器械や心理學や經濟學などの知識が。科學者はこの方面の仕事を繼續するやう誘導されてゐる。が、彼らの研究が實際生活の必要といふことにつねに氣をつけて應用れなければならない。

家事實驗室（研究所）を作ることが必要である。

一、家庭管理及び家庭作業の組織に於ける

家庭作業及び家庭の管理が單純化されて勸勞の點から見て、重荷にならないやうになり、時間の上でも金錢の上でも節約されることは願はしいことであるから、合理化がもつと研究されて、これらの



――スヰスの山――

ある。爾來六年資本家側にあつては錘數の增加とか生産の合理化等によつてその對策を怠らなかつた。その結果深夜業の廢止によつて紡績業の生産能力は、少しも害されないことを內外に聲明することをうるに至つたが、これに對して勞働者側は果していかなる對策を講じてゐたであらうか。

資本主義は、原則として勞働者に利益を齎らす制度とはその利害が對立する。さすれば深夜業の禁止の爲めに二交替制の採用による必然的な勞働時間の減少による損害を何等かの形に於いて回收しやうとすることは自然の數である。そしてその負擔を勞働者自身の上に轉嫁せしめやうとすることは、これ又自然である。

しかし勞働者側に於ける賃銀の減少、待遇低下を伴なうことは、この法規の精神を全然沒却せしむることであつて、それが眞に勞働者中心の立法であるならば、それは附帶法として添加せらるべきであつた。

しかし、保護がその點まで徹底してゐないのであるから、組合その他の組織によつて勞働者自身これに抗爭すると共に從來この法案の實現に盡力して來た各婦人團體は、資本側の今後の態度についても監視を怠らぬことが必要であり義務で

方法の要素が、あらゆる家事教育の學校で敎へられなければならない。

この合理化に依つて節約された時間は、兒童の敎育に用ひられ、家庭の娛樂に向けられるであらう。

これは、ローマに開かれた國際家事經濟會議に於ける決議の中からわが邦の事情にもよくあてはまる條項を拔いたものです。

◎再び瓦斯値下げ運動に就て

瓦斯會社と東京市民との抗爭はつひに持久戰に入りました。

最後の手段としていよ〳〵瓦斯料金供託同盟が成立しました積々と料金の供託が（但し、計量器の使用料としてこれまで取立てられてゐた市內十五錢市外二十五錢分を加算せず、料金の二割安の分だけを供託するのです）申込まれて會社側を脅してゐます。

この上は、需要者側の團結した抗爭によるより外勝つ道は絕對にないのですが、瓦斯事業の如き獨占事業では、競爭會社がないのですから會社側はそれを强味にして中々讓步しないし、需要者側は、供託すれば瓦斯料金不拂による配給さし止めをうけますからやむをえず、使用しないで不便をしのば

あると思ふ。

財政緊縮と無產婦人

岡田敏子

無用の長物の標本みたやうにあつた田中內閣が倒れて、民政黨の內閣が成つた。

新內閣は人心を新らたにするために大きな名乘りあげをして財政緊縮の一枚看板を掲げて起つた。井上新大藏大臣の說明するところに依ると「今日の經濟國難を切り拔けるためには、國民全體が緊張して消費節約を行ふのが最も有効な方策である。そのために政府自ら財政を緊縮してその範を示す」のだと云ふことである。

政府が大童はになつて自ら進んで無益な浪費を省き――緊縮の第一着手として官廳で濫使してゐた大臣、次官、局長、課長の自動車を大いに制限する、といふことを發表して、たちまち第一次次官會議で反對決議をされた話もあるが――とにかく、さやうにして節約をすることはまことに結構なことである。然し、いくら範を示されても、食ふや食はずであえ

なければなりません。



専横なる營利會社を徹底的にきう弾するために解決する日まで全市民がその位の不便を忍ぶことは勿論當然であります。それにしても思はれることは、斯ういふ場合に、家庭婦人の間に組織と連絡が出來てゐて、共同炊事に依る相互援助の道がついてゐたらどんなに強腰で闘ひつゞけることが出來るだろうに、といふことであります。

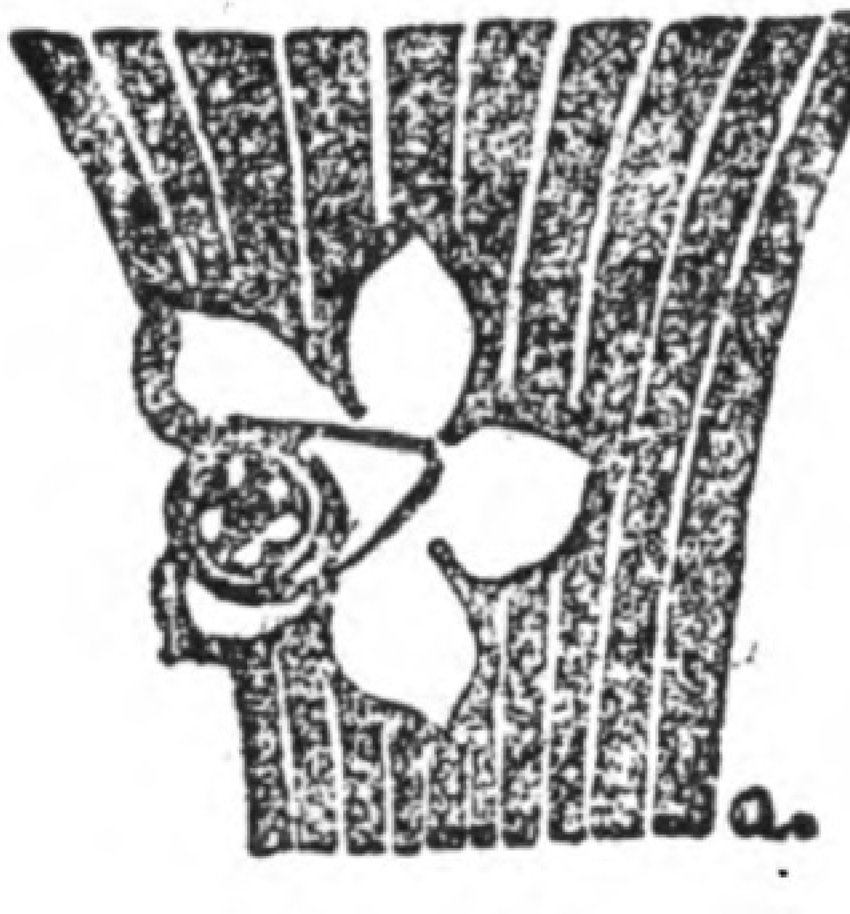
つねに營利的な商人、會社にじうりんされてゐる私たちの消費生活を擁護して家庭婦人が一致して起ちたいものです。

いでゐる者、一家總がゝりで稼ぎ拔いてやつとその日を糊してゐる者ら今日のわが日本に大多數を占めてゐる無產階級にとつて、この上は、生命を縮める外、何を節約せよとと云ふのであらうか。

加ふるに、財政の緊縮、新規諸事業の中止延期は極度の不景氣と彪大な失業者の續出を、必然的に豫想しなければならぬのであるから、今日以上に衣食に難澁しなければならぬのだとしたら、現政府は國民の大多數を占めてゐる無產階級に一體何を約束しやうとするのであらうか。

少くとも、節約して浮び上る經費の大部分は、それらの無產者の生活を安定にするために捧げられるべきである。緊縮々々で得た金子を、公債の償還にあてる位なら、損をしないのは――得をするのは大金持だけで、貧乏人はこの上深刻な生活苦を背負はされ損といふことになる。

殊に、直接に消費經濟の生活にあたる無產婦人の立場としては、いろんな形を以て各自の臺所をおとづれて來る緊縮の結果の受難を前にして、政府はわれ〳〵に何を與へ、われわれから何を奪はうとするのか、看視と批判と、そしてその對策とを忘れてはならない。



初島よ

松本正枝

熱海の汀から南へ三里
溫泉に集る都市人の
目をたのましせ
料理屋の生活の伴ともなり
ブルジユワ文士の糧ともなる
この初島。

「あの島が
御案内でもムいませうが
四十三戸より成る初島
共產村で、アブナイとこで」と
宿の亭主が顏色をうかゞふ。
無知からの迷信
行きとゞいた反動敎育と宣傳。

乾新兵衛から五百萬圓
田中内閣は
反動の目的にこそ成立した
共產黨と共產島
おゝのろはれし共產の村よ、

靑海原にかすんで見える
島の姿
島の產物、桃、椿
島の存在、あらゆるものを
ブルジユワジーに捧げて
半農半漁の營を
かろうじて保つ
文化のおくれた共產村。

人間がふえるから
生活が困る、
闇から闇に葬らるゝ人の子
土地がせまいから
四十三戸よりふやさぬ
次男からは村に居られぬ
古へよりの不文律。

あやまられた共產制
愛鄕心をもぎとつて
長男夫婦を殘すの外
男も女も
出かせぎに追ん出す。
ツリ堀りの親爺となり
風呂番となり

湯女となる
夜咲き花にも當然の事
初島よりも何倍の
この廣い本島
やつぱり　失業と生活難！

あやまられた××制
否！
上よりの支配と搾取が
ある間
完全な相互扶助の××村は生れぬ。

おゝ初島よ
いとしの初島よ
無支配
無搾取
相互扶助の
××制を打ちたてよ！

一九二九・五月

妻の自由

吉村とり子

いつ、
あなたに私は買れて來ました、
戀愛に依る合議制、
戀の前に、財産も地位も、
何にもかもなかつたわたくしたち、
あなたのボーナスで家賃を入れ、
私の月給が蚊帳になりお櫃になり、
朝ごとに『行つてゐらつしやい』
『早く歸つて來るんだよ』
『はいちやい！』
私たちは二人ともに
勤めを持つ働きびとでありました。
月給といふ鐵鎖につながれた囚人、
解放された土曜日の晩が待ち遠しうございました。
家庭が戀愛の墳墓だとは思はないけれど、
この頃、私の翅は重うなりました。
自由へ！
自由へ！
天空遙かに舞ひ上り舞ひ下る自由を、
私はいつも、しつかり把持してゐた筈だつたに、
この頃鐵鎖は、
私の足、私の心にもからみついて來ました。
「いつそ職業なんかやめちまへ」
「二十圓や三十圓の儉約は
大人しく家にゐてドメスティクに働いてゐる方が、きつと確實に得られる

ぜ、
職業なんかやめちまへ」
かういふSに抗辯して、
私は思ふ。
二人共稼ぎしなくては、
やつてゆかれぬ程Sが薄給だつたらど
んなによからう、

Sは今、
私を買はうとしてゐる、
私といふ女房を、
改めて今、
全部的に買はうとしてゐる。
私も賣らうか？
賣らなかつたらどうなる。
職業はつまらない。
然し、
朝ごとにつとめに出て、
私を待つてゐる私の仕事を、
てきぱきと、
分擔されたまゝに、
この手で處理してゆくことの愉快さ。

家事の餘暇に、
組合の會合に出たり、
講演を聞きに行つたり、
ストライキの救援金を集めに歩いたり
久し振りの友人と會食したり、
等々、
私に、月給といふものがなくつても、
夫に扶養される妻と、私がなつても、
かうした自由を
容されるのでせうか、

容す！　のぢやない。
誰にゆるされるのであるものか。
私自身が、それだけの自由を手放さず
にゐられるだらうかと不安なのであ
ります。

夏の晩

成田美

おつ！　この紙に蚊帳のこまかい線が
みごとに　今夜は　うつる
今までちつとも知らなかつた。
青い蚊帳がゆれます
涼しい風が入つてくるのです
窓の前の河原柳がせいせいとのびて
青々とつやつやかしくゆれるですよ。
柳の總身で。
　柳は一寸の風にもゆれる位
　うら若い木です。

×　×　×

×　×　×　×

山峽の村より

松沼スヰ

一、九百五十圓！

盛は、電氣部の出張所の雇工夫であつた。先には日給で、仕事のある時だけ頼まれて働き、其の外は、大抵田畑の仕事をしてゐたのだが、遂近頃、月給三十圓で雇になつたのであつた。

彼は、人の顏さへ見ると、電氣學の博士の樣な口調で、電氣に關する話を得意になつてしてゐた。

近所の百姓達は感心して彼の話を聞いて居た。そして、三十圓の月給を貰ふ事を羨しがつた。

「盛あんこはいゝ。月三十圓も貰ふさうだ。」

近所の百姓達は、皆さう言ひ合つた。實際、取りかへされはしまひか、取り返されはしまひかと、おど〳〵し乍ら、僅かの田を借りて小作をしてる百姓にとつて、三十圓と言ふ金は大金に相違なかつた。彼等の財布には、三十圓どころか、壹圓の金も滅多に入つて居なかつた。年末の米を賣る頃には、まとまつた金も入るけれど、その金は、肥料代やその外の借金にとられて、彼等の財布を素通りして行つて了ふのであつたから、雇工夫になつた盛を羨むのも無理はなかつた。盛は皆に羨まれ乍ら、元氣よく仕事に出て行つた。

所が、彼が雇工夫になつてから丁度一ケ月ばかり後、日數にすると二十八日目の夜、小一里ばかり離れた所から、電燈が點かないから修繕して呉れといふ電話が來た。生憎其の夜はひどい風で、他にも故障が出來て、二人の工夫は

皆出てゐたので、盛は一人で其處へ行つた。故障の起きたのは、縣道を小一里ばかり行つた所にあるK屋と言ふ精米所のある所だつた。

盛は提灯に火を入れて電柱に上つて行つたが、其の新しい一本の蠟燭が燃え盡しても、また故障は修繕らなかつた彼は二本目に火を點けて上つて行つたが、其の時、餘り時間のかゝるのに焦々してきたのか、手にはめて居た絕緣用のゴム手袋を取つて了つたのであつた。

ところがそれから一分と經たない中に、彼の體は、强い電流に感電して、電柱の頂上から、いきなり地上に投げつけられた。

K屋の人々が、ドシンと言ふ物音に驚いて外に出た時、彼は降り積つてゐた雪の上に苦悶してゐた。

「危いから俺に手をつけるな。」

彼は微かな聲でさう言ふと、息が絕えて了つた。

急報によつて、醫師や外の工夫がかけつけた時は、もう冷くなつてゐた。感電して落ちる刹那、落ちまいとして夢中で電線に縋つたのか、兩手の掌が骨が見える程燒けてゐた。

彼は、其の夜死骸となつて戶板に乘せられ、雪道を我が家に運ばれてきた。彼の若い妻は、餘りに變り果てた夫の體に縋つて、聲を惜しまず泣いてゐるのが、傍に居る人々の瞼を熱くした。

其の翌々日の暮れ方が葬式であつた。ちら／＼と雪の落ちる寒い黃昏の暮色中を送られてゆく柩を見て、誰もが人の命の果敢ない事を嘆いた。

葬式や法要が濟んで了ふと、家には彼の妻の春代が獨り殘された。（彼等にはまだ子供がなかつた）

寂しからうといふので、盛の兩親が三週間ばかり居た。兩親が歸ると、春代は實母の所に行つてゐた。暫く經つと殉職といふわけで、縣から五百圓ばかり貰つた。贅澤な有產階級の人間達の、一ケ月の小遣ひにも足りない位の

金！　それが彼の命の代價であつた。その外に、生命保險の金を四百五十圓ばかり受け取つた。合せて僅か千圓足らずの金であつた。

千圓！　それが物質で買ふ事の出來ない命と取かへられた形となつた。その僅かの金だつたが、近所の百姓達はすぐ話の種になつた。

「春代ばかり、いゝな。」

百姓のかみさん達は、春代が夫を失つたといふ大きい痛手など考へて居ない樣に、そんな事を言ひ合つた。

此の金に目をつけたのは、近所の百姓ばかりでなかつた。盛の實家（盛は次男で聟入してゐた）の兩親であつた。彼等は結婚して三四年になるのに、呑氣な田舍の事とて、まだ入籍してゐなかつた。其處へつけこんで、何だかんだと言ひ初めた。殊に保險金は、聟に來る前からかけてゐたのだから、當然實家のものだと言つた。生憎保險の受取人の名が父になつてゐたのを書きかへずにゐた。

が、もし春代が、盛の弟（春代より一つ年下）と結婚するなら、文句なしに金は渡すと言ふのであつたが、夫がむざんな死をとげてから間もなく、まだその涙も乾かぬ中、外の男と一緒になるといふ事は、春代には到底出來兼ねる事であつた。

春代は、どうしても厭だと言つた。盛の兩親は怒つて、盛の持つて來た道具をみな運んで行つた。春代の答は當然な答であるのに……。

春代の周りには、一人も春代の考へを主張して呉れる人間がなかつた。春代はまだ二十二才の若い女、何時迄も強硬に、只一人でがん張る事は、至難な事であつた。

「ナニ、何時迄も獨りでも居られめえし、うんて言へばいゝのにさ、千圓の金が入るんでねえか。」と、近所の百姓達は言つた。

春代の周りには、金に飢えて居る、さう言ふ考への人ばかりであつた。すんだもんだのごた〱が三ケ月ばかり續いたが、春代は、親類の者達、殊にその實母に泣いてくどかれて、(春代は父がなく貧乏だつた) 百ケ日過ぎたら、先の夫の弟と一緒になる事を承知して了つた。騒ぎが落ち着いても、春代の顔は暗かつた。

ところが、春代の手に千圓足らずの金が入る事が確かになると、春代達の作つてる田を管理してる (これは地主の代理人) 常松といふのが變な事を言ひ出した。

「春代の家でも、盛あんこが死んで、田を作る人の手が減つたから、小作地を半分だけ寄こしてくれろ。」と、言ふのであつた。

もう少しで種籾を蒔く時期を控へて、突然こんな事を言はれた春代とその母の驚きは、非常なものであつた。突然そんな事を言ひ出す常松の心が、まるで見當がつかなかつた。いくら頼んでもきかなかつた。だが、間もなく村の人々の間に、ある噂がたつた。

「あの常松の事だ。春代達から一杯貰はれたいのだべ? 金の入つた事を知つてるからなあ。」

常松は、平常から餘りたちのよくない人間の樣に言はれてゐる男だつた。春代達は、一杯貰つて常松の家に持つて行つたが、その料でも少なかつたか、半分よりは多かつたが、四分の三ばかりにされた。

金! 金! 千圓はおろか、もつと少額の金で、美しい純情も何も壓しつぶされてゆく村の人々。働いても、働いても、何時も財布の空な百姓達、そして年々增えてゆく、彼等の汗水流して得た金をしぼりあげる鬼達。今の農村には、「かせぐに追ひつく云々。」等と言ふ言葉などは通用しない。

働いても、働いても、彼等は、親の代から、祖父の代から貧乏なのだ。しかも、同じ世の中に、同じ陽の光りを受けて生きてる人間の中には、何百圓を一晩の遊興に費消する男、觀劇と、衣裳くらべと、お化粧に日を暮す、米のなる木も知らない女も居るといふのに……。

地主の子の綾子と、小作人の子の俊太郎は、同年の七つで、小さいからの遊び友達である。

小作人の子は地主の娘を「綾ちやん！」と、呼び、地主の子は小作人の息子を「太郎！」と、呼び捨てにした。それでゐて當人達は勿論、周りの人々も何の不思議も起さない。太郎は綾ちやんの、最も素直な、從順な下僕である。

「太郎！　河原から砂を運んでこう。」

綾ちやんの命令に、太郎は二つ返事で、二人の遊び道具の砂を運びにゆく。

「太郎！　池から水を汲んでこう。」

太郎は着物を濡し乍ら水を汲んで來る。そんな用達しをする位で終れば上々の部で、何か氣に喰はない事があると思ひ上つた横暴な小女王は、太郎の頭を叩いたり、顔を引掻いたりする。それでも太郎は特別さからひもせず、痛くされれば泣いて家に歸るのがきまりだ。全く意氣地のない下僕だ。

太郎が泣いて家に歸つた時の太郎の、祖母の話が又とてもふるつてゐる。

「太郎や、お前綾ちやんにどんな事をされても、手むかひしてはなんねえだよ。お前が綾ちやんの言ふ事さへ聞いてゐれば、毎日どつさりお菓子を頂くにいゝだから。」

此の祖母の間違つた考へが、大人しい太郎を、更にいくぢ無しにし、小女王を更に横暴にするのだ。處が、太郎の弟の次郎と、綾子の妹の小枝子が又同年の五つで、矢張りお友達だ。

次郎が小枝子を「小枝ちやん」と呼び、小枝子が次郎を「次郎！」と、呼び捨てにするのは同じ事だが、其の外の事はすべて平等だ。次郎は決して小枝ちやんの横暴に負けてはいない。

「次郎！　水を汲んでこう。」

二度も重ねて、次郎に命令すると、次郎は默つては居ない。
「何だ、こんだは、小枝ちやんの番でねえか？」
と、言ふ。小枝ちやんは又、綾ちやん程横暴でないから、そう言はれば自分で水を汲んでくる。
遊んでる間は、地主も小作人もない。全く平等である。喧嘩になれば二人共ひけを取らない。
「次郎の馬鹿――、こんだからは遊ばないぞ――」
「小枝子のバカ――、こんだきたら叩きつけるぞ――」
二人は、田の向ひ側とこつち側とに居て、惡口のやり取りである。私は此の小さい女の子達の家に泊りに行つては時々こんな場面を見る。そんな時、私はとても痛快になる。
「次郎！　しつかり。負けるなよ――。」
と、私はいつでも從妹の小枝子よりも次郎に應援するのである。
「次郎は偉いよ。」　私は權勢に、負けない小さい鬪士をいつもほめてやる。

老人のなみだ

ある、よく晴れた五月の午後、麥の丘を越して、靜かなお葬ひの鐘が風に運ばれて來た。
「お葬ひの鐘ね。何處の家のでせう？」
私が尋ねると、畑堀りに來てゐたお安さんが、
「新田のばんつあんが亡くなつたので御座りす。」
と、言つた。
「新田？　新田の何處でせう？」

「ホラ、おごさん處に、よく蝦や雜魚を賣りに來るぢんつあんが御座りすぺ？　彼の家のばんさんちや。」

と、話し好きなお安さんは、三時の休みの茶を啜り乍ら次の樣な話をした。

新田のお婆さんは、去年の暮から胃癌で寢たり起きたりしてゐた。

「どうせ駄目なのだから、忙しい田植時にならない中に死に度い。」と、言つて居たのださうだが、願ひ通り忙しくならない中に死んで了つた。

お婆さんは二十歳頃結婚した。夫は大酒飲みで、お玉さん（お婆さんの名）が嫁いで行つた當時は、幾分田畑を持つた自作農だつたのが、何時か其の田畑も夫の酒代にかはつて了つた。子供はふえる、夫は働かずに酒ばかり飲んでる、お玉さんの女手一つで、やつと其の日を過す樣な有樣であつた。其の中に大酒飲みの夫は、長男が十二歳になつた晩秋に、ブラリと家を出て北海道に行つて了つた。彼は當時北海道に行つて成功した村人の話を聞いて、北海道に行きさへすれば、道端に金でも落ちてる樣な積りで家を出て行つたのであつた。

後には、お玉さんと、十二を頭に三人の子が殘された。お玉さんは再婚をすゝめる親類の人々の言葉に耳も借さず長男と長女とを小學校に出して、自分は次女を連れて、方々の田植、桑取り、草取り、稻刈り、と、春先から年の暮迄、日雇になつて歩いた。そして數年を送つて居る中に、息子も小學校を卒へて、お玉さんの片腕になる樣になつた。お玉さんは、今度は長男を相手に、田を借りて小作を初めた。親思ひの長男は、母と一緒に一心に働いたので、家の暮しも少しつゝ樂になつてきた。

長男が軍隊に行つてる間は、長女や次女が母と共に働いた。二年後に長男が軍隊から歸つて來ると間もなく嫁を貰つた。そして翌々年孫も生れた。長女や次女も、次々と嫁いで行つた。お玉さんと息子と嫁と一生懸命働いたので、粗末乍ら家を建てたり、畑を買つたりした。

その家は、ホツタテ小屋であり、その畠は、猫のひたひ位のものであつたが……。

北海道に行つた夫からは、只の一度もたよりが無かつた。もう夫が家を出てから二十年に近い日が過ぎてゐた。人の噂に聞けば、相變らず酒を飲んで方々を轉々してゐると言ふ事であつた。

息子と嫁が田畑に出た後、可愛い孫の子守りをし乍ら留守居をしてるお玉さんの頭に浮ぶものは、昔別れた夫の事であつた。

お玉さんはとう〳〵或晩息子に相談した。それは北海道に夫を迎へに行く事であつた。息子は自分の父親に餘り好意は持つて居なかつたが、母親の言ふ事は何でも快く承知した。お玉さんは自分で北海道に行つて、十七年前に家を出て行つた大酒飲みの夫を連れて歸つて來た。

歸つて來た夫は、矢張り酒を止めなかつた。蝦や雜魚や鮒を川からすくつて、それを村に賣り歩いて、それで酒を飲んだ。それでもお玉さんは小言一つ言ふでもなく、時々は雜魚や蝦すくひを手傳つたりしてゐた。

「何て憎らしい爺いだらう！」

近所の人がよく噂してゐた。そうして六七年經つた。夫思ひ、子思ひのお玉さんは、一生を夫と子どもに捧げつくして、六十年の生涯の幕を閉ぢたのであつた。

「眞當におごさん！　あのお玉さんの眞似も出來せんよ。」と、お安さんは語り終へて膝を立てた。

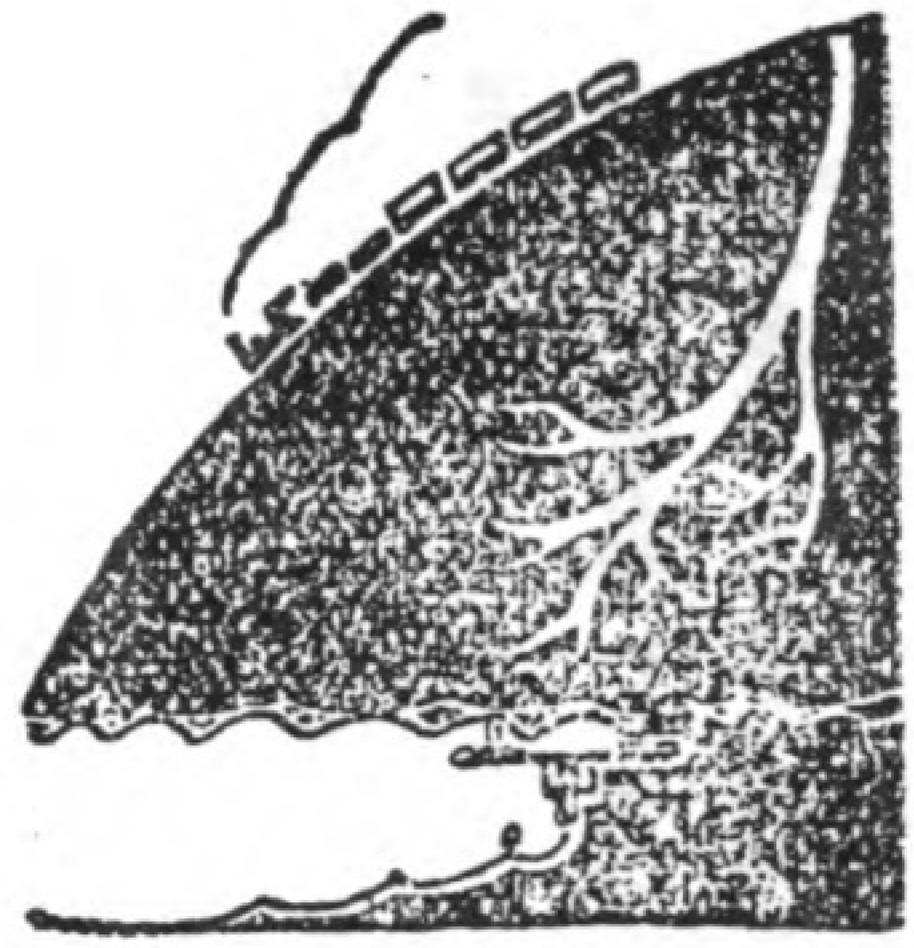
「全くね……。」

私も沁々とした氣持ちで言つた。其の夕方隣の家に湯を貰ひに行つたら、其處でも新田のお婆さんの話が出た。

「お玉さんが死んで、一番困るのはあのちんつあんじや。今日、お葬式が出て行くのを凝つと見送つてたちんつあんは、行列が見えなくなると、裏口に行つて泣いて居たんだと……。あの飲んだくれのちんつあんが……。」

隣のかみさんが言つた。

近所から憎惡の目で見られてる老ひた人、その人の瞳に湧いた涙が、何故か殊更私の胸を熱くした。



母と息子の手紙

大河原　浩

もう、あれから二十年近くになる。

昨日、髪をとかしてくれた娘の貞江は、

「お母さん、ずいぶん白毛がふえたのね」

然う云つた。

あの頃は、無口なさよの胸にも活氣が滿ちてゐた。さよの家へ出入りする人々は若かつた。學者もゐた、職工もゐた、女もゐた。夫の敬次郎は、奧の四疊半――三坪程の雜草の庭に面した部屋で、部屋中の煙草の煙をすう〱吸ひながら、よく、社會のこと、壓迫者と被壓迫者のこと、權力と無政府のことなどを、脊の低いYさん、頭髯のあつたTさん――Tさんはどうしてゐるだらう？まさか、夫と同じ運命に押し流されたのではなからう！――そして、山崎みつさんなど〻論じてゐた。

なんと、情熱が、あの人々を支配してゐたことか！

『ばか、〇〇を怖れて何が出來る」

論じてゐる聲がだん〱大きくなるので、さよが眉をひそめると、敬次郎は、玄關にゐる黑い洋服を着た男へわざ〱聞えるやうに、きつと然う云つた。鋭い燃えてゐる眼だつた。

敬次郎はS結社の一員だつた。彼は理論家ではないが當時の情勢をよく知つてゐた。どちらかと云ふと情の人で、たま〱議論から同志となぐり合ひをすることのある男だつた。それだけ彼は虛無的であり、そこに拭ひ得ない缺點があつた。それでゐて彼は指導者だつたのだ。

Yは敬次郎を評して斯う云つた。

「荒木君は熱し易くさめ易いつて性質でね、熱してる時は、たとへば間違つてゐてもまだいゝんだが、さめると反動的になりやしないかと思ふんだ……」

狂的に熱する半面に、敬次郎は、よそめにも氣の毒になる程、淋しがりやで、やさしかつた。さよは、ときどき思ひ出す。たとへば、一人ぽつねんと坐つて、生氣のない、手内職で荒れてゐる、皺だらけの手を見詰めながら、懐かしい、淋しい昔を思ひ出す。あの夜の、夫のことを通じて。

今も生活に惠まれてゐないが、あの頃は、不安の波の途切れない生活がつゞいた。米櫃の底の見えないことはむしろ、稀れで、夫は、でも毎日かけづり廻つてゐる。

――これが革命家の生活と云ふものか――然う思ひながら、その夜は、單物をこわして袷を縫つてゐた。なんでも初秋の夜で、牛込臺では、こうろぎが、コロコロコロ、と鳴いてゐた。

眠つてゐた敬一が眼を覺まして泣き出すと、わきに、ねころんで、さよの縫仕事を見るでもなく、何かを考へてゐた敬次郎は、ふと立つて、敬一を抱えて便所の前の廊下へ出た。まだ、貞江がさよの腹の中にゐた頃だ。

「よし〳〵、泣くんぢやない、男のくせに泣く奴があるか、――間もなく働く者の世の中が來るんだからな……
……」

敬一は、まもなく默つた。さよは、自分の意識を一つところへぐん〳〵と集中して行く針を見詰めて、運ぶ指に力がなかつた。あんまり、夫が廊下に立つてゐるので彼女は振向いて見た。すると、夫は、敬一を抱えたまゝしやがんで泣いてゐた。むろん、夫の氣持ちは、すぐ、さよの胸に通じた。

「あの夜が、眞面目な夫の最後の日だつたのだ！」

さよは、今、然う思はないではゐられない。夫は、あの時、裏切者になるべく考ひ込んでゐたのだ。――然うなつて行つた夫の氣持ちはさよにも解る。あの時は、生れる子の生着を買ふ金さへなかつた。〇〇の壓迫も幾何學的に加つて來た。

さよは、敬一から來た手紙のことから堪え難い、悔恨の中に思ひ出す。あの時、父に抱かれてゐた敬一は、既

に母を棄て〻二年になる。

手紙は斯うだつた。

「お母さん、ご丈夫ですか。僕は丈夫です。僕は、お父さんのマイナスの仕事を埋め合せ、更らに解放運動へ貢獻する具體的な仕事をする爲めに、命を投げ出して戰つてゐます。

こないだ〇〇へ拘留された時、古顔のスパイが斯う云ひました。僕は口惜しかつたです。

「荒木、君の親父は國家の爲めに働いた人なんださうだね、K事件のメンバーを手に入れたのも君の親父なんだらう——君も、どうだね、このへんで足を洗つて、××黨のメンバーでも相當な…………いゝぢやないか——

——」

お母さん、むろん、僕は怒鳴り返してやつたが、こんなことを云はれるのはだらしのない親父のためであり、口惜しくつてならないんだ。

今日、この手紙を書くわけは、不孝な子だとお母さんが思つてる僕が、果して不孝なことをしてゐるか、お母さんの云ふ間違つた行爲と云ふのが果して間違つた行爲であるかどうかを、よく聞いて貰ひたいんだ。

お母さん、僕は、あの時八つだつたが、お父さんの死體が監獄から家へ戻つて來た時のことをよく覺えてるよお母さんだつて、これではお上もあんまりだ——然う云つて泣いたぢやないか？

僕は、この頃、事件の眞相をはつきりと知り、お父さんが何故、死んで歸らねばならなかつたかを、はつきりと知つたんだ。

お母さん、あの時、お父さんは、同志の全部を敵へ賣り渡して、勿論、自分は罪から逃れ、然かもごほうびとしてお金を貰つたと云ふことだね。しかし、その金が、我々を幸福にしてくれたらうか？　お父さんが、××に買はれて裏切者となつたことは、同志十六人を〇刑にし××の勞働者農民をより長く搾取と壓迫の中に更らに押しやり、そして、自らもが、病死と云ふ名義でこそあつたが、…………………あつたのだ。

それから考へても、僕の行く道は決して間違つてゐない。××に買はれるやうな、中ぶらりんを歩いてゐるからお父さんのやうな莫迦をも見なけりやならない。

お母さん、この前の手紙と讀み合せて、みて下さい。そして、貞江にも云つて下さい。N紡績は右翼組合の指導下にあるんだから、たとへば、ストライキをやつたところで、やつたもの全體が、お父さんと殆んど同じやうた方法で、じわり／＼と殺されることになるんだと。何故なら指導者が中ぶらりんで、金と妥協のやり取り專門を仕事としてゐるから。

お母さん、僕もあなたや妹に逢つて話し合つてみたい。が、それも、今は出來ない。たゞ僕達は、同じ方法へ進む鬪爭の上でのみ、逢はなくたつて、話し合へると信じてゐる。」

急に誰も來なくなつた。夫も外出をしなくなつた、さよは、内心、變つたことが出來たのではあるまいかと思つた。

「この四五日誰もいらつしやらないのね、どうかしたんぢやないの？」

さよは、夕食の時、きいた。

「警戒がひどいんで會合も出來ないんだ」

敬次郎は、どぶどろのついた棒つ切れを棄てるやうに云つた。暗い、苦しさうな顔をして、ねてゐる敬一の方へ眼を落した。

二三日過ぎて顋鬚のTさんがやつて來た。

「荒木、知つてるだらうね？」

Tさんは、すぐ、然う云つた。

「こんだのことだらう」

「みんなやられた、俺もあぶないんだが、あの前の日から下宿へ歸らないんだ、君んとこへは來なかつたのか？」

敬次郎は返答に窮した。が、彼は、

「むろん、あぶないんだが、あんまり動くと反つていけないと思つてね――それに、これの――とさよを顧みて――産月も迫つてるんでね……」

と、Tさんは、

「俺は九州へ行かうと思ふんだ、君も、まご／＼してないで俺と一緒に行かないか」

「も少し考へるよ……」

少しばかりの酒をのんで、別れる時、敬次部は本箱の奥から金を出して、そいつをTさんに渡した。

「これを持つて行け」

「くれるのか！」

「無事ににげてくれ」

「君が困るだらう？」

「いゝよ」

「然うか、ありがとう」

Tさんは出て行つた。

それきり、どうしたことか、二十年後の今日も、杳として消息は知れない。

さよは、敬次郎が本箱の奥から十圓紙幣を幾枚か出した時、ハツトした、そんな金がこの家にある筈がない。ねてからきくと、運動費として黨本部から最近貰つたものだ、とだけ云つた。

二ケ月程過ぎて、夫は收監された。その時、夫は二百幾十圓と云ふ金をさよへ手渡しした。敬次郎は、そしてなか〳〵出て來なかつた。貞江が生れて四十日程經つた頃、さよは、嬰兒を背にして、I刑務所へ面會に行つた。

夫は、特別上等らしい監房にゐた。

「やつぱり、今度の事件で？」

さよは小聲でたづねた。

「む、だが、すぐ出られるよ」

思ひの外、元氣のいゝ敬次郎は、笑みを堪へて云つた。

しかし、敬次郎は、半年たつても、一年たつても歸つて來なかつた。そして、いろ〳〵な人の名義で、月々、さよ一家の生活費が送られて來た。又、幾年か過ぎた。その間に、十六人の同志は、各自の××的熱情を、全土の勞働者と農民の胸に、倍にして植えつけて、死んで行つたのだ。

さよは、その發表を新聞で見た。

敬次郎は、しかし、知らなかつた。

「…………、君を收監して置くんだから、しばらく我慢してくれ給へ、その代り、君の家庭のことは××で責任を持つてるんだから…………」收監の當時、彼に然う云つた××は、しかし、十六人の死刑囚に就いては決して何ごとをも語らなかつた。

時日が經過すると共に敬次郎は、同志のことが思はれて來た。既に、その頃は、さよの面會も許されなかつた。從つて、敬次郎は、自分と云ふ人間は資本主義政治

機關のある目的の爲めに利用されてゐるのではあるまいか――と思はれて來た。

俺は裏切者だ！

俺は同志を賣つた！

間もなく、彼は、多勢の者が一緒に×刑執行されたと云ふことを、鐵の扉の向ふから、風の如く聞いた。それが兼ね〴〵思つてゐる自責の念とからみ合つて、同志は殺された、然う思ふやうになつた。

ある日、監守を呼び留めて、彼は訊いた。

「K事件の人々は×刑になつたんぢやないんですか？」

しかし、監守は「いゝや、そらア解らんよ」とまつすぐを向いて行つてしまつた。

三年すぎてゐた。

彼は痩せて行つた。夜、よく、うなされて叫び出した。

敬次郎の死體を受け取つたさよは、何故、死ぬまで監獄に入れて置かれねばならなかつたのかと思つてみた。しかし、自分には解らなかつた。Hと云ふ人が泣いてゐるさよに云つた。

「いづれにしても荒木君は死刑をまぬがれなかつたんだから、あんなことをしなければよかつたのに――」

さよは訊いた。が、その人は説明しなかつた。

さよは、夫の裏切的行爲の一切を知つたのは、その後二三年過ぎてからだつた。もう、誰も生活費を送り屆けてくれる者はなかつた。

そして、貧しい生活が十幾年間過ぎて行つた。

二十年間近く、默々として生きて來たさよは、二度目の敬一の手紙に對して、返事を出したいと思つた。

「敬一、返事を書きます。

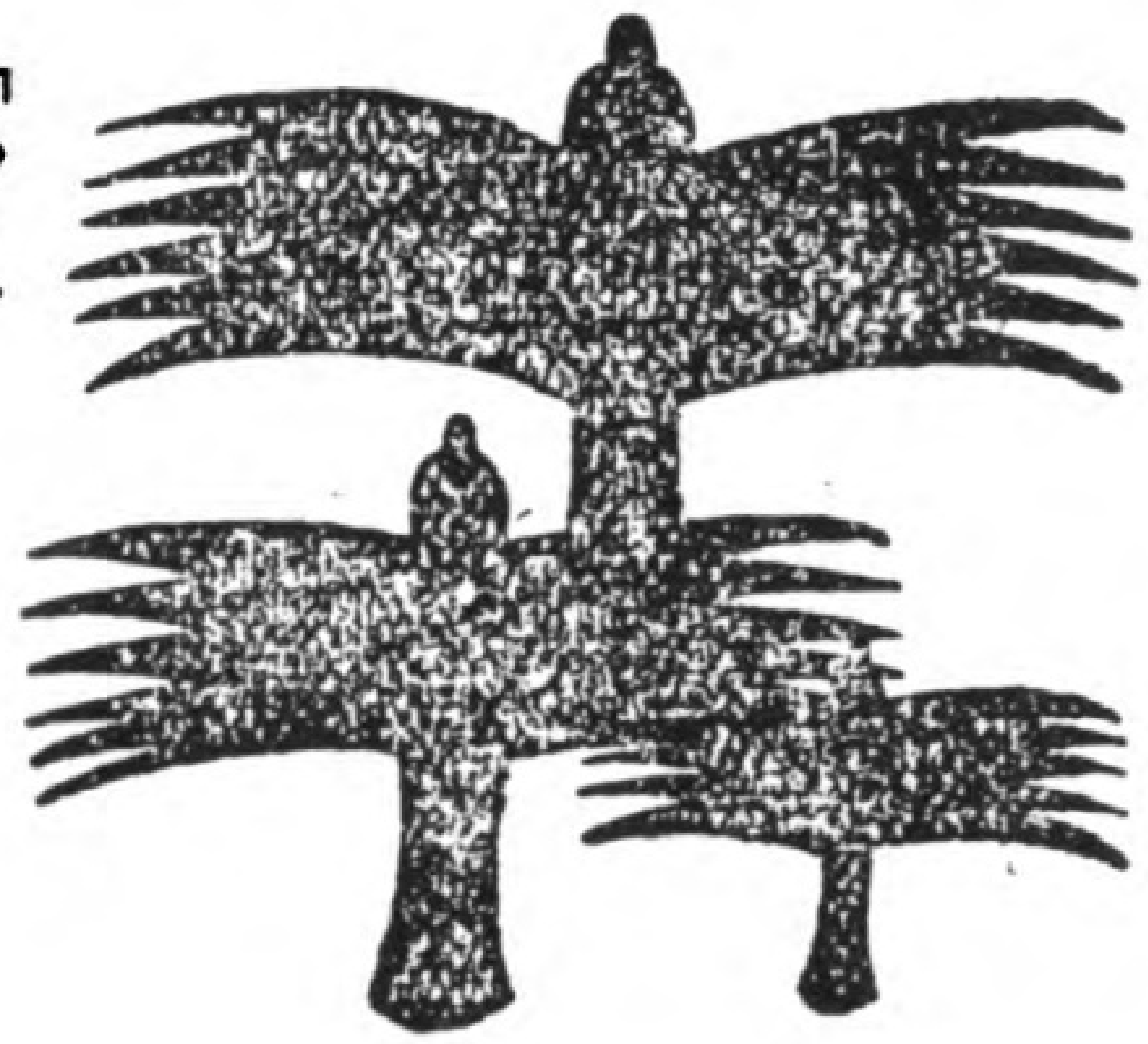
裏切つて同志を賣つたお父さんも、やつぱり死刑はまぬがれなかつたのです。お父さんから裏切の一切を買つた人は、賣る者自身をも買つてゐるからです。同志だけを賣つたと思つたお父さんは、實は、まづ第一に自分を賣つてゐたのです。

……………………………」

…………………………………………

さよは、髮の毛の白くなつたことを忘れた。

一九二九、七、六



結末

川瀬美子

「あー」
共子が聲を出さうとしたのと、保の視線が彼女の目にぶつかつたのと、同時だつた。
公然と文通をしたり、家を訪ねたりする事を許されない境遇にあつて、たゞ偶然に道で出會ふ事が、戀人同志らしい自由な時を持つ事の出來る唯一の機會である彼等だつた。
そこゝの學校で夏の休暇が始まつて、學生達が歸つて來たり歸つて行つたりしはじめた頃から、このひよつとしたら偶然をいそ／＼と待つてゐた彼女であつたゞけに何となくこの邂逅が奇積的にさへ思はれた。
「どこへ行らつしやるの！」
「濱へ行つて水を浴びて來やうと思つて出て來たんだが――君、さしつかへなかつたら一緒にそこまで歩いてみない？」
「えゝ」
共子は、一寸友達の病氣をみまいに行つて來たかへりだと云ふ事をつけくわへながら、かげつて來た日ざしに白いパラソルをたゝんで杖についた。
「先達のあの事件どうだつたの？　大變だつたんでせう」
湖濱に通じる土堤をならんで歩きながら、共子は先づ第一にそれをきいた。
それは、先頃かなり新聞でもやかましく書かれてゐた保の籍をおいてゐるS大學の社會科學研究會に對する警

察及び學校當局の彈壓事件だつた。その結果、犧牲者として免官された二三の教授と學校當局から處罰された幾多の學生とを出した。放校にされた者や無期停學にされた者もかなりあつたらしい模樣だつた。

新聞に發表された所では全部假名になつてゐたが、共子は、五週間停學を命ぜられた者の中に保だと思はれる名を見出してゐた。

「五週間ぢやなかつたの、何とかつて假名にしてあつたけれど——」

「うん、一月餘り、おかげでブラ〳〵遊んでゐたよ。會は解散を命じられるし、頭株の奴はみんな出されるし、めちやくちやさ。」

生徒監にあたつてみたり、警察の方へかけあつてみたりしてかなり痛快には痛快だつた。毎晩Tと云ふ行きつけの小さいバアへ鳩首して前後策を講じるのさ。スパイが戸外をまご〳〵してゐやがる中で——」

保は愉快で仕樣がないと云ふやうに、語りつゞけた。

「實際彈壓つたらお話しにならないらしいのね。」

「……。」

「それぐらいでヤンガージェネレーションの熱情と闘志がふみにじられると思ふのかしら、實は私」

共子は一寸息をつくやうに言葉をきつて歩をゆるめた。

共子が保にすゝめられてその方の本をよみ出したのは丁度一年程前だつた。

女學校だけは出たが、遊んでは居られないと云ふ中流の下にくらいする家庭にあつて、共子はならひ覺えたミシンで子供の洋服や婦人服を造つてわづかばかりの金を月々得てゐた。しかし、この一年の間にその主義は、彼女をしてたゞ靜かに思想するばかりに止まらず闘爭の現實の中にその全力をうちこまうと云ふ決心をさせるまでに强ひ信仰となつてゐた。

「實はね、私近い中に上京する事になつたの」

「何しに」

保は疑問と驚異のまざつた聲で反問した、その問は彼女をひどく失望させないではおかなかつた。この人は他の何の目的で私が上京すると思つてゐるのだらう。

「T組合の方で職業をみつけるから是非上京出來たらす

るやうにつて言つて來たので、うちの許しを得て、いよ〳〵行く事にきめたの。いつまでもこのぐづ〳〵した生活からぬけきらうとしないで小ブルジョワァくさい生活をして行くのは卑怯だと思つたもので」

「いつからそんな事を思ひついたの」

　共子は保の問の一つ〳〵が彼女の期待に對してちぐはぐになつてゐる事を感じないでは居られなかつた。

　Tと云ふのは、彼女も支持者の一人となつてゐる小さな機關紙を發行してゐる組合であつた。そこには階級運動のために、命をかけて戰つてゐる幾多の同志がゐた。

　彼女が時々手紙をもつてする質問にはいつもていねいな返事が來た。そして上京をうながした。それ等の事實も明らかに彼女の決心の原因とはなつてゐたが、も一つの大きな原因は、保の戀人としての彼女自身をふりかへつてみた時、そこに見出される同志的結合が、いかに彼の主義の發揚のために力强い戀愛であるかを考へてみた事だつた。

　そして彼女の家庭で異母と彼女がかもす冷たさは父も母も娘の上京を二つ返事で許した。

「四五ケ月前から――、思ひつくつて云ふよりも、自然のなり行きだと思ひますわ、大衆をはなれてこの主義の發展はのぞまれないんですもの」

「聰明な――新らしい女性としてこの主義を理解する事は必要だと思ふ。しかし女が一人で實行運動にはいつて行く事はむづかしい、むしろ悲慘だね」

「まあどうして？　プロレタリヤの女が、その立場から戰ふ事がどうして悲慘？」

　共子は興奮して思はずせきこんだ。これが階級運動を口にする男の口から出るべき言葉だらうか？

「僕自身さうした女を少からずみてゐるがどうも餘り感心しないね、女の女らしいところが少しもなくて――、持つてゐる者はすべての女らしさに對する無智な反抗だけ――。それらの女の勞働者や職業婦人に對しては、ある程度まで感心しないでもないが、戀愛なんて氣持は全々起らないね」

　共子は耳を掩ひたかつた。

　女の女らしい所――彼の意味するその言葉は、小ブルジョワア的な家庭生活にしばりつけられた在來の女の型

を一歩も出ない者を意味するのではないか？
ローザを禮讃する彼が、自分自身の戀人が雄々しく階級戰の渦に身を投じやうとする事に對して一種の侮蔑を感じる、それは何と云ふ矛盾だらう？ 彼も又、プロレタリヤ運動に身を投じてゐる一人ではないか？
主義者には主義者としての戀愛樣式がなくてはならぬそしてそれはその戀人が又同志である事より他にはないのだ――

しかし保は、口に階級運動を唱へながらその戀愛の對象として求めてゐるのは、フランス紅と香水でお化粧して、マルキシズムをピアノをひくと同じ氣持で解する小ブルジョワアの所謂聰明な新らしい女でしかないのだ。

そして彼女をその型に入れるために、マルキシズムを知らせやうとしたのだ。

失望と落膽とで共子は目の前がくらくなるやうな氣がした。

いつか共子の心は、それが今さき迄彼女の戀愛の對象であつたにもかゝはらず、保に對して侮蔑を感じてゐた。

今さきまで戀人同志であつた者が時間にすれば一時間にも足りない間にもう相反した心を持つ――それは戀愛を唯一の生命とする者には或は死にも相當する事だらうが、共子には主義がある――鬪爭がある――幾百の同志がある。プロレタリヤの戀愛は同志的結合の他にはあり得ない。その以外の物は遊戲だ、自分は今よろこんでこの遊戲を蟬脫しやう。

共子の心にほの〴〵としたさとりが頭をもたげて來た

たそがれのせまつた湖がいつか二人の目の前にせまつてゐた。歩くたびにざく〳〵と音をたてる砂濱だつた。

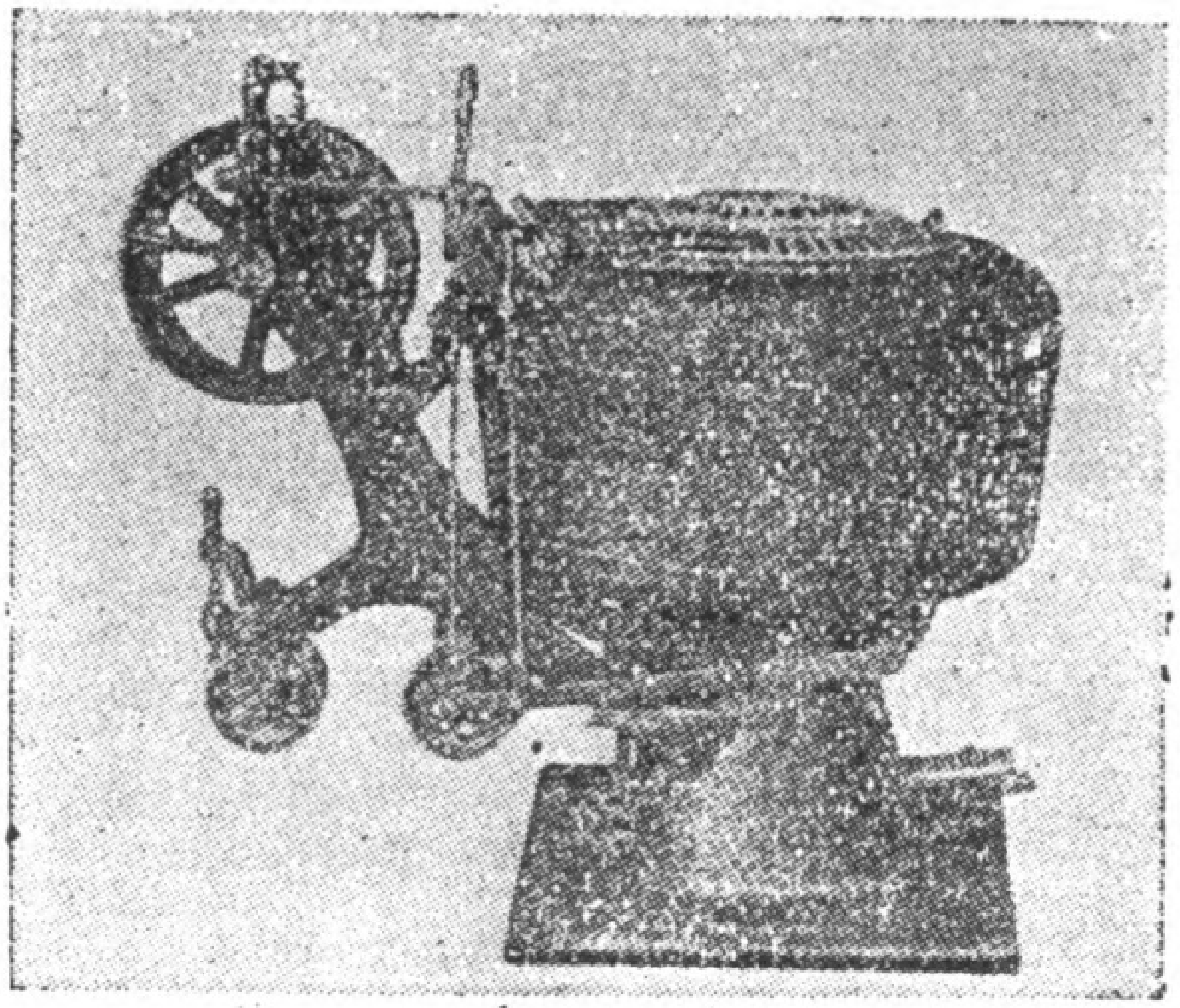
「せつかく來たんだから一寸浴びて來やう」

彼は着物をふうわりと松の枝にかけるといそいで水の中にかけこんだ。

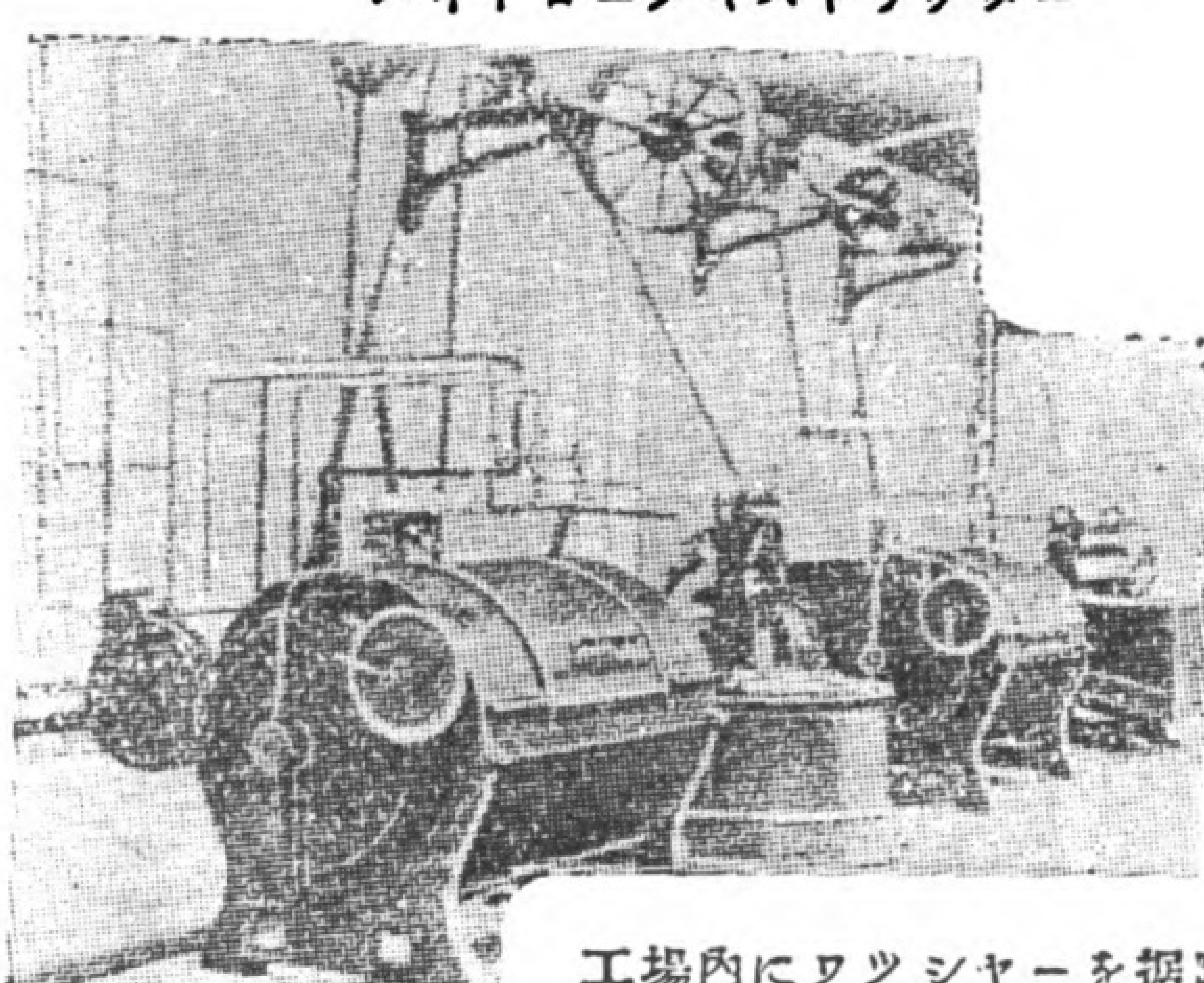
一しきり水しぶきをたてゝ飛臺に彼は上つた。もと來た道へひきかへさうとした共子の目に、鶴のやうにすらりとした彼の姿がうつゝた、共子は彼の姿を後にして小きざみに今しがたきた道をひきかへした。

彼女の心には「マルクスボーイ」と云ふ語の含む侮蔑的な意味がしみ〴〵と心にひろがつて行くのを感じた。

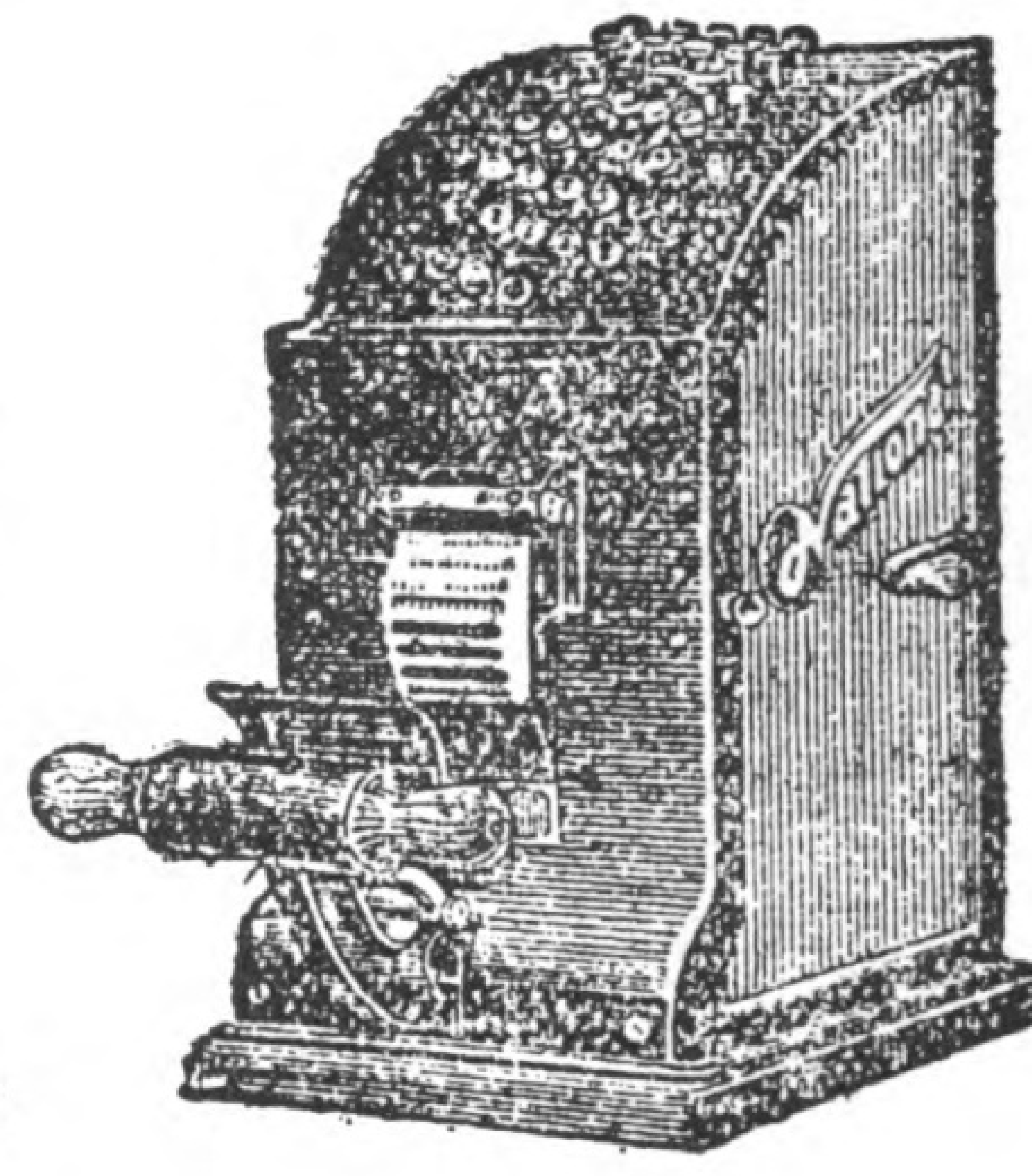
洗濯工場見がく



ハイドロエツキストラクター



工場内にワツシヤーを据附
けたところ



マーキングミシン

お洗濯物の過程を見る

一、マーキングミシンでお客のカシラ文字の記號をつける。

二、ワツシヤー(洗濯機械)石鹸液の中で回轉して揉んできれいにするのです。

一度の洗濯に何分間ワツシヤーが回轉するといふかといふことは汚れ方や品物の質に依つて違ふが、

一、水もみ　十分―十五分

二、石鹸もみ　二十五分―三十分

三、煮ながら回轉するとき　三十分―四十分

四、熱湯ゆすぎ　五分

五、温湯ゆすぎ　五分

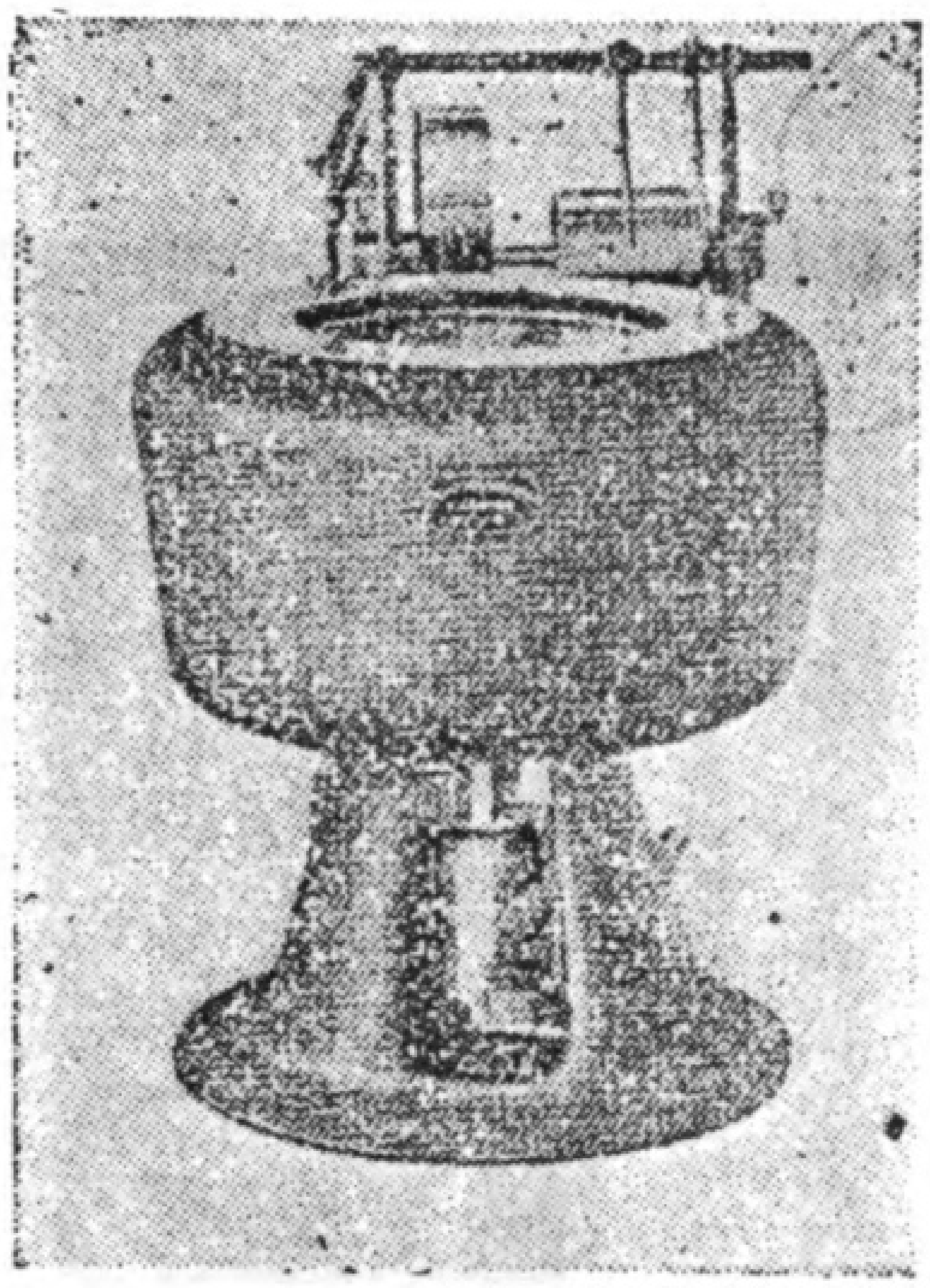
六、冷水ゆすぎ　五分

七、青味つけ　二分

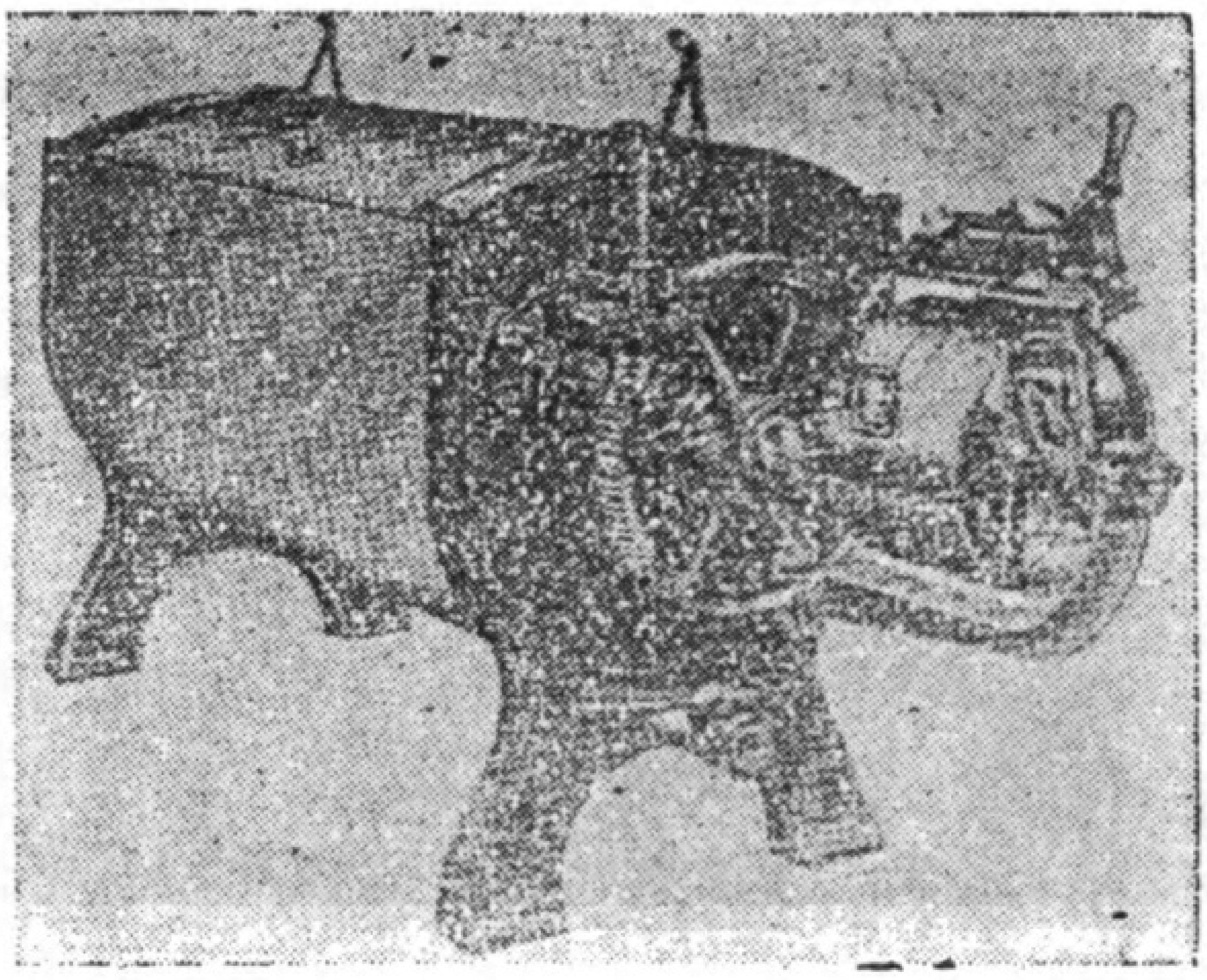
合計一時間二十二分―一時間四十七分

三、ハイドロ、エキストラクター(水絞機械)

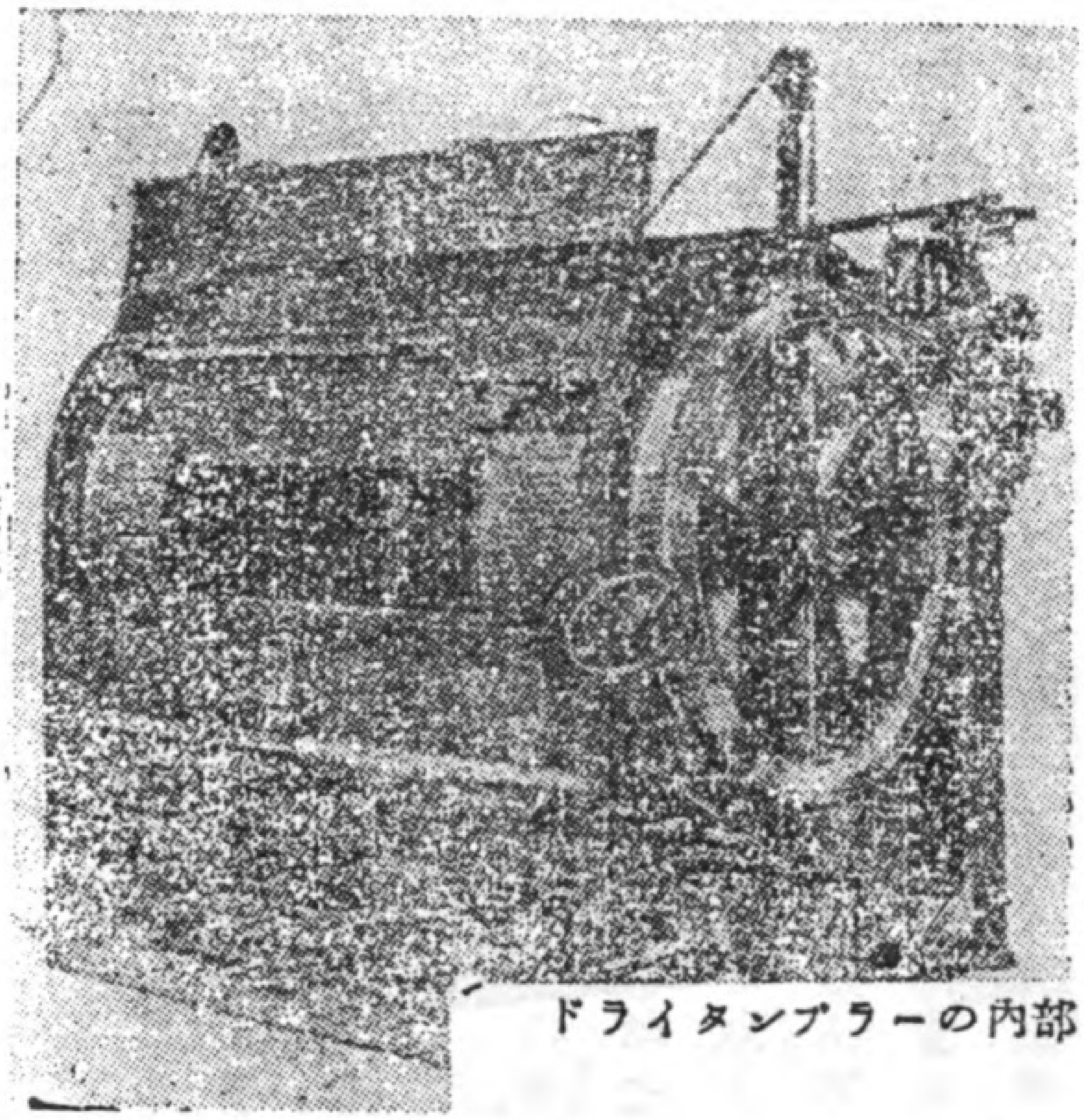
この中には金屬製のバスケツトがあつて周圍に穴があいてゐます。くる〳〵強く回轉



ハイドロエツキストラクター



ドライクリーニング・ワツシヤー



ドライタンブラーの内部



抽出式乾燥室

して、品物の水分を半乾きになるまで絞りとります。

一、テーブルクロス、ナフキン類　十五分間
二、シヤツ、カラー　十二分間
三、糊物　六分間
四、糊ナシ　七分間
五、毛織物　三分間。

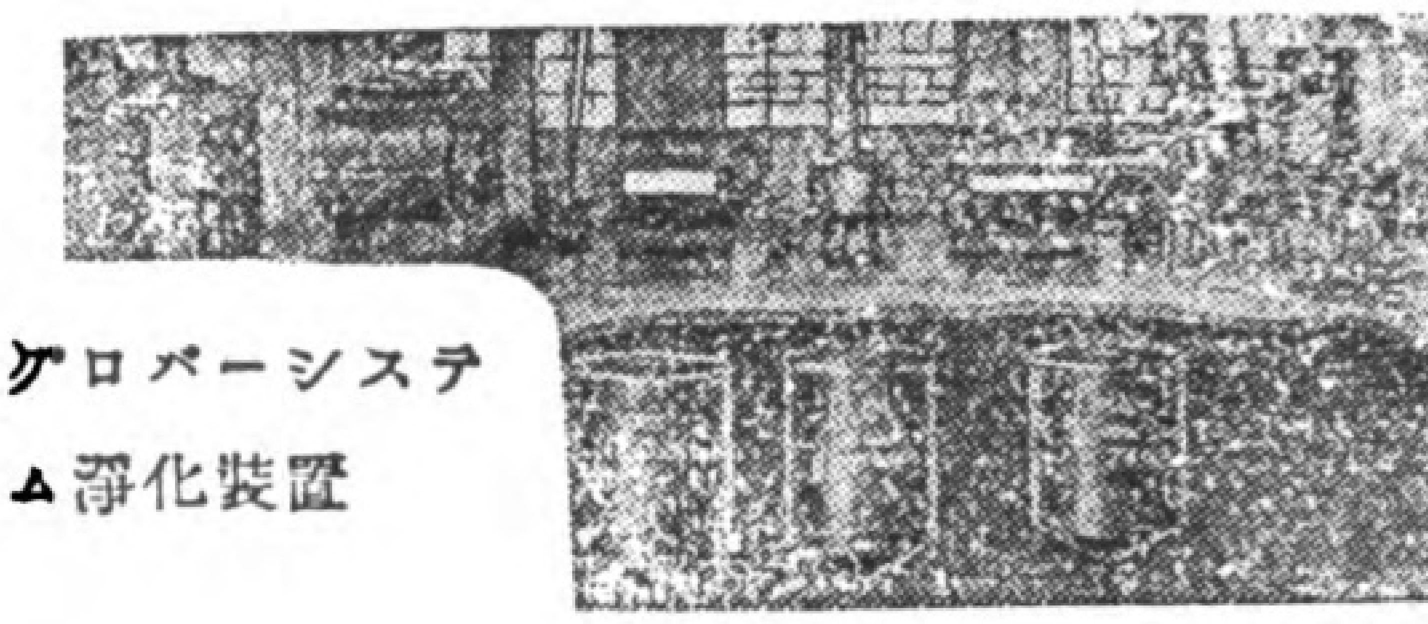
四、ドライタンブラー（回轉乾燥機）
内桶が回轉しながら多數のスチームパイプから發散する熱と下の風車から送られる乾燥した空氣にふれてすぐに乾くのです。

五、最後にロールで仕上げをするのですが、ロールの下の金屬製床盤の中にスチームが通つてゐて、それが鏝代りにもなり乾燥させつゝ仕立げをします。

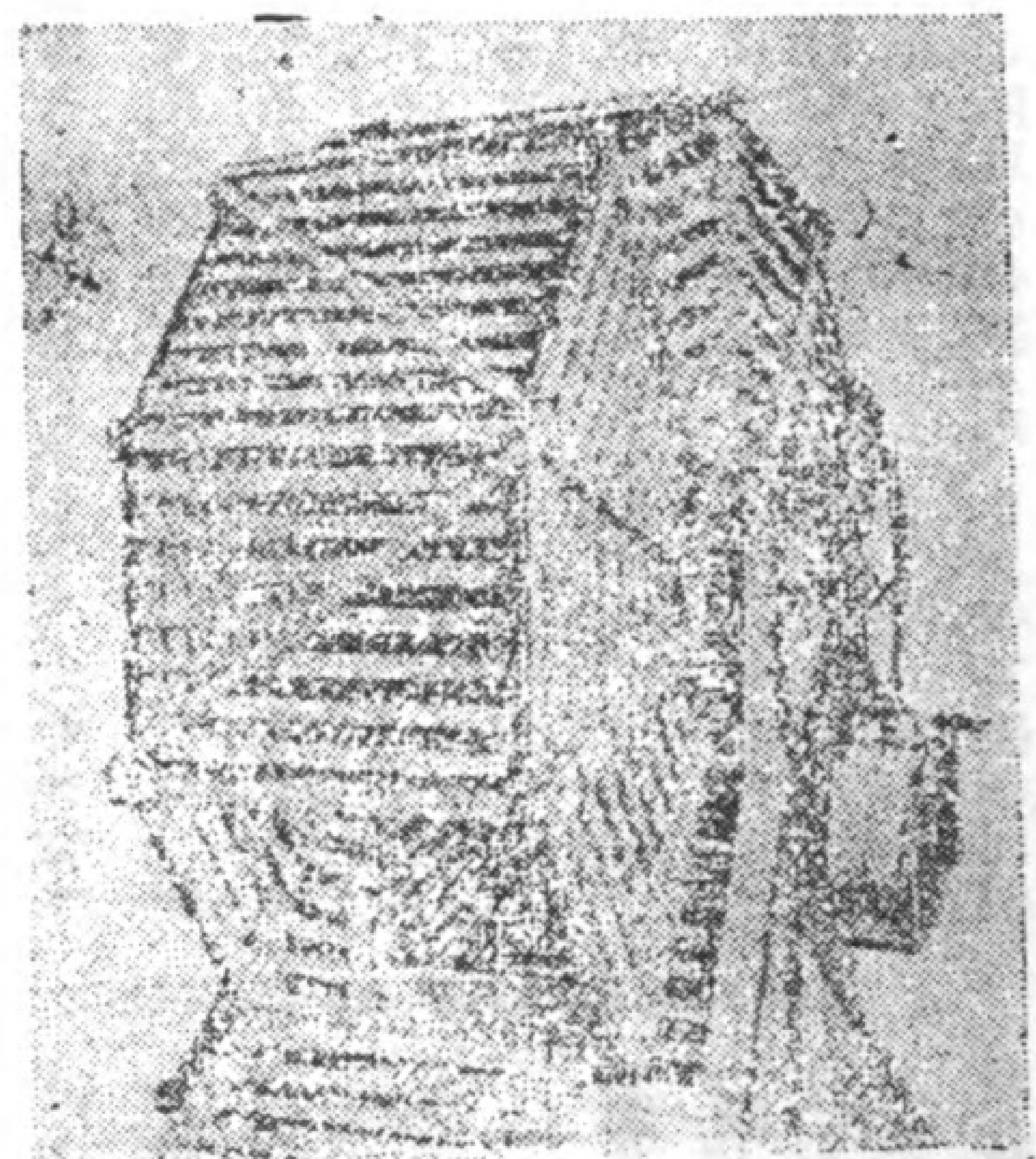
ドライクリーニグ

ドライクリーニングは、水の代りにガソリンを使つて、ガソリンによく溶けるベンヂンソープといふ石鹼で洗ふのですが、これに機械の物理的機能を巧妙に利用してあります。

一、ダストホキール（ごみ取り機械）
濕氣のあるものは一應乾かしてからこれに



グロバーシステム淨化裝置



ダストホヰール

汚なくなつたガソリンを淨化して再び使ふ裝置

右端から、小タンクが藥品溶解用二番目のやゝ大きいのがトックタンクで地下タンクの底にある沈澱物を一時ひきあげて更に最後の上澄みをとります。三番目の小タンクは地下タンクで淨化したガソリンを更に淨化する處。四番目の調革のかゝつてゐるのがポンプ。五番目の四角い箱はトラップあらいゴミを網で濾すところ。六番目ワッシャー。七番目エッキストラクター。八番目トラップ。九番目ワッシャー。十番目ドライタンブラー。十一番目乾燥機。

かけて徹底的にゴミを取除きます。

二、ドライクリーニング、ワッシャー（洗濯機）

普通の洗濯のときと同じ働きをします。

三、ドライクリーニング用ハイドロエッキストラクター（絞る機械）

次に絞る機械にかけるのですが、こゝはガソリンですから摩擦のとき發火しない様によく注意してゐます。

四、ドライタンブラー

こゝで乾燥します。中にスチームのコイルが裝置されてゐて、早く乾します。

五、プレス機械

即ち、最後に仕立げをしてドライクリーニングが終るのです。

洗濯工場の誌上見學について多大の便宜を圖つて下さつた白洋舍專務取締役五十嵐健治氏に厚くお禮を申上げます。

私たちはもつと早くもつと安上りに洗濯して貰へる樣な組織が出來て、洗濯に費されてゐる婦人の多大の時間をもつと有効な方面に使ひたいと切望する者です。

文化について

新居格氏

窓に花を咲かせたがつたり、ベッドを羽根枕でふくらませたり、電氣スタンドの好ましい色のシェートでテーブルの上をいろどつたりしたい心は、取りも直さず、知識階級のプチ・ブル氣質である。

×

ブルジョアは勿論、プチ・ブルジョアのもつ最もいけない好みは、必要以上の、或ひは必要以外の餘計物に愛着することにある。

×

わたしは、ぶしつけな斷信を敢へてして憚らないことを欲する。それは外でもない。最も文化的な尖端位に立つものは、却つて今の、一般的高雅に住むと自ら認じてゐる人々とは反對に生活してゐるとさへ思ふ。ほんとうのシックな人々は、その風貌に於て Care-free（なをざり）であるかもしれない。少くとも装飾的でない筈である。これは興味あることだ。

意識して企てられた装飾は、建築の上でも、家具の上にでももう古いものに屬してゐる。今、わたしはそれらの近代的動向についてこゝで特に述べやうとは思はないが、われ〳〵の生活に於て一例をとれば、服装に於いても、室内の装飾においても、意識的に加へられた装飾はもう古い型である。

今、文化生活の雅趣を誇りたがつてゐる多くのプチ・ブル階級者、つまり時世におくれた人々だと、失禮ながら申上げたい。

×

ニューヨークの或るモダン家具屋は、「モダニズムは單純で、精巧で、有用」と廣告してゐた。單純だが有用、それは取りも直さず、無駄と餘計のものを刈込むことである。

ハスケルが云つた装飾的近代主義（デコレーチブ・モダニズム）（但し、家具の上に加へられた）とは、一言につくせば、非装飾であるが、然し装飾的なものだといふことになる。その間にありうべき裁斷は、意識的装飾と無用無駄の刈り込みである。

これが最も近代的なものであるが、この原理に依つて今の日本のいはゆる文化生活乃至は文化人に適用してみよ、いかに裁斷されなければならぬ多くの部分をもつてゐるかを、人々は直ちに發見するにちがいない。

――經濟生活より――

地に落ちた麥

（掛井冴子）

おなじ調子で二人きりになる朝毎の時間を、きまつて掛井が持出すのはその問題だつた。出勤の支度をしてから、焙じ茶の一杯と、果物の一切れをつまむのが掛井の習慣なので、冴子は食卓の横で梨の皮なぞをむきながら、

「お前考へておいてくれたかい？」とか、

「まだお前の腹はあのまゝかい？」

といふ、憂うつな夫のことばを耳にしなくてはならなかつた。

「是が非でもあなたの言葉に從ふのが私の約束だつて、それは無理ですよ。私には出來ませんわ。なぜつて、それが思ひ通りに出來る位ならこの世に苦勞はなからうぢやありませんか。」

掛井はかぶりを振つて、朝刊を彼女の前に突きつけ、廣告欄のある部分を指でさし示した。

「かういふものがある。そしてかういふものもある。これらはみんなその目的を意味してゐるんださうだよ。…………罪と定めてあつたところで、一方ではかう云つた手段と方法とで公然とこの種の藥品も許されてある社會だ。お前が考へるやうなそんな窮屈なものではない。」

「世間がどうあらうといやです私は。私たちの家庭で、私たちの夫婦間で、本氣でそんなことを考へるだけでも不快なんです。一たい、どうしてあなたがそんなに拒んでらつしやるのか、私にはわからない。」

「あれほど話してもわからないといふのは、お前が僕への理解と同情とをまるつきり持つてないからだ。さうだよ。お前は女だからそれでもいゝだらうが、僕は男だ、生活の責任はいやでも僕が負はなけれやならない。そしてお前はます／＼僕に重荷を負はせていゝ氣味だと思つてるかも知らんが、僕はお前のために生れた道具ぢやないんだからな……」

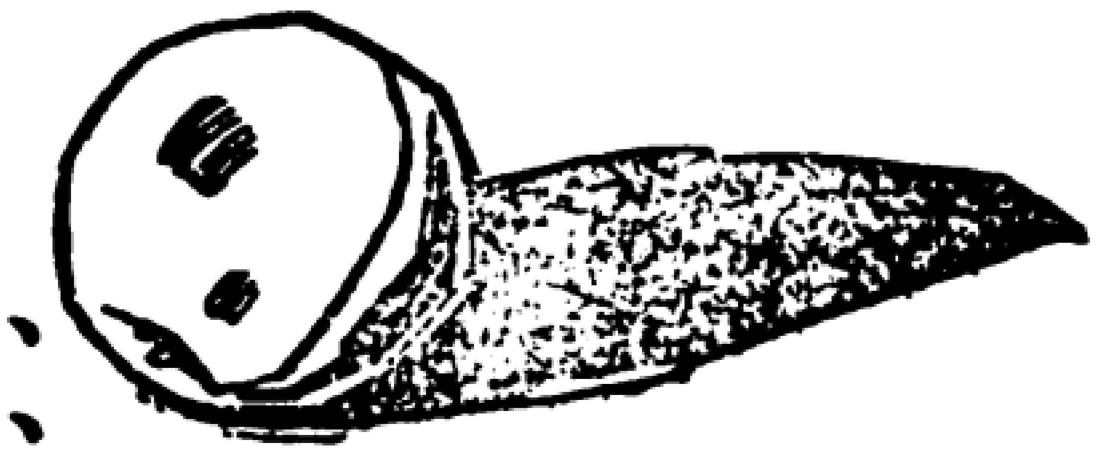
この手だ……と冴子は梨の蕊をゑぐつて皿に盛りながら內々うんざりした。昔から生活上の問題なぞにつけても、冴子のしたことが當然で、眞實で、さうより外には術がないことが分り切つてゐることでも、掛井の感情に副はないとさん／＼責めつけて、冴子が泣いて詫びないでは納まらない。冴子はさうした掛井の感情を怖れるために、故意にも贅澤にも定まつた高より多く食べる筈のない米屋の勘定すら、何か掛井にすまないやうな氣持て、掛井に隱れて支拂ひをしなければならなかつた。

さういふ習慣ですべて來てゐる夫婦間だつた。言葉で通らなくなつた最後に、掛井はきまつて、冴子が掛井への理解と同情がないからだといひ、そのあとはやけになつて、こんな責任は僕には負ひ切れないから家庭を破壞してしまふといふ。四人の子まである冴子にそれが致命的なことが知れ切つてゐるために掛井は我まゝを通した。また通つて來た。けれどもいま掛井が冴子に迫つてゐる一つの問題ばかりは、十何年やつて來た調子で謝罪つたり、詫びたり、すみませんでした。これから氣をつけますと誓ひを立てるわけにはゆかない。

――婦人公論より――

心の雜草を摘む

奥むめお



一、うちのカナリア

「唄を忘れたカナリアは、――」と、とき〴〵思ひ出したやうにうちの紀伊ちゃんは緣側を飛んで步き〳〵うたふのですが、それを外にしては私の一家に歌の聲が起ちません。それ程に「唄を忘れて」暮してゐる私の一家であります。

或日、夕方の散步がへりに――と云ふておいたのでは、後からお尻が割れて、佐野さんに發き出され嗤はれまいものでもないので白狀しますが、實は、職業婦人協會の會合が割合に早く終つたあの日、うちに歸つてみると誰もゐなくつてまつ暗なのです。

そしてすぐ思ひ出したのは、子供たちはみんな日比谷公園の音樂會に行つた筈だつたといふことでした。私の家では平生母親がルス勝ちなものですから、土曜日の晚と日曜一日とが兒童愛護デーであり、家族だんらんデーでもあります。いつの間にかさういふ慣習になつてしまつて、土曜日は成べく早目に私も外出から歸つて來ることにして心ばかりの御馳走をたべて、新宿あたりまで散步に出るか、活動の割引を覗くか、お友達の方へ一家總動員で出かけて行つてもてなしにあづかるか、とにかくそんな風にして子供中心にゆつくりすることになつてゐるのでした。

その晚丁度、どうしても土曜日でなくては會合が出來ない事情になつてゐて私は歸りがおくれるものでしたから、子供たちへのおまじなひに、

「日比谷公園に陸軍の音樂隊が來るんだよ、勇ましいのや靜か――なのや、いろんな音樂が聞かれるんだから今日はお夕飯を東京で食べよう」とつれ出しました。

そして私は會場である事務所へ驅けつけたのでした。(子供といふものは、ほんとうに阿呆らしい位母親を信頼し切つてゐるものです。)

その晚なのです。うちに歸つたら誰も居なくてまつ闇なのです。始終うちの者にルス居ばかりさせてゐる私ですけれど、私自身は一人でうちのルス居をするのは淋しくてこわくてどうしても

出來ません。――もつとも、私がうちに居ると云へば子供たちはどんなにいゝ處へ誘はれても行かうとしないのですから、外のどの人もどの人も出かけてしまふとしても、子供二人は必ず私のそばに居てくれますから、私一人がルス番をするといふ機會は絶對にない。(まあ、當分はかういふ有難い境遇に、母親として子供に圍繞されつゝ居られるわけです)――

で、その晩もまつ暗な家の中へ入る元氣がないまゝに、風呂敷包みをそつと井戸端のもの影にかくして、そのまゝ高圓寺の佐野さんの家へ遊びに行きました。夜分の十時近くです。ボーナス袋で疲れたやうな佐野重吉君は寢ぼけて、裏口からごめん下さい、とおとなふ私の聲を聞き違へて、頻りに表玄關の方で、どなたです、どなたです、と聞いてゐるのにはあとでみんなが大笑ひしてしまひました。

その晩、幾箱にも飼つてあるカナリアがすつかり羨ましくなつてしまつて、箱ぐるみ、卵三つ抱へてゐる親カナリアを一番ひ貰つて來ました。毎朝、朗らかなカナリアの唄で目が覺める、といふのです。側で唄つてやつたり、蓄音機をかけたりすると、カナリアは一層熱心に大きな聲で唄ひ出す、のだといふのです。何てカナリアつて可愛いゝ鳥でせう。

さうして貰つて來たカナリアですけれど、うちへ來てから一ケ月、この頃では殆んど唄ふといふことがありません。私の一家の者のやうにカナリアも唄を忘れてしまつたのでせうか。

「唄を忘れたカナリアなんか、裏のお庭に捨てちやいませう」

と云ふと、紀伊ちやんはすぐに泣き出してしまつて、いやだ〳〵と云ひ張ります。

「ぢや、紀伊ちやんが幼稚園で習つて來るお唱歌を毎日カナリアに聞かせてやつて頂戴、カナリアはお唱歌が大すきなんですつて――」

涙の玉の未だ乾ききらぬ紀伊ちやんが、一生懸命唄つて聞かせてやつても、カナリアは一向について來さうにありません。

三つの卵も可愛いゝ雛になりましたが、唄を知らないカナリアだつたらつまりません。

二、憶ひ出す父のうた

私の父は空が好きでした。お太陽さまが好きでした。

「チヽキトク」の電報を受けとつてうちへ歸つたとき――その頃私も、私の兄も東京へ遊學してゐたから――店から土藏に通ずる中の部屋が、廊下もろともにすつかり毀されてうちは見違へるやうに變つてゐました。

『どうしたの? こんなに壞して――』

うちの者は病人の方へ目くばせをするばかりでありましたが病人は、如何にも滿足げに云ひました。

『一日寢てゐると、天がちつともみえぬのでなあ、斯うして窓ぎわに寢てゐると、天も見える、雲も見える』

そして、和歌を作つたから書きとめて呉れと云ふのでした。

私にうたを聞かせやうと思つて、歸るのを待ちかねてゐたのだ

というのであります●

私の、とり返しのつかぬ後悔でありますが、實はそのときの歌反古をいつの間にか失つてしまつたのです。お父さんの記念だ、と、あんまり大事にして持ち歩いてゐる内に反つて何處かへ片附け失つてしまつたやうに思ひます。

朝から一片の雲の流れたのを見ただけであるが、けふは雲がないのであらうか。

寢てゐて見る月、仰ぐ星、朝の朗かな太陽、どれもみんなまるで違つた感銘で心をゆすぶる。

刻々にうつり變る雲の脚、空の影をみてゐて、今日も、長い一日の漸く暮れに近づいたことを知る嬉しさ。

音のない風、音のない光、音のない雲、寂として四溟に音なし、何にも思ふことなし、思ふまいとして思はないのではない、思ふことが何にもないのである。

吹く風をうけたいと思ふて庭(中庭)一面に杉を買ひ求めて植えたが、その杉はどうやらみんな枯れさうだ。

子供らは年賀狀もくれず淋しい正月をしたが、顏を見ればそんな怒りは消えてしまつた。

子供らが學をそつち除けにして遠いところから歸つて來てくれたが、親の喜びはそんなところにはない。子供らよ、學ぶことをやめるなよ。

どれも、なつかしい父の心でありました。知らず知らずの内に、私の心にも父の心が蘇り息づいてゐるものでせうか。私も、寢れては天を仰ぎ、口惜しがつては天を仰ぎ、涙を流しては天を仰ぐ慣習にいつの間にかなつてしまいました。

『母ちゃん――母ちゃんの大好きな花を取つて來たからよう』

紀伊ちゃんが持つて來る花は、露草であります。水引草であります。もしさうでなかつたとしたらはこべの類の雑草であります。いつも書くことでありますが私はやつぱり雑草が一等すきです。

こんな草にも名があるのだらうか、と微笑ましくなるやうな道ばたの雑草にも、春となり、夏となり、秋となつて時節が來れば、それぞれにつゝましやかな花がついて何とうれしいことでせう。

朝お向ひのラヂオでラヂオ體操が初まる頃、私は子供たちと手をつないで電信隊の原つぱを驅けて歩くことを日課の一つにしてゐます。二軒三軒と安普請の借家が建てられてこの頃大分狹くなつては來ましたが、でも、猫の額ほどにも土地を所有してゐない私たちには、無際限につゞく原があり、野があり、川があり、山があり、涯しなく廣々とした地上に大手を擴げて心ゆくばかりの散策が出來るのでありまず。

三、私の生き方

ものを云ふことの嫌ひな私しが講演や演説に引きまわされる。書くことの嫌ひな私が雑誌(婦人運動)を發行してゐる。殘酷な自己分裂だと私の心は泣いてゐます。

さき頃わが邦の消費組合運動の先驅者である岡本利吉氏のある著述をよんでゐて、何といふ仄々として人に迫る力をもつた書き

方だらう、と驚嘆しました。單なるかけ聲や、煽動的辭句の決して及ぶところでありません。況して、そこいらの文筆勞働者が言葉のアヤを重大視して原稿用紙の桝目の中に一字々々と書きのばしてゐるやうなものとは全然違ふと思ひました。

勝つものはやつぱり眞實だなあ。

私はその時もしみ〴〵と憶ふて一息ついたことでした。といふことは、眞實より外何ものをも持ち合せてゐない私といふ一個の、今の時代には生きてゆき難い人間一匹への慰さめでもありはげましでもあり鞭撻でもあるのだつたのです。何にもない者でさへ――誠意のないもの、力のないもの、氣のないもの、――さへ言葉一つで如何にもありさうに、親切さうにみせかけてぐん〴〵と上手に押して行つてる人の多い世の中に、内に溢れるほどのものを持つてゐながら、口下手である上に、くど〳〵しいことを云ふことのとかく嫌ひな私は、みす〳〵損な立場におつこち易い。

「犬でさへ、この家の中で一番に私になついて來るぢやないの」

と云ふて私はよく笑ふのでありますが、なまじひに小賢しい知慧があつたり、まわり氣があつたり先入見があつたりして、人間け、人の眞實を中々見拔き難いものゝやうに思ひます。私の兄と妹と、早くより兩親に死に分れた私たち五人兄妹の内の二人が不幸な死に方をしました。病氣だつたと思へばそれまでゞすが、とり返しのつかぬ事であるのに、人間の眞實といふものは何故かうも通じないものであらうと、見離されたかはいさうな私の心へ涙の雨を降り濺ぎつゝ地團太踏んで私は口惜しがりました。

これは、堪らなく淋しいことであります。かういふ淋しさに度度出會すと人は、誰でも憂鬱になり、孤獨になり、懷疑的になります。外見ではそとへそとへと歩いてゐるやうに見える私にも内へ内へと閉ぢ籠つてゆく自分を一方で感じさせられるのです。

この二つの矛盾、これは矛盾といへば大きな矛盾でせうが、然し、自分の心が内側へ向けられゝば向けられる程、外(そと)へ働きかけずにゐられぬ心、云ひかへるならば、全く孤獨の中に住み切れない心、然も人の世に安住出來ない心、それは相克の相であると同時に如實な人間の姿ではないでせうか。

さういふ風にしてわたくし流の生き方が自然に生れて來た、と私は自分でさう考へてゐるのですが、私は自分でそれに内心秘かに名づけて無手勝流と云うてゐますが、小賢しい小智を頼まない心、姑息な彌縫小策を信じない心、素手で、何の成心もなく、素つ裸かでありのまゝに、信ずるまゝに、見た目思ふ心のまゝに直接に人の世にぶつかつてゆく生き方です。それは捨身の構へとでも云ひませうか、不死身の修業とでも云ひますか、私一個人としては此の世の中で誰れに勝ちたいと思つてゐるわけでもありませんが幾重にも伏線を引いてものを云ふ人や、先き廻りして小技巧を弄する人や、人を陥れやうとして穴を掘る人やの尠くない今の世を生きてゆくのに、私のやうな人間には、結局かういふ無手、無策、無技巧、無見榮等に、あるが儘の裸か姿で有るがまゝの私自身を承認して貰つて進むより外ないといふことを、一層痛切に感じさせられるのであります。



職業を通して何を見たか

職業遭難記(二)

林芙美子

四

月給をもらつた嬉しさは何にたとへる術もない。父や母の笑顔を見た時、親孝行つてこんなに譯のないものかと思つた。

私はやうやく株式店の空氣にも馴れて、女のお客が來ると、相場會社によく共をして出掛けて行つた。パンパンと叩く男性的な快味、賣つた買つたの群衆の上に、勇ましく手を叩いては、兩手をひろげる事務員の姿に私はうつとりせずにはゐられなかつた。

だが、かうした所は誘惑が多い。

重役のA氏は二人の女事務員を淺草に奢つてやると云ふので、私達は子供のやうに喜ろこんで手を打つた。

荻の谷と私とＡ氏と小僧の四人は自動車で淺草に乘りつけて、第一にはいつたのが帝京座の安來節だ。

Ａ氏は栃木の人で大地主だつた。安來節に驚いてしまつた私は、何も興味が持てなくて、暖い寢床へ歸へりたかつた。

ちん屋で牛鍋をつゝいたり、すべてはお上品でない遊びだつた。

十時を過ぎても、Ａ氏は平然と杯を口にしてゐた。私は遠い大久保の家を思ふと、たまらなくなつて歸へりたいと云ひ出した。

「もつとどつか面白いところへ遊びに行かう……。」

私はとてもその元氣はなかつた。赤い腰卷の安來節に疲れ、腹は牛肉ではち切れそうだつた。無理に振り切つて、私と小僧はＡ氏から靑バスのキツプをもらふと、始めて自分らしい氣持になつた。

「荻の谷さんは、Ａさんに氣があるんだよ、でなきあ俺達と歸へつて來るのに……。」

小僧はませた口調で、Ａ氏が不身持で素人女に對して辣腕家だと敎へてくれた。

そのあくる日、案の定、寢ぼけた顏をして十二時過ぎに昨日の姿のまゝの荻の谷がやつて來ると、二時間ばかりして、やつぱり蒼ぶくれのしたＡ氏が凛々と出社して來た。

小僧の宣傳で、社の衆目がいつせいに二人の上に火花を散らした。

それからはＡ氏と荻の谷の間は公然の祕密になつてしまつた。

私はそこで、芝居に連れて行つてもらつたり、妾の家に文づかひしたりして二年半も務めた。荻の谷はＡ氏の子供を孕むと、すぐ止めてしまつて、栃木のＡ氏の家に乘り込んでいつたとかで、社内はその風評でいつぱいだつた。

それからあの震災である。

私は今でも茅場町から、大久保までの道程をよく步いたものだと思ふ。

勿論社を燒かれてしまつては、どこへ務めやうもなかつた。震災は九月一日だつたので、月給はもう前の日に

もらつたばかりだつた。

三日目から震災の街を親子で見て歩いた。

私達の家は、植木屋で、庭が廣く、少しも恐れることはいらなかつた。

荒れた街には、急ごしらへのすいとん屋、ゆであづき、煙草屋、マスク賣りなどの大道商人が急がしく立ち働いてゐた。

このまゝでは、飢へてしまはなければならない。故郷へ歸へる人は無賃で汽車へ乗せてくれたが、別に歸へらなければならない古里もない私達は、何か商賣しやうと明けても暮れても考へにふけつた。

三十五圓の私の月給袋も殘り少なになつて、氣が焦るばかりだつた。

一日父が歩いて、思ひついて來たのは、あべかは餅と、つけ燒だつた。餅はいゝと云ふので、新宿のガード横の古道具屋で荷車を一臺一月ぎめで借りると、二つの七輪や、皿や、餅をのつけて、三人で丸の内の市役所前の舗道にヒラヒラとしたテントを張つた。

煉瓦崩しの人夫が澤山ゐて、餅はまたゝく間に賣れ、電車が無いので父は歩いて、餅屋をさがしに行つたりした。

またゝく間に日比谷公園に、食道新道が出來たり、私達のならびもこうした店でいつぱいになつた。

食ひ逃げがあつたり、夕方手傳つてくれる夕刊賣りの子供達ちに、固い賣れ殘りを分けてやつても、七八圓のもうけがあつた。

燒けた餅を、蒸し釜の湯に入れて、黄な粉にまぶすのが一番よく賣れた。

だが、その商賣もきはもので、市役所が出來たり、舗道が少しづゝなほると、退却命令で、なつかしい赤煉瓦の土工たちとも別れなければならなかつた。

二ケ月あまりで、私達はその餅屋のお蔭で二百圓近い金を得た。父も母も此時こそ九州へ下らなければ、又放浪しなければならないと云ふので、歸へりたがらない私に諦らめて、父母は又遠い九州に去つた。

五

たつた一人ぼつちになつた。

野の一本杉のやうに、頼りどころのない私は、三十圓の金で二月ばかり植木屋の二疊に煤けてゐた。

自動車の女車掌も受けて見たが、目が惡るくてはねられてしまつた。

そしてやうやう見付かつたのは、本郷八重垣町の、レースの問屋だつた。ハンカチだの、テーブル掛、カーテン、毛糸を商ふ店で、丁度冬なので、毛糸が山のやうに積んであつた。

私はそこの小賣部に月三十圓で務めるやうになつた。住み馴れた大久保を引きはらつて、本郷千駄木町の、小さな洋服裁縫所の二疊を借りて、毎日その店に通よつた。

家賃は五圓。押入れがないので行李の上に蒲團を積んだりして、窮屈だつた。

店の仕事は、毛糸を買ひに來る客相手で、風船のやうにふくらがつた毛糸に埋れて、私は毎日々々本を讀んだ。

電車賃はいらないし、お米は五升あれば足りるし、夜は六時には歸へれるし、自由にのび〳〵と暮らす事が出來た。

あざみと云ふ詩のパンフレットを出したのもその頃だつた。

二ケ月目には、又そこを止めなければならなかつた。店が左り前で、思はしくなく、私が一番不用になつたので、七圓ばかりの日給をもらふと、淋しい失業者になつてしまつた。

又、新聞の廣告欄が必要になつた。部屋を借りて暮らす事が不安になつた。女中でもいゝから住み込みたい。

――女書生をもとむ子供好の方

それは文士の家庭だつた。よく京都のお女郎の事を書く人で、もう相當の年輩の人だつた。

あくる日荷物をすつかり、洋服屋にあづけて、東中野の奥の近松氏の宅へ私は始めて小間使ひに住み込んだ。下働きのお菊さんと、私と二人きりの女中で、家内は近松氏と、生れたての赤ん坊と、妻君とで、始めて文士の家庭なるものに滲透する事が出來た。

子供はよく泣いた。私はいつも守り役で、長い廊下を子供を負つては、本を讀み〳〵歩いた。

近松氏は書けないと、梯子段を降りたり上つたり見て

ゐるものがたまらなかつた。

子供は近松氏に似て、細々と美しい子だつた。私はそこでは思ふ存分本が讀めて嬉しかつた。不思議に子供はよく私の背で眠るし、妻君はいゝ人だつたし、近松氏がむづかしいきりだつた。

明るくはないがいゝ家庭だつた。

「俺はもう年をとつてゐるので、此子が一番可哀想だ。」つて氏は大變子供を愛してゐた。

私は近松氏の家にもいくらも居なくてひまをとつた。

その頃兩親は中國を行商して廻つてゐた。

どうも思ふやうに商ひがなく、みじめな母のたよりを手にすると、いつそ死んでしまいたい程切なかつた。

結婚媒介の案内欄も何度目に止つたらう、その頃の私の詩は亂れて來た。死のうかと思ふ時、思ひ返へすのは、私の藝術だつた。どうにもならなくて、團子坂を矢のやうに涙をほとばしらせて走り降りた事もあつた。

——分け、自前、看板貸し随意。

どら焼を買つた包み紙の都新聞に、こんな廣告を見て、私は藝者にならうと思つた。五十過ぎた二人の老人が、旅に放浪してゐる事を思ふと、切なかつた。

その決意を固めると、私の空想は汚れた事ばかりだつた。

私は洋服屋の叔母さんについて來てもらつて、神樂坂の小さな藝者屋にはいつて行つた。藝者になるには、あまりに年をとりすぎてゐた。三味線も彈けなければ、踊りと云へば、女學校時代に覺へた體操のダンスより知らない私だ。主人は幾度も考へてゐたが、

「もう何もかも御存知ですと、話の仕様もありますが、素人なら十三位から欲しいんです。これから色々と稽古をつけて、衣裳をこしらへたら、二百圓位しかあげられません。」

私は、がつかりしたやうな、又救はれたやうな氣持で歸つて來た。

六

當分は洋服屋の二疊でみじめな生活が續いた。虚無的

な思想にかたむいて、私の生活には明日がなかつた。

玩具のセルロイドの色塗りの女工に通つたのもその頃だつた。

子供の蝶々の櫛や、キユーピーや、ヨツトや、色々の玩具の色が強度に私の目を刺激して私は街を歩く時、十銭均一の黒目鏡を掛けて歩いたりした。

なにくそ！

私はこの強味だけにひかされて生きた。

それから結婚したのは間もなくだつたが、私が貧乏だつたので、役者だつたその男は女優と逃げてしまつた。男への放浪もそれから始つた。

あゝ結婚て二度とするものじやないと思ひながら、やつぱり淋しくなると男を戀ひした。妻となつて、カフエーに働いた事も長い。その男も亦少女をこしらへて去つてしまつた。

私が最初にカフエーに住み込んだ日だつた。通ひだつたので、十二時過ぎまで客があつたのを、やう／＼主人に願つて、舗道へ出た時は、もう電車も何もなかつた。始めて店の時計がまちがつてゐるのに氣がついた時、私は唸りたい程悲しかつた。

外に泊る事は夫にどんな痛手をあたへるだらう、私は夜中でも歩こうと、神田の神保町から田端まで私は一直線に氣を張つた。

犬の恐ろしい私は犬を去けながら、深夜と云つても、灯の多い上野公園下まで夢中で歩いたが、暗い森の下をつゝきる事を思ふと淋しくてどうにも仕様がなかつた。

私はふと私の横を自轉車で飛ばしてゆく、ハツピをきた男の人に追ひすがつて言つた。

「私田端まで行くんですが、もし逢染の方へいらつしやるのでしたら、連れて行つて下さいませんか、おつかないんですが……！。」

ハツピを着た人は染物屋の職人らしかつた。

「店の使ひでおそくなつちまつたんですが、もしよかつたら自轉車に乘りませんか。」

私はもう恥も外聞もなかつた。

片方の手にコツプリの大きい下駄を持ち、片方の手で、その男の人の肩につかまつて、私はそれこそ怪し氣にも、

深夜の奇妙な自轉車乘りになつた。

あれから數年――名も所も知らせてくれなかつた、勇ましいハッピの職人の事を思ふと微笑しながら涙が滲む。

まだ轉々と私の職業は變つてゐる。

大阪での放浪、おでん屋、外交員、筆耕、そうした色んな思ひ出が、氣弱になりかける私をどんなに鞭打つてくれるか知れない。

あの日、此の日

田邊さと子

×月×日

「田邊、工務がよんでゐるから事務所まで行つてくれ」

小頭にいはれた私は、糸屑だらけのまゝ事務所に行つた。

「おい田邊、メーデーに參加するのか？」

「さー、どうなりますか」

「幾歳だ」

「十七です」

「じやまだ〳〵參加出來ないじやないか。え、どうだ。二十歳前の者は法律でも自由に運動する事が出來ないやうになつてゐるではないか。だから二十歳まで勞働組合に入らずにゐたらどうだ。そうして時節が來たら大いにやるさ」

「でも工務さん。けして法律によつてきめられてゐるのじあないじあありませんか。それに二十歳前の者だからと言うても、勞働者でない事はないのですから」

「じあお前は、その意味で勞働運動をやつてゐるのか」

「えゝ、勞働運動とまでは行きませんが自分の身をまもるために」

「じやあお前に聞くが、勞働組合の根本的の目的

はどこにあるのだ」

うるさくなつた私は、

「さー。よく知りませんわ。そんな事でしたら支部長さんに聞いて下さいな」

工務のあつけにとられてゐる内に、にじるやうに仕事場に來てしまつた。あーゝ面白くもない。今日も昨日も、毎日〳〵おせつきようばかり聞かされて。あゝ、けれど私達幼年幼女工は勞働運動をやる事をゆるされてをらないのかしら。

そんな事は無いはずだ。一人前の織工とおなじように、否、もつと慘酷にこくしされてゐるのだから。やるやり出した事だ、工務がなんと言おうと、プロジョアかいきゆうの者がなんと言ほうと、己の信じるかぎり、どこまでもこの運動を續けよう。

×月×日

チーン、柱時針が三時半をうつた。起きようとは思ひながら寢返りをうつてウト〳〵とした。あアねむつてしまつてはいけないのだ。今日ね過ぎて休んでしまつたら、明日役付になんと言はれるだらう。それを思うとねてはゐられない。思ひ切つてくるりとおきた。

「行つて參ります」

と家を出た。家々の戸は皆閉つてゐる。通りはしづかだ。たゞ黒の作業服に白のエプロンをかけた××紡績の女工があちらに二人三人とつれだつて行くのみだ。汐入橋まで來た時に橋の上に人だかり、もとより×紡の男女工にすぎないが。人々の間から川面をのぞいた。アツ溺死人!! 男だ!! 私はおそろしくてにげるやうに工場に入つた。その日一日溺死人の事をかんがえてゐた。

「おい今朝此の橋の下で土左衞門が上つたんだとよ」

「ほー、男か女か？」

「男だとよ、しかも三十五六の働きざかりだとさ」

「ふーん、なんだつてまた男ざかりの者が身投げなんかしたんだらうなー」

「何んでも××會社の織工だとさ。所がな、ふだんからからだがよわくて會社に出たり休んだりしてゐたんだ。そして此の間もしばらく休んで、一昨日會社に行つたらつかはないと言うのだ。その男はいろ〳〵あやまつたけ

れど、一文もくれずに首にされてしまつたんだとよ」
「ほー氣の毒になあ。それを悲觀して身投げしたんだな」
「うんそうだとよ」
あゝ、こうした通行人の話を聞いた時、なぜか我が事のやうな氣がしてハラ〱と涙がおちた。あゝ、もし彼に金があつたら、まさか身投げなんかしなかつたのだらう。あゝ金が無いために又々人の生命が一ツ消えたのか。
いづくのたれか知らねど、我らプロに一日も早く幸福の日のをとづれる事を草葉のかげでいのつてゐて下さい。

首がころがつてる〱

吉田むつみ

朝八時半、けふこそ吉いことあれ、と祈るやうな心に職業紹介所へ急いだ。昨晩のうちに、洗つておいた足袋もから〱に乾いたし、久し振りに水を打つて疊んで寢たボイルの着物も、仕立おろしのやうにピンとしてゐるし、心まで、この頃じうのじめ〱した憂欝がすつ飛んでしまつてゐたから、自然に、心も輕々しかつた。
パツと、赤色のパラソルを開いたら夏らしい若い香が私を喜ばせた。
「これで、戀人訪問としやれてるんだつたら隨分と可いんだけれど、ゆき先きは職業紹介所とございますだ。チエツ」
私は、自分で自分を嗤つてやつた。
男子の入口の方をみると、大人しさうな紳士が幾人も〱絆纏姿の勞働者に混つて順番の來るのを待つてゐる。獨身者らしいのも多いけれど、お嫁さんのありさうなのも、子供がありさうなのも尠くない。
こんなにすが〱しい朝といふのに、もう、紹介所の中は職を爭ふ人だかりでムツとしてゐる。みんな、パン

の問題の前に一すぢの藁すべにも握りつきたい焦燥を露骨に現はして景色ばんでゐる！

58番　59番　60番……所員はまるで事務的に、型のやうに、順番に従つて人を呼んでは歸してゆく。きのふから一握りの飯にもありつけなかつた人も、退職手當ての三百圓には手をつけたくないからといふやうな結構なお身分の人も、けさ、出がけに、妻君と喧嘩をしてチヤブ臺を引くり返して來た人も、みんな一樣に番號札の順で片づけられてゐるのだ。

「遊んでゐたつて恩給が入るんだからね、然し、タダで紹介してくれるといふんだから、何かいゝ働き口でも取れゝばもつけの幸といふものだ」

　こんなことを考へてゐさうな圖々しく横平な感じの中爺さんもゐた。

「そんな氣儘なことをいつてゐたんでは、この不景氣に働く所があるものですか」

「………」

「御らんなさい。此處ばかりぢやないのですよ。東京中の職業紹介所が朝から、この通りの人だかりで職を爭つてゐるのですからね。今どき、勉強の餘暇を與へてくれて、子供の無い家なんて有ると思つたら大ちがひですよ」

　私の前の娘さんが叱られてゐるのである。私も叱られ組か、と思ふと順番が來る前に逃げ出したいほどだつて、うしろに、澤山の求職者が待つてゐるんだから、みんなの前で叱られては恥しい。

　私は、いろ〳〵と俐巧さうに云ふ言葉を考へたりしてゐる内にだん〳〵氣持が重くなつて、家を出がけにあんなにも輕々としてゐた心がすつかりぐつたりしてしまつた。

「何にも、いゝ口がなささうぢやないか。來るんぢやなかつた！」

×

　私は、昨日と一昨日と二日つゞけて新聞廣告の求人欄を帯の間にはさんで、歩きつゞけたのであつた。何處に行つても、一人しか雇入れないといふ所に、五十人六十人の求職者が殺到してゐるんだから、そして中には、重役の氣に入りさうな素的なのや、てきぱきと仕事の能率

がいかにも上りさうなのや、立派な學歷をもつた人やが澤山にあるので、どつちを向つても採用掛りは私なんかには目もくれないやうな應接振りであつた。

あゝ、あゝ、女の首も男の首もごろ〳〵ころがつてゐるのである。勞働豫備軍といふのださうだけれど、成ほど、こんなに澤山に豫備兵を控へての採用ぢやあ雇主は安心なものだなあ、と沁々と思うた。

けふもまた、職に有りつけず疲れたり
　ものを思はず道をゆき〳〵
勞働豫備軍、勞働豫備軍と
　呟きたり、現役兵もラクでなけれど

工場日記から

砂塚よし子

×月×日

我々の生活擁護のため、賃銀の値上のために、工業從業員大會を開いた。同志の熱ある叫びは工場内をゆるがせる程であつた。居合せた工場幹部はにがり切つて居た。

其の結果は、我等が勝利であつた。今迄の樣な不公平な各種の分配法は、同志の强い監視のためになほさなければ成らぬやうにした。此れは工場の内部の事であるが、廣く會社的に考へる時、全無用階級が結束して資本家に合理合法的に戰ふ時、それは正義の光がさす事だ。同志よ結束しよう。

×月×日

私達の先輩同志は續々と町會を無產階級の手に奪ひ返すために立候補した。

今日は誰々、明日は誰々と出來得る限りの應援をした。ある時はY町からS町と隅から隅迄走る時もあり、御飯を喰べる時間が無くてペコ〳〵の御腹をして家に歸つた事も幾度か。しかし、自分の同志は皆永い勞働時間の勞

働を終えてつかれた體で、共に階級的に戰ふ時、つかれた事も腹のすいた事も忘れ、たゞ無産階級の生活の不安をのぞくため私達婦人の家庭的に社會的地位の向上の爲にまつしぐらにかけ巡つて居る。

そして一日の使命が終り家に着いた時には、今迄の空腹が一時に思ひ出されて來て、寢しなに毒とは知りながら、一息にのみ込んでしまつた。時計は十二時をうつた。

×月×日

大阪の同志十一名が市會に當選した。見よ、既成政黨の狼狽の色を。如何に彼等が民衆をぎ瞞し様としても、我等新興階級の自覺の前にはいつ迄もごま化す事は出來得ないであらう。

國會に、市會に、町會に、同志は新しい正義の旗を眞先に彼等の心臓を突き破り、腐つた政治を改革するために全力をあげて居る。

工場の私達も、家庭の婦人も。我等の未來のために此の資本主義の社會改造の爲に、新しい光と希望ある無産階級のために今日より猶一そうの努力をしやう。そして同志の鬨の日を誓はう。

職業婦人の解放

鳥井しげ子

私は此頃自分の生活や、自分と同じ仕事をしてゐる人の生活を見て、今の世の中では何が一たい悲惨だからと言つて安月給とりの生活位悲惨なものはないと思ふのです。

私は神田の或る出版會社に雇はれて、その大きな編輯室で一人の校正係として働いてゐますが、毎月單行本を三冊から五冊受け持たされ、讀者カードの整理から、發送の手傳ひまでさせられて四拾圓の月給を貰つてゐます。勤務の時間は朝の八時から夜の五時半まで、その中、晝には一時間の休憩時間がある事になつてゐます。正味

八時間半の勞働で、休みは第二日曜と第四日曜との月二回ですから、工場に働いてゐる婦人達に較べたら、そう不平の言へる柄ではないのかはしれませぬ。然し、たゞ個人と個人との生活を社會の組織や動きから全く切り離して考へる事は、誤りであるよりも大きな罪でさへある事をしつかり考へなければなりませぬ。私よりももつと危險な仕事をしてゐる女工さんがゐて、その人が月二十圓の金にしかならないとしても、私が必要以上に素晴らしく惠まれた月給取りであつて、その女工さんがあたり前なのだ等といふ理由は決して〳〵ないのです。その女工さんは、資本家の激しい搾取のもとに働かされてゐるのであつて、當然その不正な處置に對し、資本家に、大勢の仲間と一しよに抗して立つべきであると同じ様に、私も亦搾取されてゐるのであり、出來る事なら共に私達も資本家に向つて當然の要求をなすべきなのです。會社は毎月五萬圓も儲け乍ら、私達の月給は一錢だつてあげやうとはしないのですから。

　會社の重役達も、雇はれてゐる私達の給料が少いといふ事を意識してゐるのでせう。毎月一回月のはじめに仕事が終つてから開かれる懇談會には、

「貴方がたよりも世の中にはもつと〳〵苦しんで働いてゐる人が大勢ある。私達もこれまでになるには孤軍奮鬪したものです。皆さんも一生懸命忠實に働いて成功して下さい。」

　といつも言ひます。御親切は有難いが、今はもうそんな事を眞にうけて働いてゐる時代とはまるで違ひます。重役達はそう言ひ乍ら、私達の勞働時間を此四月から、たゞ一言の斷りも私達にせずに、天下り式に三十分延長して了つたのです。(今までは午後五時まで)而も仕事は從來の三割はたしかにふえ月四回や五回の夜業までさせるやうになりました。同じ賃金で、勞働時間を延長し、仕事内容をよけい與へて、それだけ彼等は、私達の弱みにつけこんで、私達を一層多く搾り取るやうになつたのです。若しこんな事が、もう少し大きな會社であるか、或はこの編輯室の下になつてゐる二階の印刷部で爲されたら、乾度其處にはストライキが起つたに違ひありませぬ。

　私が此處に勤めてゐて一番不愉快に思ふ事は、資本家

の搾取もさる事乍ら、それよりもプチブルヂョアや變なインテリゲンチヤの集りである此編輯室の空氣です。朝から晩まで猥談以外、而も何の藝術味も眞實味もない、頭から人間を馬鹿にし、性慾を玩弄視してゐる下品な猥談以外に、此處には何の特長もないのです。猥談必らずしも私は嫌ひではありませぬ。然しそれが、人間に對する甚しい侮辱、殊にそれが藝者、遊女、淫賣婦等に向つてなされる時、私は何時もたまらない怒りにおそはれるのです。大學を卒業して、一月たつだ四十五圓しか取つてゐない奴等まで、編輯長や編輯次長と一しよになつて私達女性や、虐げられた無產者の生活に對して、侮辱の言葉を用ひる時、何といふその男は自分といふものに對して誇りをもつてゐない情ない奴だと思ふのです。他を侮辱するといふ事はそのまゝ自分自身を侮辱してゐる事を學士樣である其男は知らないと見えます。

　私は此處をやめたら、今のところ御飯をたべてゆく事が出來ないから、少時は我慢もしてゐるけれど、どうしてもそう何時までも居るべき處ではない樣に思はれます。私ははじめ何とかして、私の力で此處の空氣を改革したい、私と同じ樣に四十圓かそこらの月給とりが多いのだから、その人の生活も苦しいに違ひない。その人達にもプロレタリアとしての意識をしつかりもたせ樣と思つたのですが、それがたつた私一人の力では不可能な事を此頃つく〴〵思はれて淋しくなるのでした。うつかりしてゐたら却て私の首も飛びそうです。女のくせに四十圓は多いといふ聲さへもその人達の口から聞いては、何といふ階級的同情のない卑しい人間たちだらうと思ひました。

　此處の人達が、どうしてこうもだらけ切つてゐるのかしらといふ事について、私も深く考へました。一つには生半かなインテリゲンチヤの時代的な惱みでもありませう。が又今一つには自分の首がおそろしさに、編輯長や編輯次長の御機嫌をうかゞはねばならないといふ大きな原因があるのです。編輯長の机の抽出しには、何時も三十枚から五十枚の履歴書が入つてゐます。其處には、今使はれてゐる人間より、もつと勝れた能力をもつてゐて、而ももつと安くてもいゝから働きたいといふ者が澤山居るのですもの。

母親の夢

龍前清子

夕暗にこく彩りて過ぎゆくは子を思ほへる母親の夢

手をうちて喜びあひぬ子のなげしだるまたゝみにはね起きたるを

かほよせて子をいとしめば甘き酢き乳の香りにいとしさの増す

山ゆきてうれはしき花つけたるは毒草ときく教へはかなし

苗うりのこゑよびとめて夕顔の花なつかしき双葉もとめぬ

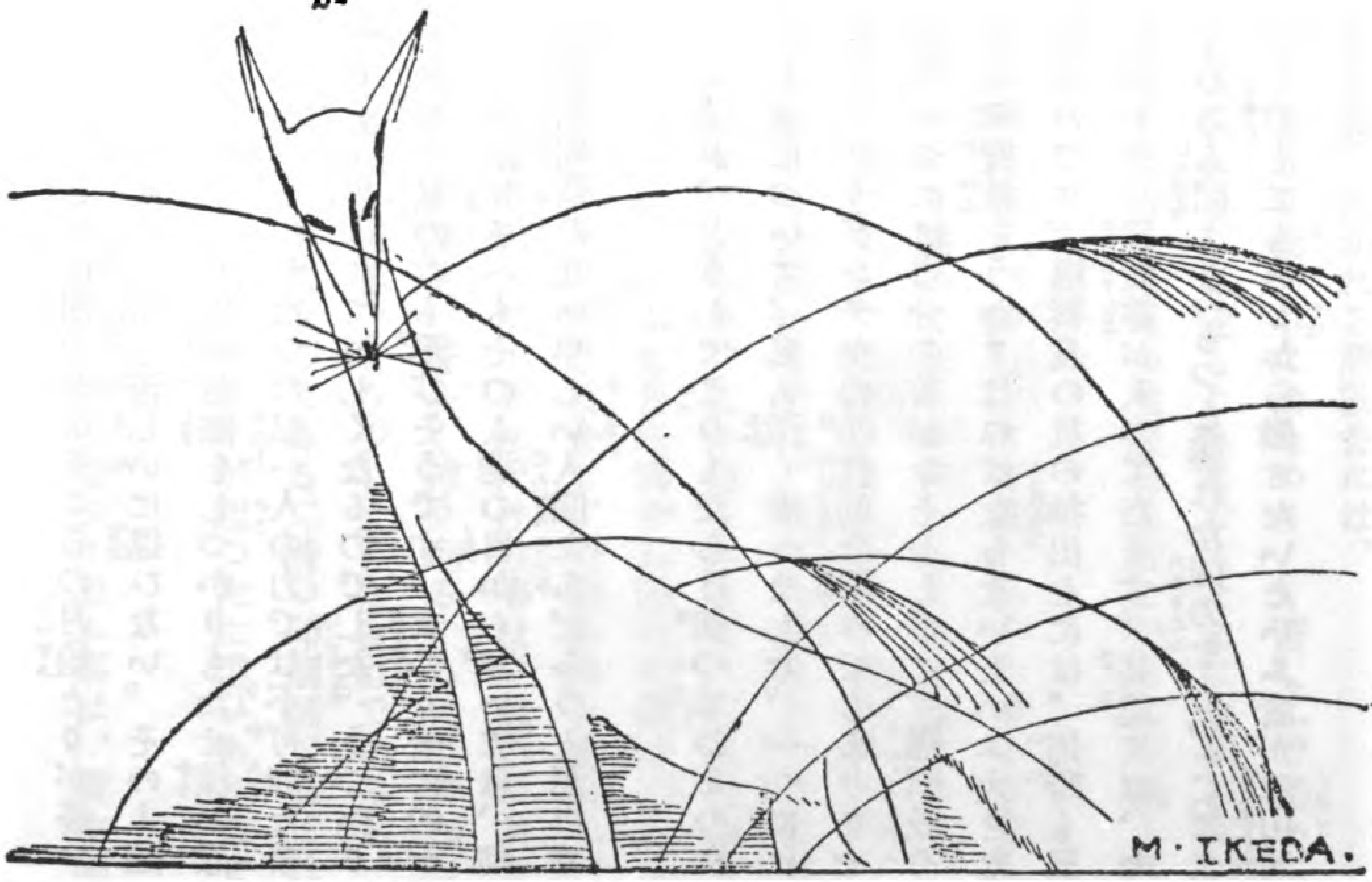
六月の木影にあれば吾子のほゝみどりうつりて青ざめて見ゆ

捕へしをすとすりぬけて去ぬいかに蚊も今宵いのちの惜しまるものか

窓あけて裏山の話きゝ居ればあちこち百合の花咲きて見ゆ

門跡（もんぜき）の御堂の屋根に入日さす鳩の胸毛の映へてみゆかな

誰が為の供養ぞ夜半に木魚のゆめに聞えて夢に消えゆく





果てしなく（創作）

榎本八十子

　八朔の節句がやつと來た。つたは、此の日が、實に實に待ち遠しかつたのである。半年振りの酷い勞働から解放されて、一と晩をやすらかに實家で眠れるからである。

　夕荷の茄子と、胡瓜を牛車にぎつしりと積んで、友造がむつつりと出掛けていつて了つた後で、つたは自分の着物を更へる間も惜しかつた。今日は、山下の祖父の家へ連れて行かれるといふので、八つの計助と、四つのおよねが、茶受けを食べて了ふとすぐにやいやい騷ぐので、姑のおせきは二人を叱り飛ばし乍ら、手拭ひ地の浴衣を着更へさせて置いて呉れたので、赤坊にだけメリンスの長い着物を着せて、つたは釘に引つ懸けてあつた紺絣を慌しく被つて赤坊を背にくゝりつけた。

「山下の家じや、俺がの土産や氣に入らねえんだ。通りへ出たら煎餅でも買つてゆけや」

と、おせきが五十錢玉を放り出して呉れた。

「計公、祖母が呉れたぜ＝取つとけ」つたは、下駄箱を覗き乍ら云つた。

「母やん、之で、花火と、どんちん買つて呉れ、な」

「あいよ、いゝから早く靴はきな」

だが計助は學校へもゆかれない不幸な兩足を持つて、び

よこびよこと腰を振り振り歩るく子だつた。氣忙しなく獨りで靴が穿けなかつた。次の子のおよねは、又、計助よりも、もつと彎曲した不自由な足を鼻緒のゆるいポックリに突掛けて、それでも母親の後に從つてゆこうといふのだ。

「およねは家で、祖母と留守居してんべえや」

とおせきが云つたところできゝはしない。

「どうせ背負つたり抱いたりだわ、さあいけ〳〵」

つたは二人の片輪な子を兩手に引き連れて夕方に家を出た。實家の山下は十町程のところだつたが、畑と、田圃と松林を拔けなければならなかつた。

白瓜や眞桑瓜の熟んだ匂ひが涼し氣な風に掻き交つて流れて來る中に、夕日が赤かつた。

紫の茄子の花の色は、つたの眼を慰めた。

彼女は、その小さな可憐な花の色から、花嫁樣の綺麗な裾模樣を思ひ描いた。何と華やかな想像ではないか。つたも一度は花嫁樣の日があつた。だがそれは、長い牢獄のやうな生活に乘り込んでゆく門出の悲しいさゝやかな粧ひでしかなかつたではないか。つたの足下では、無心な子供が二人、腰を振り振り奇妙な足どりで歩るいていつた。およねはじきに歩るき疲れてつたの腕を賴つた。

計助は道傍の畑の中をよろよろと戲け廻つて、棒切れを見つけると早速、横たはつた白瓜や、ぶら下がつた茄子の實をぴーぴーと叩き捲くつた。

「これ、馬鹿野郎、よその小父さんに怒られるぞ」つたはきびしい聲で怒鳴つた。

「よその小父公、見てやしねいやい、なあよね、之、父つちやんの〇〇〇だぜ、ほうれ」

こかりと光つた茄子をぶらぶらと突いて、小さい計助はけた〳〵笑つた。この時つたは異常な痛みを下腹に感じた。家を出ながら、怪しい不快さを下半身に覺へ出してはゐたが、今日行かなければ、またいつ實家へゆかれるやら知れない不安の方がつたを驅り立てたので、出掛けて來たのだが、彼女は靑草の上に棒立ちになつた儘、そつと眼を閉ぢた、ふらふらと前へのめり込みさうに、陣痛かと思ふ苦るしさが一時に襲つて來た、ほかりと生溫い液體が股下に流れ落ちた。流石につたは、はつとして手早く下帶で、危く草の上に辷らふとしたどす黝い血塊を掴み得たつたの額に靑筋がくつきりと浮んで、唇が白つぽく痙攣し

た。つたは腰紐をゆるめて下帯を外して、汚れた足を拭ひ立ち上つた。夕焼の空が茫つと霞んだやうに見へたが、そろそろと歩いて行けさうだつた。一寸心が惹けて後を振り返へると、蛇苺の花のやうに、青い草が點々と紅に染まつてゐた。

山下の電車通りへ出ても、つたは土産物を買ふ氣力もなく實家へ辿りついた。それでも、若い繼母や、大勢の弟妹達に取り巻かれると、挫かれたつたの體も彈ね上るやうな安らかさを取り戻した。

隱元豆と油上げの交ぜ飯が、つたのために振舞はれて、晩飯も賑やかだつた。

「つうちやん、今夜滿作踊りがあるのよ、行つて見ねい」

「去年のやうなの？」

「うん、そう、さつちやんとよねちやん寢かしちやつたら後から來なよ」小さい妹達はばらばらと出ていつた。先刻から、近くのお宮樣の境内から、彼等を急き立てるやうに太鼓の音が聞へて來るのも、つたの氣持を妙に惱やましく涙ぐましく掻き濁した。若い母親も後片付けを押しつけて置いて、つたを促した。よねを蚊帳の中に寢かしつけ乍らつたは、何處となく倦だるい體を、この儘横になつてゐ度いと思つたが、唆のかされるやうな甘い騷がしい周りの空氣は、明けても暮れても灰色のやうに粗雜で何等のゆとりもない彼女の生活の中に、何と輝かしいものであつたらう。つたはよねを父親に頼んで、赤坊を背負つて外に出た。若い繼母は星空の下に待つてゐた。

すつかり若者風になつた二人の弟は、滿作踊りなどに興味は持たなかつた。より面白い樂しみを貪ぼるやうに、彼等は、繁華な强烈な夜の灯に吸はれて、澁谷の劇場へと電車に運ばれていつてしまつた。

「辰公の奴、夕荷の歸りにや、きつとカフエーで西洋料理とか食つて來るんだよ、俺等にや名前も解らねえものをよ」と、母親は若い者の奔放な生活を統制の心もなく笑つて云つた。何處を歩るいても、草のいきれと、野菜の精力的な香氣の漲ぎつてゐる夜空の下で、人々はがやがやと蠢めいてゐた。滿作踊りと云ひ馴らしてはゐるものゝ、それは一つの喜劇で、急拵への掘立て舞臺で曾我の家式の寫實味も何もない笑はせ劇である。それでも近在の農家の人達の多い中に、浴衣がけの綺麗な細君達や、冷やかしの學生

達も交じつて、それでもみんな神妙に見入つてゐた。つたは、彼女の村から見物に來てゐる人に幾組みも出逢つた。彼女は今夜は、實に公然と、それを見物してゐられる身分に、誇りを感じて、夜氣にじつとりと濡れてゆくのにも氣付かず立ち通した。が、十二時を過ぎたと思はれる頃、「貞女のモデル」とかいふ、會社員の生活を現はした、甘つたるいお芝居の終るのも間近い惜しいところで、つたは再び烈しい腹痛に目が眩みさうだつた。夢中で見入つてゐる母親の袖を引いて、つたはよろよろと人波を泳ぎ拔けて、境内を横に南瓜畑の中路へ出た。

つうつうと股間を流れ出た氣味惡るい感觸を堪へ乍ら、つたは先刻からの話を母親に告げた。

「無茶だねか、つうちやんも。そんなんだつたら家で寢てりやよかつたのによう」母親は今更驚き顔に詰責つたが、案外、弱つてゐないつたの樣子に感嘆するのだつた。

夜路を歩るくことは、矢つ張りいけないのだつたと、つたは後悔めいた氣持に浸り乍ら、長靴を穿いた時のやうに重い足を家まで引きづつて來た。

「計坊は大丈夫かしら」

「みんな一緒だからじき歸つて來るよ、寢ちやつて、花に負ぶさつて來るかも知れねえな」

つたはもう早く横になり度かつた、横になつて一眠りしさへすれば、先刻からのもちやくさした體の故障なんか癒つて了ひさうに思へて、じわりじわりと、露を含んだメリヤスの帶を解くなり、くちやくちやに丸めて座敷の隅に投げつけて、蚊帳の中にもぐり込んだ。

無氣味な疲れがのしかゝつて來るに反して、體が宙に浮き上るやうだつた。

翌日朝飯を濟ますと、つたは歸り仕度をした。母親はひどく氣遣つて、産婆に診て貰ふやうに云つたのだが、つたの許された時間はお晝前まであつたし、姑達に相談もなしで産婆に診て貰ふのなどは以ての外の事だつた、で、父親によねを背負つて貰ひ、つたは、蒸し暑い路上を、母親の借着で汗ばみ乍ら歸つて來た。計助は昨夕と變りなく元氣よくひよこひよこ歩るいて來た。花火と、どんちん〳〵は實家の若い祖母に買つて貰つたので、彼は得意だつた。

送つて來た父親の口から、つたの身に起つた次第を聞い

た姑は、へらへらと笑つた。
「つう公、おめえ、そりや流産だんべ、出たもの持つてるかや」
「何だか知らなかつたけど、あれにくるんであるわ」
「じや、そいつ産婆さんに見て貰いや。之で三度目だよ、拵へちや流していや世話入らねえやな」と、おせきは又、へらへらと笑つた。おせきの弟である父親は、默つて茶を呑んだ。
山下へ歸る路すがらを、父親が産婆の家へ言傳てゝ呉れたので、産婆はすぐに來て呉れたが、之は醫者に診せた方がいいと云つたので、つたは晝飯も食はずにS町の醫者へ産婆が新聞紙に包んで呉れた昨夕の下り物を抱へていつた。醫者にもすぐ判斷はつかないから、明日・大學へゆく序もあるから調べて來ると云つて若い醫者はそれを受けとつてつたを歸した。蒼白く窶れて見へたが、つたはいつもと格別變つた樣子もなく、しやんしやんと歩いてゐた。そして、その日も畑へ出て、陸稻の草むしりをしたのだつた。
その翌日も亦、ぎらぎらとした陽が朝から照りつけた。今日も夕荷を出す日だから、胡瓜、茄子、トマトを切らなければならない。
つたは赤坊をおせきに頼んで、およねだけを石油箱で作つたガラガラ車に乘せて出て行つた。
地熱を煽るやうに放射する太陽は、まぶしくつたの眼を刺した。いつか、ぐら／＼つと恐ろしい眩暈がやつて來さうな頼り無い不安が體中を締めつけるやうに襲つて來た。
つたが引つ張つてゆく箱車のガラガラツと四邊りを掻き立てる騷がしい音が、遠くの空で鳴り響く雷のやうに彼女の耳朶を掠めた。
「ひよたひよた、てめえの歩るきやうはまるで鶩の火事見舞ひ見てえだぞ」
「いいわどうせ鶩だ、計公もおよねもみんな鶩の子だあわ」
いつもの冗談を、今日のつたはくりくりと突き上げて來る憤ろほしさで云ひ返した。
干し草の上にぺたりと足を投げ出すと、つたは思ひ餘つたやうに前掛けの端で額の油汗を拭つた。
「愚圖々々抜かす間に稼げや、なあ、よね、母やん馬鹿だなあ」
「母やん、馬鹿じやねーや」

「何このあま」友造は拳を振り上げる眞似をした。よねは母親の肩を掴んで父親に挑戰すべく、幼い不自由な體をぐいと曲げていいをした。
　歩兵一聯隊を除隊すると一緒に肋膜を病つて、季節の變り目事に友造の健康はよくなかつたので、彼はめつたに笑つたことなどない。
　つたと無駄口を利いて笑ひ合ふことなどやたらにない。けれど、よねや計助には父親らしい愛情を示して苦い微笑を洩らすこともあるのだ。つたはそれだけに滿足してゐた。
「よね公、母やんの代りに茄子切つて呉れや」
　つたは腰を叩き乍ら、鋏を投げ出した。
「危なくつたつて、母やんもうかなはねえんだよ」
「危ねじやねえか、馬鹿」
「駄目だぜ、本氣にやらなくちや、切り終へねえと始末が惡るいや」
「そんなこと云つたつてよう――」と、つたは幾らか甘へ氣味の鼻聲を擧げてどつこいしよと立ち上つた。
　お豊の野辨當をおせきが下げてやつて來た。
「食ひに來る間に、一とつ切りでも片がつけられべえからな」
「よね、ばあがまんま持つて來たぜ、行けや」
「俺あ、よねに關つてられねえんだよ、さい公を縁側に寢かして來たんだから。それからなんだよ、今、醫者が自動車でやつて來たんだよ、昨日のあれは流産だから、後の手當をして上げるつて來たんだよ、そいから、なあに、私共じや、もう流産なんて度々の事で、それに節季に寢かしても置かれぬから、今日は畑に出しましたつてつたらな、そりや飛んでも無えこつた、そんな無法なことしたら命に障るつて吃驚してたぜ。又、惡るいやうだつたらお頼申しますつて俺突歸してやつたんだよ」
「流産ならそれで解つてるんだからね」と、つたも呟やいたが、油汗がたらたらと體中を押し流すやうだつた。
　救はれ難い寂しさ、空しさが、つたの目頭へと熱くやつて來た。
　友造とよねは辨當の包みを解いて重箱の麥飯を箸でこつこつとつついた。
「母やん、おぶふ飲みな」
　よねが小さい手で持ち上げた土瓶の湯がこぼれて、地面につうと浸みていつた。つたはじつとそれを見てゐた。長い長い生涯を通じての今日の今といふ時が夢ではないのだと思ひ乍ら。

四、七、一二



ムツイリイ（つゞき）

丸山秀平

これはロシヤ文學の母と呼ばれる**レールモントフ**の叙事詩の翻案である。ムツイリイはグルーヂヤ語で、日本の寺院の小僧といふ意味である。内容は現代とは可成りかけ離れたものではあるが、併し、十九世紀初頭にロシヤに勃興した個人主義的ロマンチーズムの破綻を示してゐる點に於て、現代の思想と對照される場合、非常に深い暗示を與へるものと考へる。

五

チオルヂヤの處女は頭の上に水瓶を戴せて河岸の方へ下りて來ました。
彼女の頰や唇は、暑い夏の日に照されて、林檎のやうに赤く燃えてゐました。眼は深々しく、黒く、あまりの美しさにわたしの胸はあやしく躍りました。
彼女の姿を眺めながら、わたしはうつとりと暫く夢心になつてゐました。そして、たゞ水を汲む靜かな水瓶の音と、が

さ〳〵といふひゞきを、ぼんやり聞いてゐました。

やがてわたしが氣づいた時には、彼女はもう遠くの方を歩んでゐました。足音を忍ばせるやうに、しかし身輕に歩んでゐました。

ふと見ると、さう遠くもない處に、冷々とした霧につゝまれて、夫婦のやうな二つの草屋が、岩にくつついて立つてゐて、一方の平い屋根の上を、うす青い煙が流れてゐました。

六

酷く疲れてわたしは樹蔭に横たはりました。そして、いつか眠りに誘はれて、心うれしい夢路を辿りはじめました。

わたしは、あのチオルチヤの處女を夢に見て、不思議に甘いなやみを覺えるのでした。

ぐつすり幾時を眠り過しましたか、わたしが目覺めた時には、もう月が頭上に光つてゐました。たゞ一片の雲が、獲物を捉へようとしてゐるやうに、月のほとりへ忍び寄つてゐました。

世界は暗く、静かでした。

雪を被いだ遠い山脈の峯が、銀の總のやうに光つてゐました。晝間見た草家の中で、燈火が點いたり、消えたりしてゐました。そのやうに夜半の空でも、星が瞬いてゐました。

わたしは、空へ昇つてゆきたくなりました。が、それは出來ないことでした。

その時わたしが心の中に抱いてゐたものは、せめて故郷へ歸りたいといふ願ひでした。それ故にこそ、飢えの苦痛をもよく堪へ、やがてとぼ〳〵と歩み出したのです。

しかし、森の奥へ進んで行けば、目當の山も見えなくなつて、たう〳〵わたしは道に迷ひはじめました。

七

わたしは、人一人通つた跡もない難處を、ひとり踏み分けて行かねばなりませんでした。時々氣違のやうに、蔦がからみついてゐる荊蕀の茂みを引き拔いたり、また掻き分けたりしましたが、無駄な骨折に過ぎませんでした。

四方は氷劫の森林、森林は、一歩入り進む毎に暗く茂りまし、暗闇は灌木の枝蔭から、無數の眼でわたしを睨めつけてゐるやうで、つひにわたしは恐しくなつてしまひました。恐しさのあまり、卒倒しさうになりました。

わたしは急いで木に登りはじめました。が、森林は天の果まで伸びてゐるのだ！と思ひ知つた時、力も拔けて地上に落ち、わたしは前後を忘れて泣きました。

しかし、わたしは人の救ひを求めようとはしませんでした。曠野に住む獸のやうに、わたしは人に馴れることを永久に願はなかつたのです。

もしその時、わたしの舌が苦しさのあまり、人の助けを呼んだならば、わたしは立所に舌を咬み切つてしまつたでせう！

八

幼い頃から我慢づよく、修道院に暮しながら一度も泣いたことのないわたしでした。

しかし、森林に迷ひ、身體も疲れてまつたく望みを失つた時には、我を忘れて泣き崩れました。

わたしの目の前には、苔に被はれた砂原が、月の光に照されてゐました。そのあたりに、突然何ものかひらめき、二つ

の火玉から、ぱつと火花が飛び散りました。
間もなく一匹の野獣が、一躍で茂みの中から飛び出し、砂の上に横たはりました。
それは、永久に曠野を住家とする、獰猛な豹でした。
豹は、何かじめ〳〵した骨のやうなものを噛み砕いたり、こゝろよげに吼えたりします。
火花が散つたやうに見えたのは、豹が尾を振りながら、月に向けた兩眼の光でした。月の光を浴びて、全身の毛が銀光を放つてゐます。
わたしは、角のある堅固な枝を、音を立てぬやうにそつと手に取つて、氣息を凝しながら、戰ひの瞬間を待ちました。戰ひに飢えたわたしの胸は、烈しく躍るのでした。
その中に、豹も暗闇の中に敵が潜んでゐるのを嗅ぎつけたのでせう。訴へるやうに、唸るやうに聲をひいて吼えました。そして、腹立たしさうに掌で砂を掘りはじめ、後足で突立ち、それからそつと身を伏せました。
一躍飛びかゝられゝば、もう最後です！ それを恐れたわたしは、勇ましく機先を制しました。渾身の力を一枝に籠めて、素早く豹の額を擲つたのです。
豹は、人間のやうに唸りながら、でんぐりかへりました。傷口からは血がどく〳〵流れ出ました。が、豹は弱りませんでした。
それからしばらくは、豹とわたしは必死に鬪ひつゞけました。

九

豹はいよ〳〵猛り狂つて、わたしの胸を目がけて跳りかゝりました。が、その時早く、わたしは得物でその喉を突き、二度も擲りつけました。

豹は苦しさうに唸りました。しかし、忽ち全身の力を奮ひ起して、ふたゝび跳りかゝつてきました。
わたしと豹とは、二匹の蛇のやうに組み縺れ、かたく抱き合つたまゝどつと倒れました。倒れても、まだ闘ひはつゞけられました。
霧があたりを閉ざしてゐました。
わたしはその時不思議にも、野に住む豹のやうに野性になり、兇悪になりました。全身は火のやうに燃え、豹のやうに吼えるのでした。
わたしは自分ながら思ひました。
「自分も、冷々する森林を住家とする豹や狼の類に生れてきたのではあるまいか？……」
と。そしてわたしは、人間の言葉を忘れたやうに、野獣のやうに叫びました。
流石の豹も、だん〳〵弱つてきました。もう足掻くやうになり、呼吸も大變のろくなりました。
ふたゝびわたしを搾めつけましたが、それが最後の、豹の努力でした。
見据えた兩眼が、急に恐しく輝きましたが、間もなく永劫の眠りに落ちて行きました。

一〇

わたしも深い爪傷をうけました。
しかし、必死のその場合、どうして傷のことなどに關つて居れませう！
わたしは殘りの力を集め、ふたゝび出口を求めてのろ〳〵歩みはじめました。

一一

どう辿り歩いたのでしたらう、わたしはやつと森林の中から抜け出る事が出來ました。
その時はもう夜も明けて、旅人にはなくてならぬ空の星も、いつの間にか消えてゐました。
霧深い森林が、ざわめいてゐました。
遠くの方で、小さな部落が煙を立てはじめました。
定かならぬ反響が風に送られて、谷間の方から聞えてきます。
わたしは坐つて、じつと耳を澄しはじめました。
が、その怪しい反響も、風が止めばぱつたり止んで、あたりはまつたく靜まりかへるのでした。
わたしは四方を見廻しました。見廻せば、どうも見覺えのある處——わたしは、はつとして、急に恐しくなつてきました。

わたしが心を勵まし、幾日か飢をを忍び、疲勞にうち勝つてきたのは、みんな何の爲めでしたらう？
それは、修道院から逃れ出て、自由な世界を見たい爲め、せめて一度、なつかしい故郷の土を踏みたい爲めでした。

しばらくわたしは疑つてゐました。そして、
「これはきつと恐しい夢に違ひない！」
と、思ひました。
その時、突然鈴の音が、遠く靜かにひゞき渡りました。始めてわたしには、すべてのことが分りました。

あゝ、それは、長い月日聞き馴れた鈴の音でした！修道院に住みながら懐しい故郷の友や、親や兄弟を思ひ浮べてゐても、また、人影もない曠野の自由に憧憬れてゐても千里を馳ける駿馬の夢を見てゐても、一聲鳴れば忽ち心を冷して、わたしの眼先に高い、暗い壁を浮ばせた——無情なその鈴の音でした。

わたしはもうがつかりして、涙も浮べず、ぼんやり鈴のひゞきを聞いてゐました。すると、そのひゞきは、丁度誰かゞわたしの胸を鐵の棒で打つてでもゐるやうに、自分の胸の中から發して來るやうに思はれました。

わたしはその時朧氣ながらも、到底故郷へは歸れまい、と思ひました。

二

燃えるやうに暑くなつてきました。

わたしは、疲れた頭を草の中へ埋めました。が、草の枯葉は痛く頭を刺し、土から立つ湯氣が、顏を息苦しく匍ひまはる。

白茶けた岩々からも湯氣が立ち上り、火花のやうなものが、素早くぐる〳〵と空間をめぐる。

見渡す限り、自然はうと〳〵と重苦しさうに微睡んでゐました。

その時、せめて水鷄なりと鳴いてくれゝば、或は、小川の水音なりと聞えて生氣を與へてくれゝばよかつたが、しかしたゞ一匹の蛇が、黄ばんだ背面を光らせながら、枯草の中をのろくさ匍つてゐるばかりでした。

空は輝しく、靜かでした。

一面に立ち上る湯氣を透かして、遠く二つの山が黒ずんで見えました。一方の山蔭から、でこぼこした修道院の壁が、きら〳〵光つてゐました。その下の方を、アラーグワとクラーの二つの河が、白銀のやうにひらめきながら、ゆるやかに

流れてゐました。

わたしは立たうとした、が、焦ひがして立てませんでした。叫ばうとしたが、舌は乾いて動きませんでした。

ふと、わたしは、深い河の底に寝てゐるやうに思ひ出しました。

あたりには、秘めやかな霧が立ち籠めてゐます。長い間堪へて來た渇を癒しながら、氷のやうに冷い流れがわたしの胸へ注ぎかゝる。わたしは快くうつとりとなつて、眠るまい、とひたすら努力するのでした。

頭の上では、樂しさうに、波と波とがせめぎ合つてゐる。その硝子のやうな波を通して、月光よりも心地よく太陽が照してゐます。その輝きの中を、さま〳〵な魚の群が泳ぎまはつてゐる。その中から、特に一匹の小魚を、わたしはよく覺えてゐます。

その魚は、他の魚よりも一層愛想よくわたしに甘えかゝつたのでした。背は金の鱗で美しく被はれてゐました。眼は青く、もの深くて、何ともいへぬ程、いちらしい小魚でした。（あと九月號）

編輯後記

團 かづえ

御病氣で轉地なすつた池田さんに代つて奥さんの手元で働かせていたゞく事になりました。

つひ二三日前頃から手を出しかけたばかりで今日はもう八月號の原稿を印刷屋の方へ廻さなければとのこと不馴れと慌しさで、何も出來ないで了ひました。

やるからには眞劍で打ちこめる仕事が欲しい――そう渇望しつゝ、沈滯し切つた生活のどん底に、矛盾と、昏迷と、焦燥と戰ひつゞけて來て未だに判つきりした何ものをも摑み得ないでゐる現在の私に、果して、目覺ましい闊歩を續けてゆく奥さんのあとから、ついてゆけるかどうか、殊に社會性に乏しい自分の素質なぞ思ふと、覺つかない不安さを感じないでもありません

然し、此度こそ、一切を投げ出してかゝれる氣がします。そして婦人運動を、もつと良くし充實させることに、この久しくはけ口を塞いでゐた熱情を注がうと思ひます。無經驗、無智の色んな缺點を、激しい、この一つぱいな氣持だけで埋め合はせてゆかうと祈つております。

多樣な社會の各部門に進出しつゝある婦人たちの多くにとつて本誌の信條が、啓もうの鍵ともなり、自覺への階梯ともなりますように讀者の皆樣の御後援を切望致します。

あらゆる社會的苦惱の渦中に幾重もの殼を脱すべく戰かひつゞけてゐる現代の女性たちは何を要求し、何を惱み、苦しんでゐるか、それらの一つ々々を誌上に反映する事によつて、より明確に私達は自己の周圍を批判し、眞實なものを把握しなければならないと思ふ。

八月の炎暑にも屈つせず生活戰の眞唯中に在る同志たち、工場に、職場に、農村に、或はオフイスに…どうぞめい〳〵の確りした歩みの中に生れ、出づる惱みを、黎明への努力を體驗して下さい。

その一歩々々が、開放への一歩々々であるように。

むめお記す……

池田さんの代りに團さんが主として本誌のお守り役になつて下さつた。はちき返すやうな、潑溂とした團さんに育てられて本誌も一層熱に燃え元氣になつて讀者のみなさんに若返り法を傳授するに至るでせう。

「職業婦人の家」の基金の報告は全て別册附錄にのせてゐますから御覽下さる樣。そしてもう一息です、お援助下さい。

昭和四年七月卅日納本
同　年八月一日發行（毎月一回一日發行）

誌代は全て前納にして下さい、送金は振替が一番便利です、誌代領收の證に雜誌を發送す

郵稅一錢	一部……25錢 一年… 1,40圓 半年… 2,80圓	前納誌代

發行及印刷人　奥　梅尾

發行所　東京市牛込區市ヶ谷本村町四　職業婦人社　振替東京六四一六〇番

國際文化

八月號

東京市神田美土代町二の一

白揚社

定價 五十錢（送料二錢）

始めて出た僕等の全集!!

少年冒險小説全集

少年諸君の爲に素晴しい全集が出ました。作品は全部大評判の長篇傑作揃です。

全十二册　一册50セン

番號	書名	著者
1	ひよどり草紙	吉川英治
2	角兵衛獅子	大佛次郎
2	あゝ玉杯に花うけて	佐藤紅綠
4	少年科學探偵	小酒井不木
5	吳田博士	三津木春影
6	怪盜追擊	佐川春風
6	安政辻占曾我	行友李風
8	馬賊の歌 其他	有本芳水
9	銀蛇の窟	高垣眸
10	少年義錄	大倉桃郎
11	難船岬の怪	瀧澤素水
12	渦卷く濃霧	橫溝正史

新四六判各册四百頁最上製美本

會費（毎月拂 五十錢（送料八錢）一時拂 送料共六圓

◆申込金不要

締切 八月十日

東京麴町下六番町　平凡社　振替東京二九三六九

大正十三年十一月二十二日 第三種郵便物認可
昭和四年七月三十日 印刷納本
昭和四年八月一日發行（毎月一回・一日發行）
婦人運動 第七巻 第七號 定價二十五錢

婦人運動 附錄版

──奥むめお──

飴やのおぢさんは、今日も雨が降るので商賣は休みでした。

妹「あたいにも飴がほしいよう」

兄「トウちやんは、お錢持つて來なきあ呉れないよ」

妹「お錢──トウちやんの財布にあるぢやないか。トウちやん、飴おくれよウ。お錢おくれヨウ」

初めて新しき自動車の發動機を完成したビウイツク氏は、彼が發明した自動車のたつた一臺をも持つことなしに實業學校の一貧乏教師として、侘しく死にました。彼には資本がなかつたのです。そして資本の提出者であつたデユラントは實に彪大な權利と儲けを獨占しました。

田を作るのも機を織るのも、書物を出版するのも、病傷の診察や──學問をするのでさへが、それに依つて金子をえんための人間の營みにすぎません。

かういふ成立ちの上に立つ今の社會の改造を志すことなしに、この世から人間の不幸を取除くことは出來ません。

雀のさへづり

長野に於ける懇談會席上での秀逸

「だん〳〵忙しくなつて、働く親のために子供をあづかる託兒所や幼稚園が殖えてゆきますね」

「子供は託兒所へ、病人は病院へ、そして厄介な老人は託親所（たくおやじしよ）へといふことに、私らが老人になる時分にはなるのでせうか」

「さうなつたらさしづめ、私たちは一つ庇の下に寢起きしなければならぬ身分のもの同志どうぞみなさん、その節はよろしくお願ひいたしますよ」で呵々大笑。

「そして、老人の歌や遊戲といふのが考案されて、歯の拔けた口から弓のやうに曲つた腰でヨイ〳〵……」

忘れもの

「お忘れもの」の名人は奥むめおさん。

こないだ、講演旅行から歸つたあとを追かけるやうにして屆くわ屆くわ。

電車の定期劵──長野驛から。

寢卷、萬年筆、婦女新聞綴り──長野から。

櫛、手拭ひ──金澤から。

揚子、古草履──名古屋から。

汽車の切符──福井から。

手拭ひ、大阪驛留置小包み──大阪から。

財布──神戸から。（但、これはあとで氣がついて逆戻りしたさう）

逝けるカアペンター

イギリスが生んだ田園詩人――而も彼は、大學延長運動に參加して巡回講師になり、社會運動にも携つて好んで街頭の宣傳演說をしました。彼は、哲學者、詩人、社會評論家として有名だつたばかりでなく、兩性問題、戀愛問題等についてもその著「戀愛成熟期」に彼獨特のすぐれた意見を述べてゐます。

×

「戀愛成熟期」はすでに堺利彥氏に依つて邦譯せられてゐますが、彼はこの著述の終りの「自由社會」で次のやうに云うてゐます。――「混亂より分明に向ふ」のがあらゆる進化の實際の傾向であつて、男女の關係だけが是に外れるといふわけにはゆかぬ。今日、人々は戀愛のことに關しても何

白いものゝ晒し方

ある專門家の硏究によると、しやぼん水に汚れ物を漬けておく時間は七分間が丁度よいさうです。それより長いと溶解したシミが又喰付きます。

綺麗に洗つてよくすゝいだものを、晒し粉一つまみを一斗位の水によく溶かした中へ一時間つけておくと、白く晒されます。更に藥り屋で、靑味を買つて來て、うすい水に溶かした中へ浸し靑味をつけると底深い白さになります。(晒し粉も、靑味も安いものです)

汗のシミの取り方

霧吹きに揮發油を入れて汗のついた部分に吹きかけます。更に、アルコールを五倍にうすめた液に醋酸をちよつと滴して、それを吹きかけるのです。汗のシミは、氣がついたらすぐとること。あとになる程とれにくいものです。

夏の髮の手入れ

一ヶ月に二度位はぜひお洗ひなさい。運動のはげしい人、汗の多い人は一週一度に洗ふこと。洗髮料はソーダの入つたものは毛に毒うどん粉とふのりを煮たもの、椿の油かすが一等よろしい。

日本髮の人は別ですが、髮を洗ふ前夜に、植物性の髮油をよく毛根にすり込んで一晚おいてから洗ふ。それが出來なかつたら、洗ふ前に脫脂綿で油をよく〳〵毛根にすり込んでから、洗うとよろしい。洗つたあとですゝぎ

■……おたより

神こと子氏――(東京より)

……(前略)もう少したつと、この邊のすいかも熟れますし多摩川の水泳もよろしうございますから お子樣方御連れになつてゆつくり御出かけ下さいませ。

私も折角よいお集に引き出していたゞいても頭が空つぽで少し泥繩と笑はれて居りますが、この頃每朝四時から六時までを家族中の勉强時間に決めて少し本を讀んで見るつもりで意氣込で居ります。どうぞ讀んで置くべき樣々の本を御敎示下さいますやう。朝はとても能率が上ります。夜分、居眠りしながらやつてゐるのと違つて……。

今日の會合は、子供が旅行に出かけるのにズボンを一つこしらへ上げねばなりませんので何ひかねますが、其內東京へ出ましたら何はしていたゞきます。時節柄おからだ御大切に。

婦人消費組合のマークの考案、たしかに引うけました。

木下まさえ氏――(長野より)

來る年も來る年も連續で不景氣のどん底にあるこの農村では、今の所とても〳〵出てゆく道のない位、考へると暗い氣もちになつて

と幼稚なことであらう。百花を採つて强いて一つの型に入れやうとし、その生氣ある美色を奪ひ去つて泥土に委せやうとしてゐるやうなものである。

成熟した新社會では、人間の愛情にも種々な方式と種々の職分のあることを認めるのであるが、それは男女關係の混亂と無秩序を意味するのでは決してない。

結婚に依つて、男も女もが生涯の道づれを得ることは最も望ましいことではあるが、さりとて、今日の結婚法のやうに二人が永久に一つの家に住んで鼻つき合せて食卓に向ふか、さもなくば全然赤の他人になつてしまふ如き、又、男女の交りに、正式のものと犯罪的のものと、結婚と姦淫との二つしかないとする窮屈な見方は、多くの混亂と誤解を招くもとである。もつと自由に多様な交りがありさうなものである——

水に油を滴す方法はよくありません。



文化住宅の夏

燒きつく様な暑い日も涼しい夕に洗れて、重たるい體も幾分輕くなる頃、文化住宅のクイーンはお櫃をかゝえてドアの外に現れる、お櫃の中には炎暑の犧牲となつた殘飯がつめられてゐる。そしてその墓場となる塵埃箱をかこんで、餓えたワン公が先を爭つてゐる。

赤い屋根の文化住宅の隅には毎夕こんな光影が、現出されるのである。

しまひます。方々でひらかれる農民大會等も確とした結論もなく散會になつたり、又思ふ事も存分言へず中止を食つたりして、前途遼遠の様な氣がいたします。

併しこの不況を救ふは婦人の自覺にある様思はれます。

婦人が團結してうんとやつたらどんなにこの社會がすみよくなることでありませう。最も憎むべきは家長たる家庭の暴君であるのです。一にも昔、二にも昔と、いいもわるいもわからない無理解な家長の下にあつて働いたんでは立つ瀬がありません。因習でかためられたこの頭をどうしてとくことが出來ませう。言へば言ふほど、怒るばかりでなんの役にも立ちません。現在の社會にあつて未だに妻や子を物品扱ひしてゐる家長。働かして働かして、まだあきたらず小言を並べていばりちらす無謀な家長、ほんとに憎むべきは現存せる家長制度です。それ故思ふ事も出來ず、言へず、矛盾であらうがなんであらうが默々として働かねばならない家庭の奴隷なんです。

本をよむなんてことはもつての外、字をみることは大禁物なんです。そんなわけで本の代を下さいなんて、言つたもんなら大さはぎ、くめんにくめんして貯金して來た錢代も、お怒りすることも出來ず全たくおはづかしい次第です。

母、家、故郷

平田のぶ



窓の障子に朝日がさしてゐる。母は流しに立つて茶碗か何か洗つてゐる。朝日のせいか、いつになく母の顔色が生々と赤い。私は何となく晴やかになる。用もないのによんでみたくなる。

夏休みの近い或日、

「兄さん歸るで小菜まきに行くか」

鍬をかついだ母の後について私も畑に行く。

「もうなんぼしたら兄さん歸るの」

など又しても同じ事を聞き乍ら。

母がなくなつてもう二十五年、でも私には今もやつぱり母がある。

父も叔父ち兄も姉も弟も妹もあの家で生れ、あの家で大きくなつたのだ。黒光のする柱、雨戸の樂書、よく鼠の入る戸棚、裏庭の大栗の木、中庭の梨の木、木小屋の前のいちじく、石垣にのり出した柿の木。今は凡て人手に渡つて了つたが私には今もやつぱり家がある。

初めての遠足の歸り。幼い私を今更のように驚かした新山のなぞらかな肩つき。かくれんぼした藁ぐらの感觸足の裏をくすぐつて流れる小川の小砂、朝毎にみに行つた鐵のからすうり……故郷を去つて十數年、人變り物移つたらうけれども私には今もやつぱり故郷がある。

三つ半で「お引越し」を三度も經驗させられた惠坊には家もない故郷もない。

いや、都會人の總てがさうなのだ。人情に薄く仕事に誠意がなく生きる姿が輕薄だとて何の不思議もない。しつかり地についた歩みぶりの出來やう筈がないのだ。惠坊のために家がほしいと時々思ふが、それより一層、婦人のための、婦人の協力になる我等の家がほしいと思ふ。我等を育て、いこはせ、しつかとよりどころとなつてくれる我等の家が。

どんな苦しみでも働かねばならない私達の生活。思ふ樣にならないなんてこの家を飛び出したもんなら明日から私達は饑に泣かねばならないのです。

かうした苦しみの中からも去る日、一人の男の子の母となりましてから、よけいにしつかりしなくてはと言ふ樣思はれて來ました。先年お願ひして産兒調節の樣子色々御知らせ下さいましたのに、其時すでに妊娠してしまつてゐたのでした。

愛川しげ子氏――(廣島より)

袋二十枚分と私の寸志別途御送付申しておきました、おそくなりました。

先日當市の市議の改選が行はれました、始めて無産黨から一名當選なさいました。嬉しかつたです。最終日の三十一日に默つて演説會をきゝました、實に素破らしかつたです。山道代議士の演説會處ではありません。講堂外を卷いた群集は十重二十重で、中に若い女性が多く見受けられた事は心中ひそかに嬉しい事でした。年寄達には餘り受けられませんが、若い人達は拍手の連續でした。

内山行雄氏――(長野より)

お達者で日本婦人の爲め、いや私達人類の爲めに一層御奮鬪の事と存じます。そして時折り私達が三ヶ月間を學んだあの山の學校の事どもを思ひ出して下さる事と思ひます。

過ぎし日の夕べ、あのせま苦しい先生のお部屋で先生をまん中に、眞理を求めて燃えて

△問答欄▽

〔問〕お恥しいことですけれど、どういふ婦人團體があつてどういふ方面の仕事を私たち婦人のためにしてゐて下さるのでせうか。出來たらそれ〴〵の所在地及び機關誌發行の有無も敎へて下さい、

（長野市　無名女）

〔答〕

東京及びその近縣を網羅するものに東京聯合婦人會（『聯合婦人』）があり、大阪を中心にして南は臺灣の涯から富山新潟の北陸の隅々までの地方的婦人會を聯絡させて全關西聯合婦人會（婦人）があります。そして、

政治運動
- 日本婦人參政權協會（婦人矯風會所屬）
- 婦人參政同盟
- 婦選獲得同盟（『婦選』）
- 社會民衆婦人同盟（社民黨所屬）
- 全國婦人同盟（日本大衆黨所屬）
- 東京婦人市政研究會
- 日本婦人公民權協會

經濟運動
- 勞働婦人聯盟（『勞働婦人』）
- 職業婦人協會（九月より機關誌發行）
- 產業組合婦人會（各地の產業組合や消費組合に所屬して有）
- 婦人消費組合協會（來月より機關誌發行）

敎育運動
- （同業組合のやうな美容會とか女醫會とかを除く）
- 女子敎育振興會
- 女子學生聯盟

然し、分類の仕方を變へると現在の婦人團體の方向をもつと違つた風に見ることが出來ませう。例へば、

- 女權運動
- 母性保護運動
- 職業中心運動

矯風運動
- 排娼聯盟
- 禁酒同盟
- 少年保護婦人協會

宗敎運動
- 佛敎婦人會、佛敎女子青年會
- キリスト敎婦人矯風會
- キリスト敎女子青年會

國際運動
- 婦人平和協會
- 國際聯絡婦人委員會

愛國婦人會（『愛國婦人』）
女子青年團、處女會（『處女の友』）

それが婦人運動である限り、どの婦人團體でも男子の地位とは大分劣つてゐる現在の婦人の社會的地位をいろ〳〵な方面から向上させやうとする目的は含んでゐますし、母性保護兒童保護の主張も當然にもつてゐます。職業的に同じ立場に立つ者同志の團體にも、地方的婦人會にも、政治團體にも。何れ、社會的に目ざめた婦人が、階級戰に合流しやうとしてゐる傾向も見逃してならぬと思ひます。

ゐた私達の氣持、そのさえてゐた瞳は生々としてどんなにか力强い光で輝いてゐた事でしよ。

あの何から何まで親切に然も徹底した先生の御講義には只だ私達はあつい感謝と感激の熱涙にむせんでゐたばかりです。

（この處五十字略）………

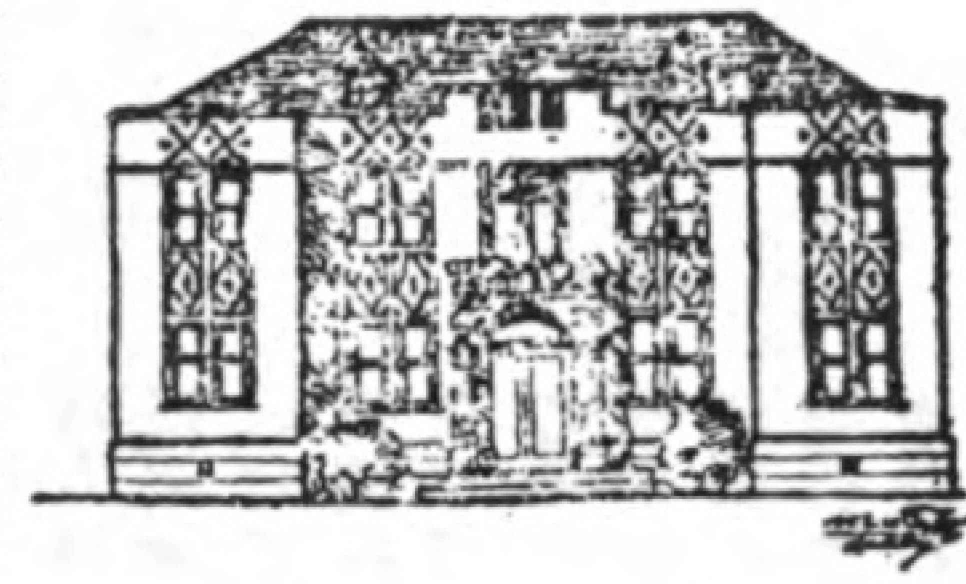
北信の高原、それは私の生地、ふるさとなのです。幾日月か山の學校できたへ上げた私を妹達は長野驛まで迎へに來て呉れてました。そこから製絲工場の須坂まで電車で來ると、そこからはもう近い高井の村、私の故鄕なんです。乏しい暮し、わびしい生活、ですけれどふるさとの自然丈けは大歡迎で迎えて呉れました。

着いた日の夜は妹達や二三の同志にかこまれて一晩中山の學校の話や思ひ出に眠られませんでした。すぐ近くには飯綱、黑姬、妙高などの連山と、西に日本アルプスの雄大な雄姿を望める事ができる土地です。

× × ×

今日、山の學校で一緖に學んだ友人の土田君からこんな意味の便りがとゞきました。

彼は私達と離れて彼の鄕里に歸つた時、とうからの許婚の女は彼を完全に裏切つて了まつたのです。そしに村の人達も彼を反逆兒視し異たん者扱ひに遠ざけて了まつたのです。何んと無知なそして冷たい世の人達ばかりなんでしよ。彼は唯だ我が子を待ちに待つてゐ



職業婦人の家

募金報告

（6）

樺島道子(八)、吉川とり子(二)、小川はる、川上とも枝、和田とし子、松川敏惠(四)、平野菊子、貧某氏、無名氏(五)、川野そで、佐野君子、川野榮子、佐々木よし、番匠あい子、坪田その、影山榮二、羽生みち、佐々八郎(五)、若宮助一、加藤正之、君島しん子、みやまつゆ(五)、岡部ちか子、櫻川素子、八木とり、和久本菊野、原まさ子、谷口大八(一〇)、鎌田賢三、加藤大五郎、淸水矢次郎・片山密(五)、小松雄藏、色山つや、片山あい、山崎權一、吉村松雄、花本某(五)、一愛讀者(五)、若杉みちえ、成田政勝、大川某、內山喜榮治、丸山善平、佐藤新、森忠勇・本俠廳、西川忠雄、平石磯松、伊藤吉兵衛、須藤叙吉、三澤光明、小川岸郎、長谷榮吉、若月一三、水戸鄕、馬場雄二郎、三橋太郎、鈴本正明・川村喜一、小林茂、村松とよ子、非上等、山形平五郎、萩原宅重、若月善平、島田儀平、國井勝雄、

丸山國次、長谷さわ、齋藤澤治、東條忠三郎、三村五郎、芦澤浚、酒井要作、河口榮作、伊藤重一郎、二階堂淸壽(五)、加藤なほし(二)、蓮岡(三)、大田道子(五)、荒村柳子、栗山龜之助、小幡歌子、大野花子(四)、荒木錦子(五)、小島幾惠(五)、母之會有志(六)、野田正吾(二五)、加瀨つね子(五)、千葉とき子(二・五)、山本長平、大月かつ(一・五)、谷川、長岡秀國、中山儀三郎、谷口謙亮、西脇秀太郎、廣岡平佐衛門、友部剛、岸川善二、三尾又吉、小西正夫、櫻間大丈夫、小宮彦次、高野夢、小松幸之助、小林松子、山野野枝、佐口川房尾、夏川凉子、栗本勝秀・土屋とえ子、鈴木素々子(二)、篠原鈴子、池田やえ、代見ながめ(五)、旗野フク、木村たつ、高橋ムキ、高橋八重代(五)、榊原むめ子(十)、中村良造、君島松枝、笹岡春・小川勝(二)、小石川勝重、小石川こと子、笠原秀、元野榮、小野房子、佐々原まこと、高山源造、磯島蝶子、平山よしえ、廣瀨八太、樺山三千代(二)、無名氏(一〇)、前田きくの、大道寺まもる、吉野久野、原政代、柳久子、釜谷あい、中村とく子、坪田みち子、片岡陣重、片岡まん、小手島愛子、花島流水、手島某(二)、山田琴子、宇野翠、福田一郎、飛鳥わか、下川四郎、和田粂八、天野よりえ、米谷洋吉、山川宗次、荒木セツ、五井田啓・粟山忠一、佐藤榮一、龜井政之(五)、舘石トマ、阿部五郎、千田太郎、村上ひさの、谷川文雄、伊東柳二、石川直、永井八重子、竹石

た母の温い心によつてのみ慰藉された丈けだと……。

私は彼よりのこの手紙を見た時彼女や村人の無知に堪らなく淋しくならずには居られませんでした。先驅者としての彼を異たん者扱ひに——想像した丈けでも——

なぜあの彼との堅い契ひを裏切らなければならない彼女であつたでしよか？　何んと皮肉な世の中ですね？

私達の前途にはこうした例はいくらもあります。然し自分の信ずる眞直な道に向つて闘ふことのみによつていつかうなずかれる時があるだらう。

山崎しづえ氏——（金澤より）

この手紙の御宅に參ります頃はまだお忙しい御旅行からお歸り遊ばさないかも存じませんけれど……

もつと色々お話を承りお話も申し上げたかつたのですけれど、幼いから一人ボッチに慣らされて極氣の弱い人間に出來上つてゐる爲に默し勝になつてしまひます。

どうぞ今後も、幼い心をお導びき下さいませ、ほんとうに何にも分つてゐない子供に過ぎないのでございます。

けれど、おぼろげながら婦人問題について、いろ／＼考てみたいといつも存じてゐます。

利雄、佐々木源三郎、藤岡文夫、安達啓、北條晃・佐々木千代吉、小林しほ子、小幡ノブ、大山ミチ子、林とし、米山さよ子、山田テイノ、白柳勝一、山内定子、長野良三(五)、江田悦夫、庄司ノブ子、小島とし(三)、山崎とし、大石昌子、梢本ともえ、久保田三重尾、大山ヤヘ、龜谷ムス、佐伯豊、山口享、太田ツヤ子、遠藤トミ子、和木田登、杉村千世、橋本フサ子、佐野きみ子、高柳基(二)、池田喜久雄、磯野時雄、熊本兼吉、井上章、花柳タイ子、小石谷一二、齋藤忠義、木村イク子、山口勇、寺島久司、秋元まつ枝、大川德子、村上しづ(二)、工藤八重子・義之保子、德山ひで子、松本倭文子・小早川あきら、飯島守一、吉川ひさ、青水アサ子、伊藤正吾、米田朝子、小町政男、弘田順、林毅男、田中浩一、長谷開子、月田マツ子、和田とみ子、森信一、間宮幸子、小泉太己、平田絮子、加茂初江、柳川利三、竹村とし、佐々木初枝、岸傚、田中めい子、古川とく、西まつの、佐々川小秀、阿部利男、内山吉郎、太刀川武、高垣一男、吉田君子・金田あい、市川こん、近藤まさえ、須永よし枝、寶田もつ、花柳正一、宮下鈴、伊藤敏惠、平非須賀、前田みな尾、奥田弘、富山よし子、四ノ宮飛龍一、大非とゑ子、神山殉、靖木明、笹野穰造、齋藤はる、大河内むめ子、岸川つぎ、鳩一郎、古谷啓子(三)、森正男、中山大作・山崎純吉、淺野とも子、今井榮一、若月二三子・塚本サト、小野木八重子・石川義子(三)、石川里子(二)、加藤たか子、池田あい、石塚愛子(二)・永井文子、早川美惠、小泉五郎、小泉さく子、加茂せん、水野房吉、堀越かづえ、大川田良子、下村澄子、木間まさを、平野おりき、山田たかえ、菊池ます、永島法子、大名山一郎、廣瀬某・無名氏(五)、鈴木さく子、竹林あき、吉永わき(五)、花田澄子、和田琴子、今松子、畑みち、佐々木君野、原田某(二)、吉本よし、時岡春子、木村貞代、今泉こん、伊藤敏子、磯野かず、鐵島花枝、桐野秋子、岡田敏子、(五)、時岡みち、大河内佐枝、鴻巣その、赤松某(五)・大石彼子、川島秀、桝本尾(五)、丸岡愛、吉本百合子、野々道浩一、高橋貞子、加藤たい、島中よし枝、島中榮助、奥田竹松、齋藤義雄、大木むつみ、榎本某、樺山小枝子(三)、君島きみ、鈴本勝子、德江雪乃、鳳高子・岸本一枝、能勢もと、川田司子、岡田光子(二)、和田みつ枝、和田美登、高山旭子、川上芳子、大河さこ、山内春子、加賀こん、千葉いち、志賀一郎(五)、延岡えん、花木錦子、竹内いち、官舘まつの、三崎貢、山川とほる、下川周子、笠本精八、山崎きく子、永田義、片岡道子、福島忠男、市川こと、笹本澄子、吉本花子、杉木靜子(三)、新井敬子、佐田貞、川手健一、大矢光、野村星水、高山なつ枝、高山浩、福島十郎、助藤某、川本

五圓以上の現金御寄附下さいました方々の報告は、まとめて次號にまはしました。

「職業婦人の家」に含むもの

第一次工事の豫定費として金一萬圓を募つてゐます。木造二階建て、總工費七、〇〇〇圓、設備費三、〇〇〇圓也。一、娯樂休憩のための靜かで快よい部屋と相當の設備。二、圖書雜誌新聞などの閲覽室。三、婦人のために各種講習會、講座研究會、協議會等に使用する大廣間及び教室、小集會室。四、科學的に設備の整ひたる共同炊事場。五、及び同樣の共同洗濯場。六、簡易宿泊に必要な設備。七、食堂。八、應接室。九、事務室。十、消費組合の店舗。

即ち、職業婦人のよき教室であり、慰安室であり、休息所であるやうに運營する豫定でゐます。この建物が職業婦人及び一般婦人の生活の上に、いかに多くの潤ひと新しき光りを投ずるかは云ふまでもないと思ひます。

どうぞ、一人でも澤山のお方からこの「家」のために獻金して頂けます樣お力添下さい。(むめお記す)



金澤講演會に於ける講師（中央三人）と主催者

◇金澤氏に初めての婦人講演會

六月二十五日に金澤市公會堂で、今井邦子氏（近代生活と和歌）金子しげり氏（婦人公民權の行方）奥むめお（婦人は寄生者か？）の婦人講演會を催しました。舊い城下町の金澤の婦人が、幾人位こういふ會合に出かけてゆくだろうか、といふ程度の興味しか人々にもたせてゐなかつたのに、若い知識的な婦人を大多數に占めて實に盛會でした。

永井柳太郎氏の出身地だけに、婦人の間にも政治的興味が深からうと思つてゐた期待は稍はづれて、今日の婦人の生活の實際問題に立脚した廣い意味での婦人問題が深く若い人たちの思考の中心になつてゐるのをうれしく感じました。

◇長野市の婦人界

歸りに同じ顏ぶれで長野市で講演をしました。

私ひとりだけ留つて二晩にわたる婦人懇談會に出席しましたが、特に家庭婦人の立場から、母性保護、消費經濟生活の合理化といふ方面の運動に入つてゆかうとしてゐられる婦人たち——忙しい主婦生活の間にも、もつと實のある婦人會を作つてゆきたいといはれる婦人が尠くないのです。これから度々お會ひしたいと思ふた婦人が尠くありませんでした。

◇婦人消費組合協會・職業婦人協會だより

二つの協會ともに、炎暑に熱闘して、ますます元氣です。九月から、本紙「婦人運動」附錄版を解體して婦人消費組合協會の機關紙と職業婦人協會の機關紙と二つに分けて發行する案が成りました。

職業婦人協會の方は、職業生活のあひまあひまに交代で編輯すること、成るべく職業婦人の實感を盛りあげること、電氣局の片岡さん、××生命の影山さんがまづ腕によりをかけて機關紙編輯の先陣を承るといふ筋書……

婦人消費組合協會は、時節から各婦人團體と連絡をとつて大いに活躍しなければ、と勇んでゐます。丸岡秀子氏が編輯主任。

婦人運動

低級な婦人雜誌の流す害毒について、漸く世人が心附いて來た時、七年の歴史をもつ「婦人運動」のまじめな主張が各方面から注目されてゐます。未だ本誌を御覽になつてゐない方はすぐ讀んで下さい

（一部廿五錢）

昭和四年七月廿八日印刷納本 昭和四年八月一日發行 「婦人運動」第七卷第七號（附錄） 東京市牛込區本村町四 職業婦人社發行
大正十三年十一月廿二日第三種郵便物認可